

27M85

福窓布案内



264

29



櫻之園 公西



社 神 雲 光





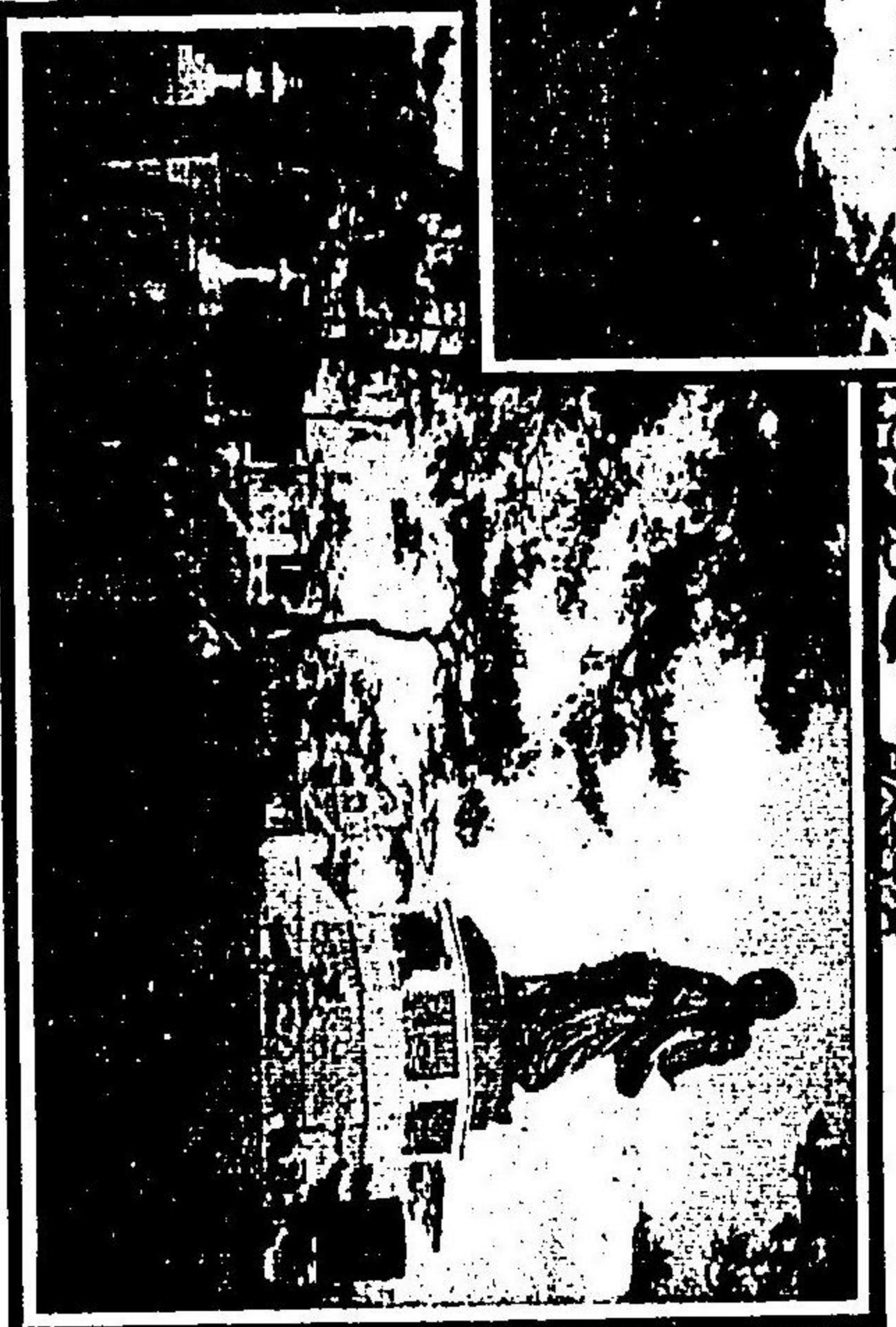
柳田神社



門樓之宮崎



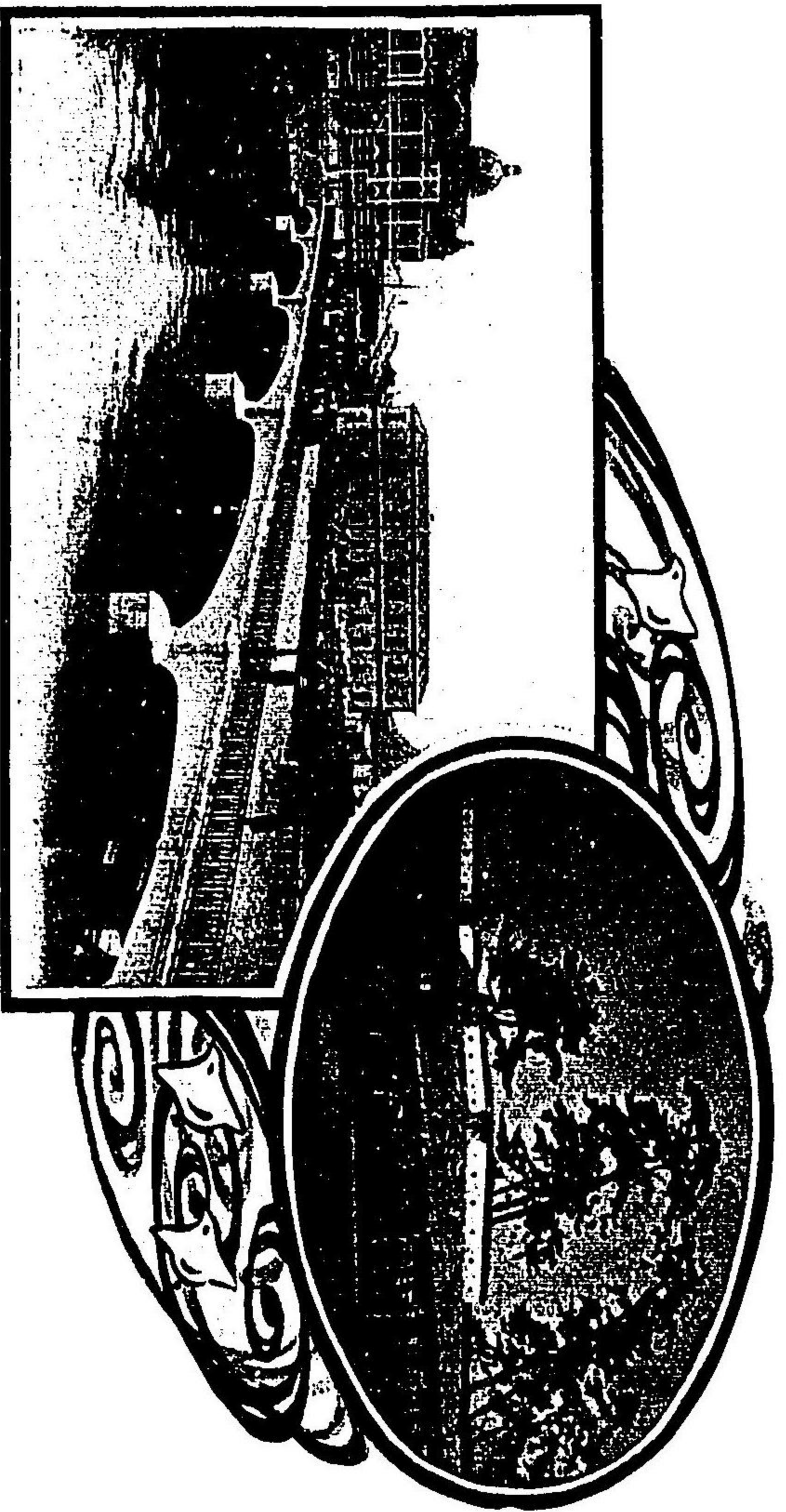
像銅御之皇上山龜



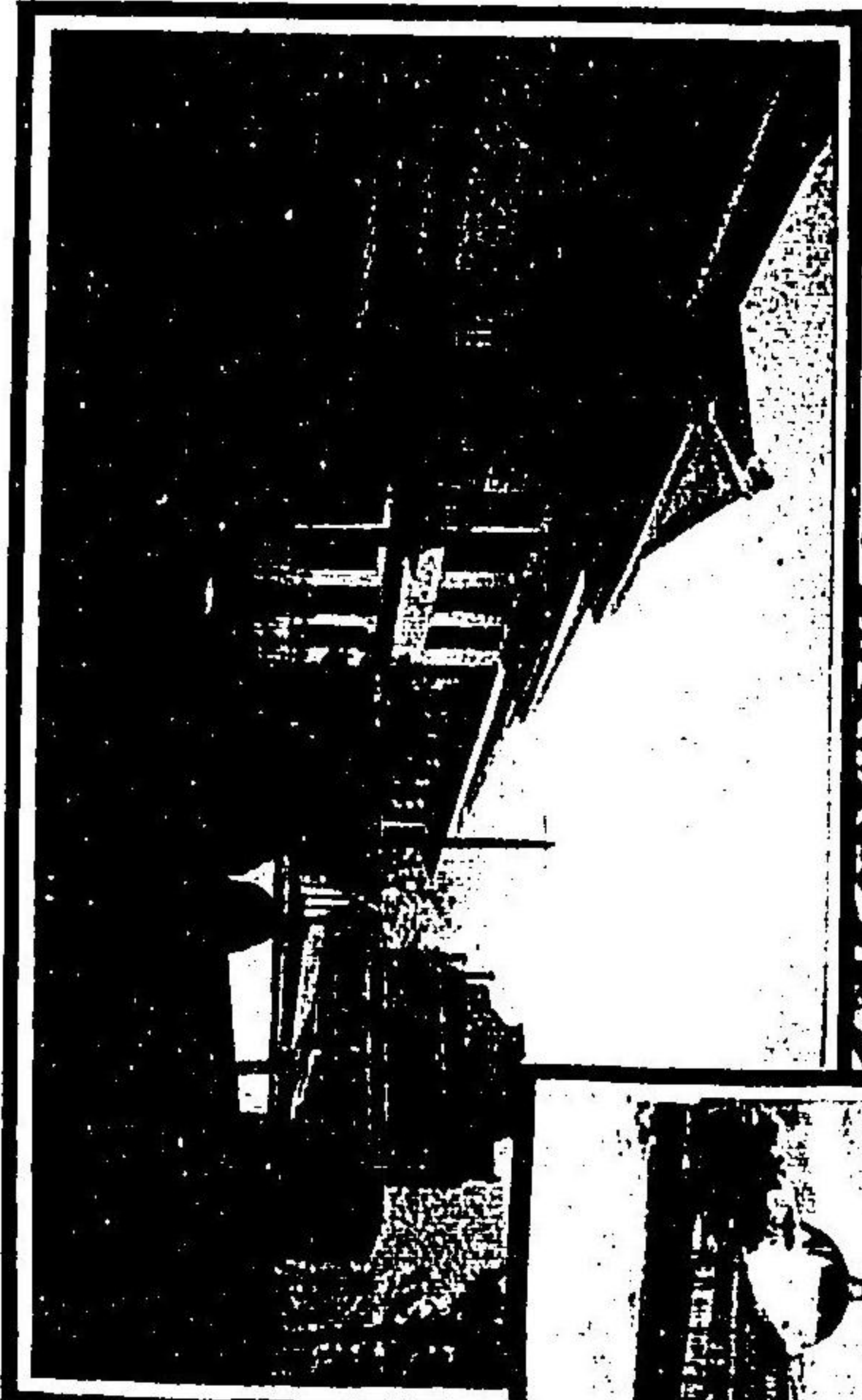
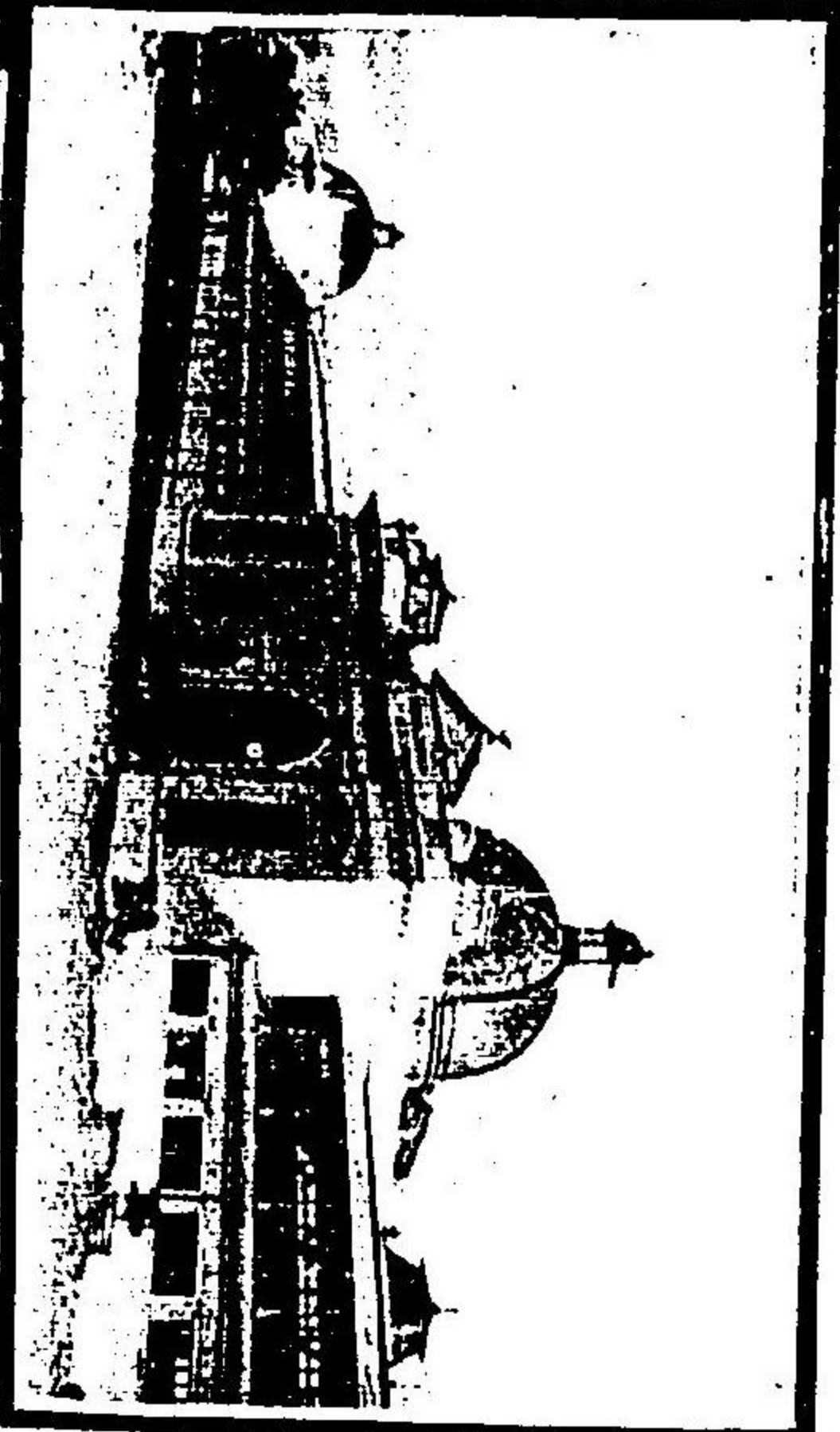
像銅之人上遊日



昔 今 之 橋 島 中 西



共進會本館



福岡市役所

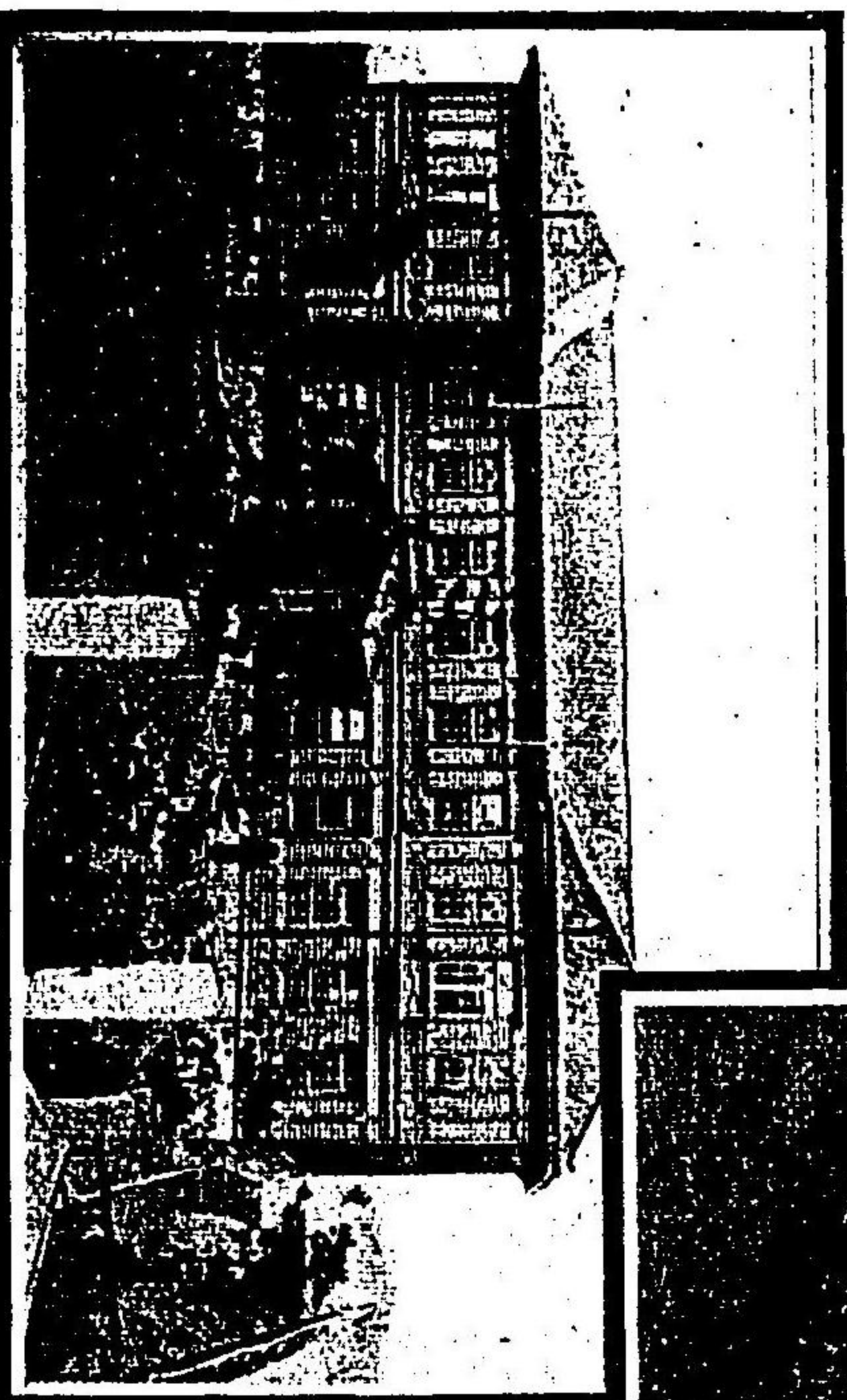
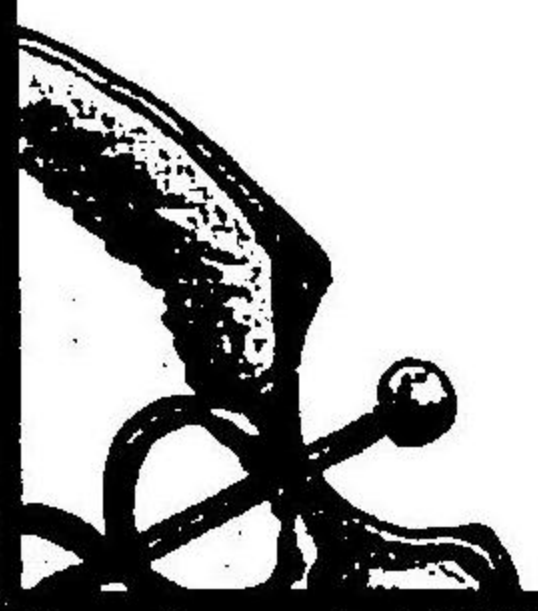
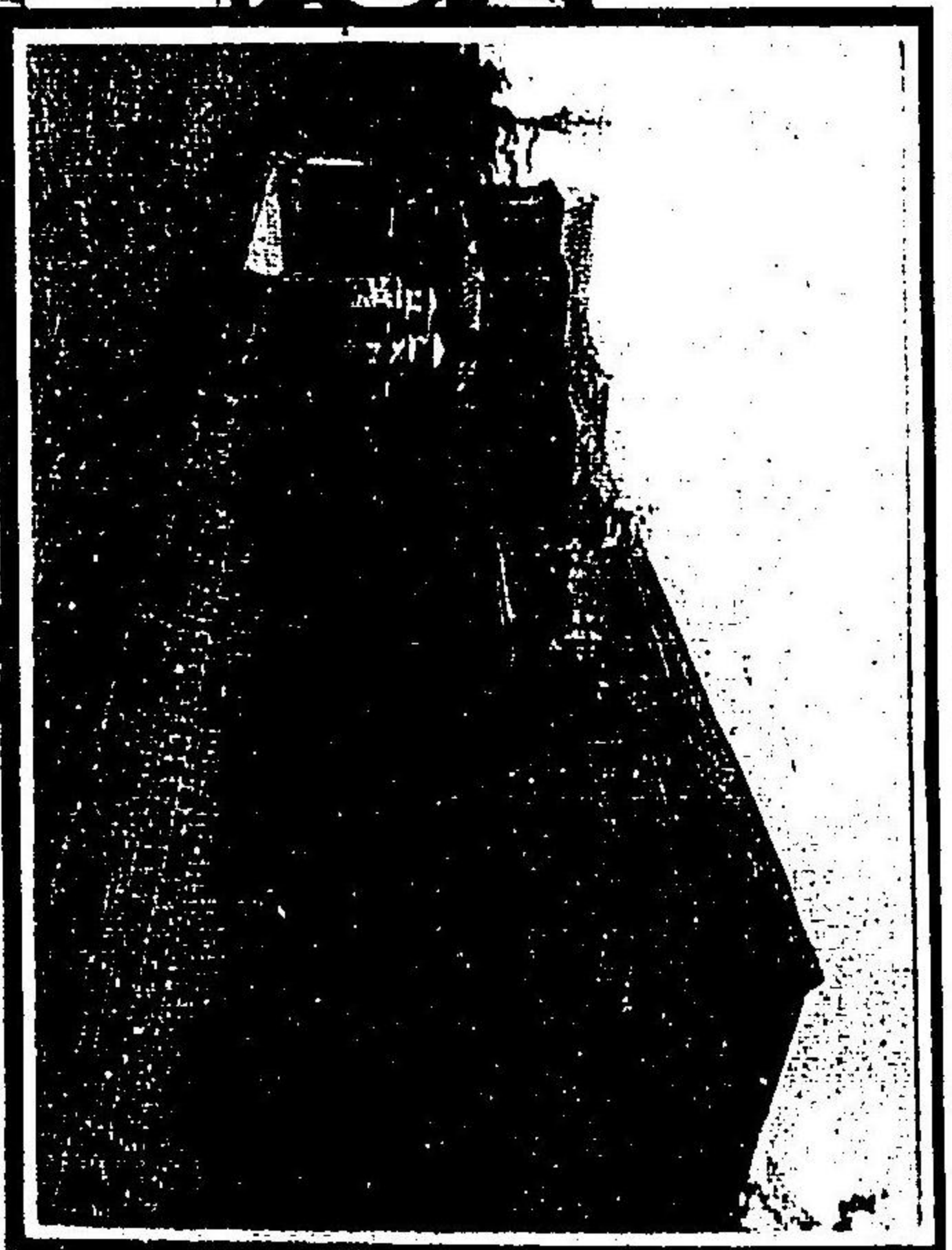


原松の代子



醫大料學之正門

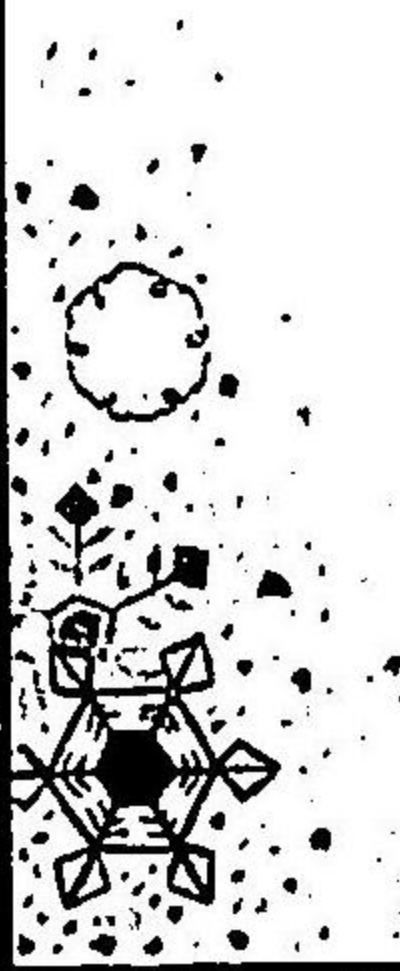
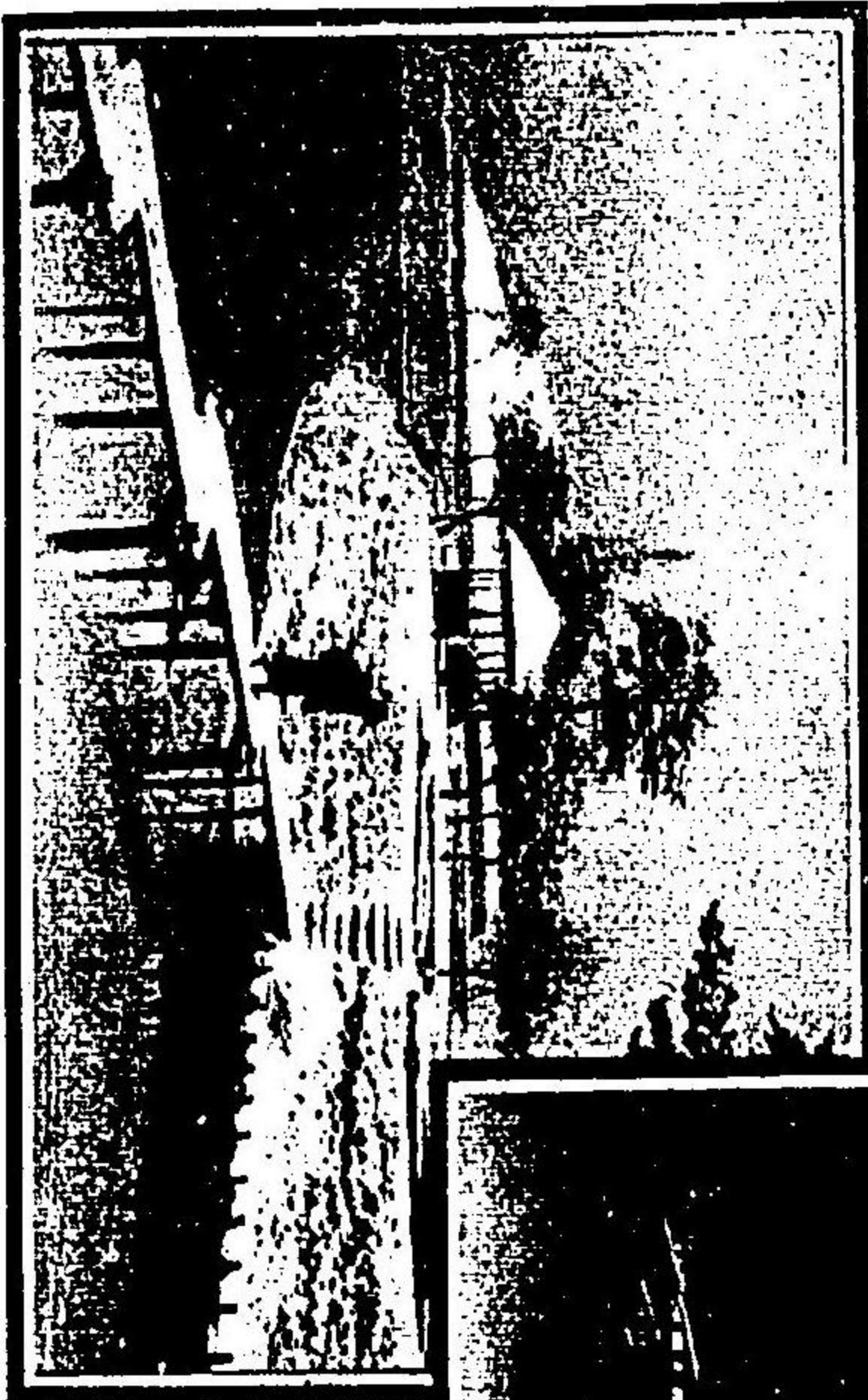
博多商業會議所

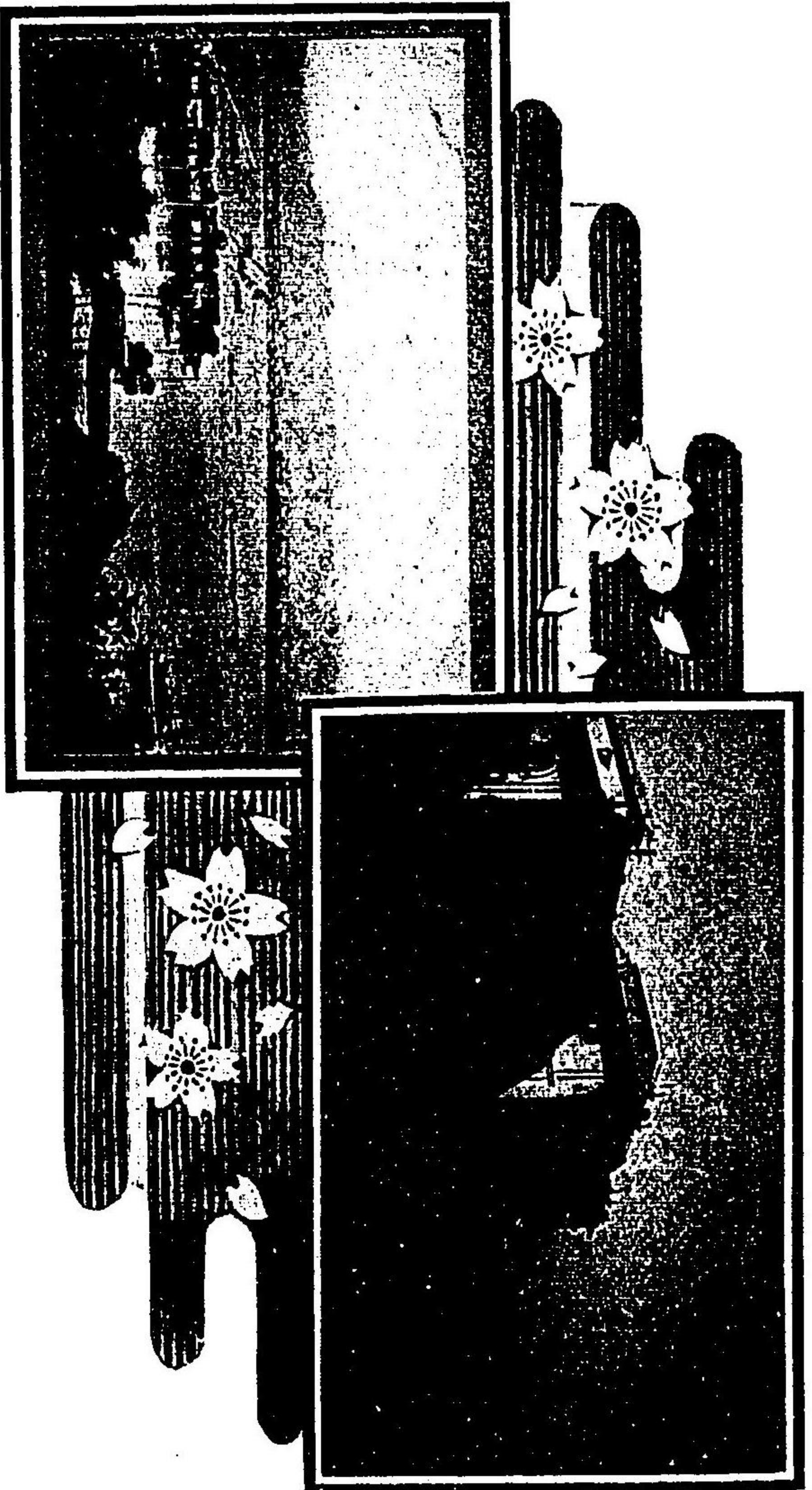


所 列 陳 產 物



景 雪 之 園 公 東

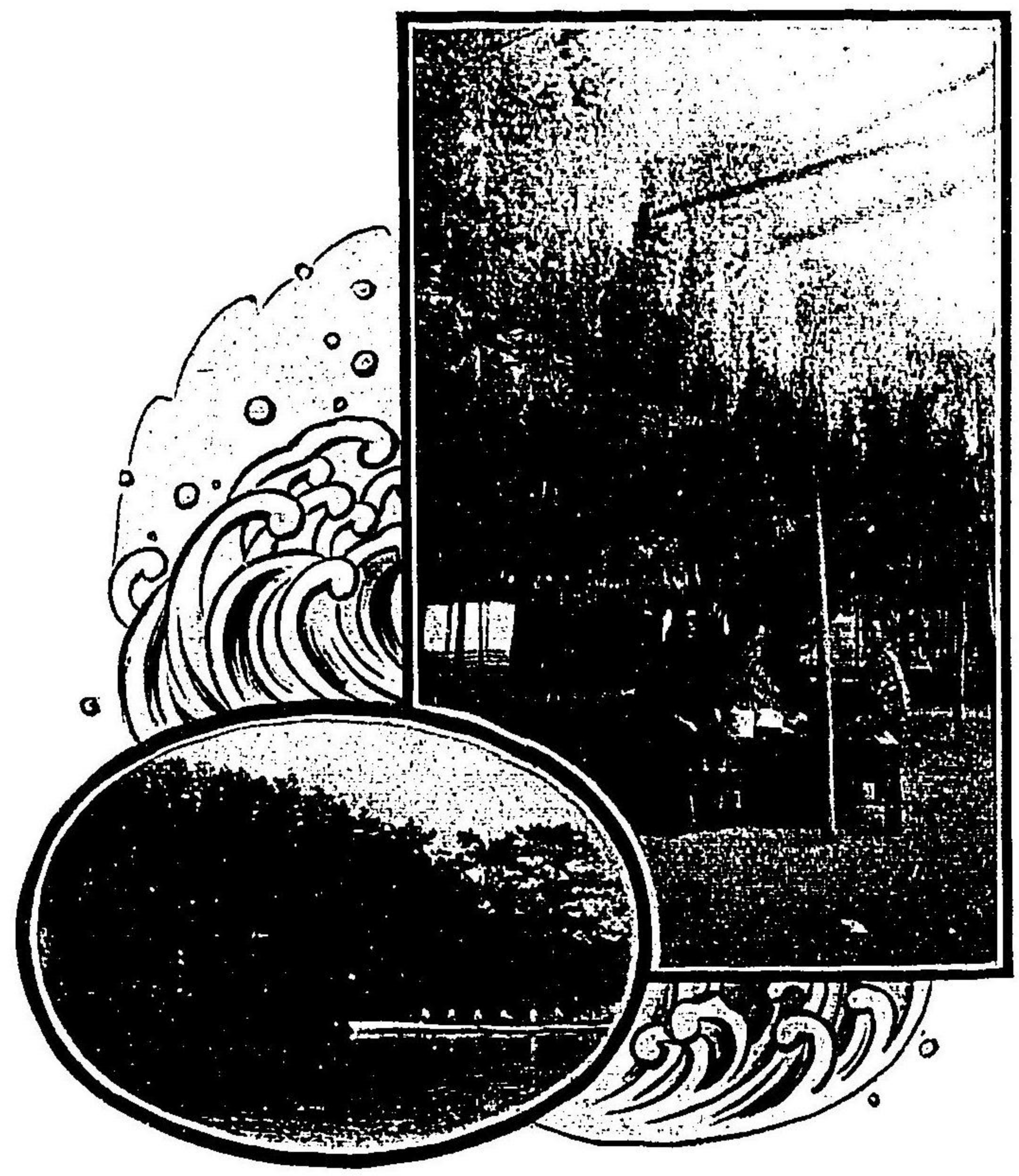




博 多 港 之 遠 望

博 多 停 車 場

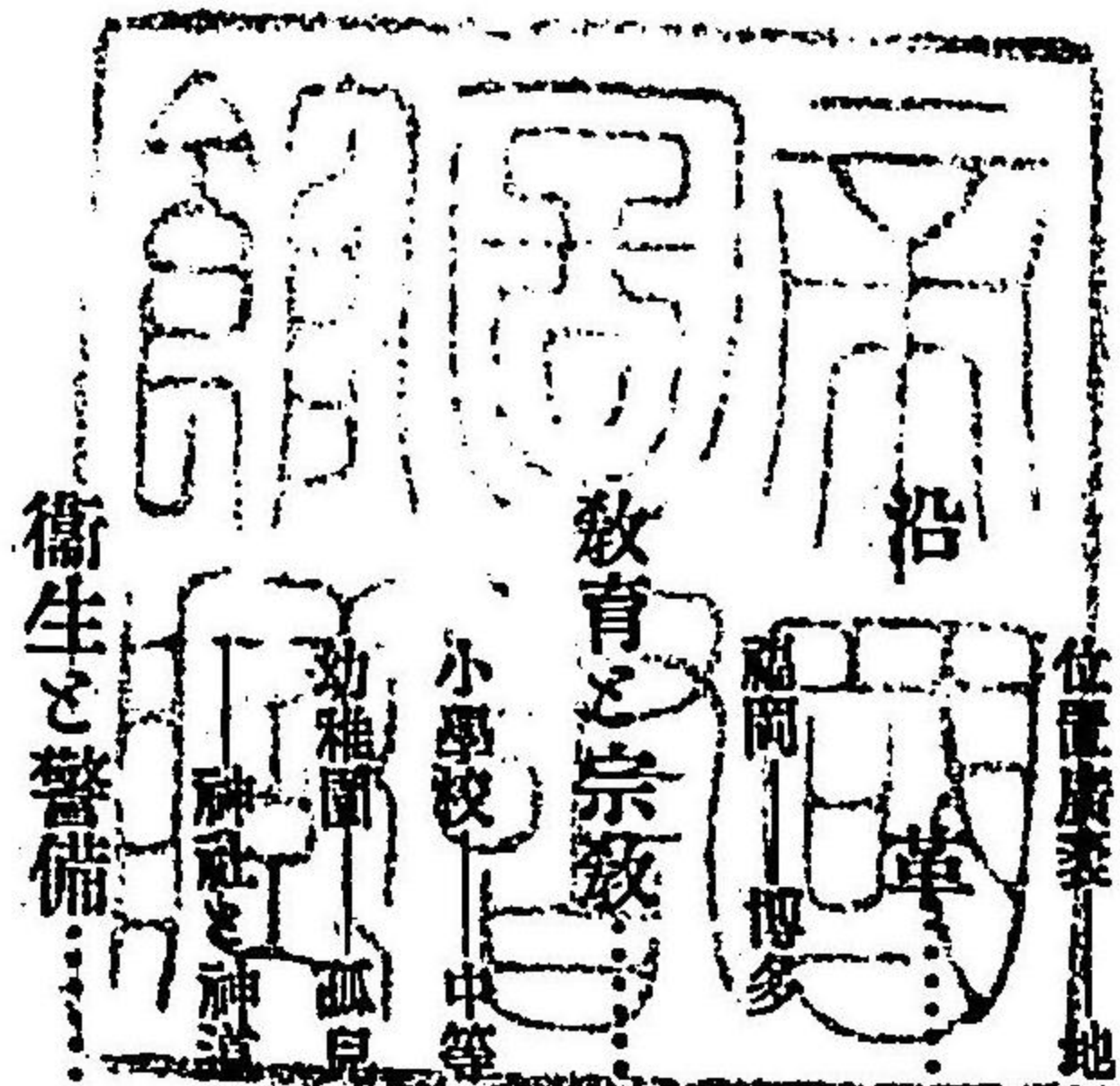
荒
月
之
藤



西
公
園
之
遠
望

福岡市案内記目次

總 說



位置廣袤 地勢 氣象 人口及地籍 市街 市政機關

沿 道

教育と宗教

小學校 中等教育諸學校 私立學校 商業學校 醫科大學 工科大學
 幼稚園 孤兒院 盲啞學校 感化院 教育支會 圖書館 市民の信仰心
 神社と神道 佛教 基督教

衛生と警備

大學醫院 私立荒津病院 醫師 市民の健康 上水道 消防組 水難救
 護組 巡查派出所

尚 武

二九

明治
 四 43. 4. 21
 内交

旅團司令部—福岡聯隊—尙武會—在郷軍人團—武徳殿—町道場—學校の
武術—野球—庭球—端艇—競走

新聞及雜誌.....三四

工業.....三六

重なる工場—重なる工産品—博多織—博多絞—博多人形—紫燒物—文具
—博多車—博多杵先—博多鉄—高取燒—物産陳列所

商業.....五〇

集散貨物—開港場—外國貿易—國內商業—會社—銀行—金融—取引所
—市場倉庫—商業會議所—商品陳列館

農業及漁業.....六八

漁業—製鹽—沖濁活—養蠶—肥料

交通運輸.....七〇

道路—博多停車場—鐵道—電鐵—軌道—港灣—博多港—貨客及出入船
舶—福岡港—國港築設の議—海路—博釜間航路—燈臺—旅館—人力車

通信.....八七

郵便局所—郵便—電信—電話

官公署及組合團體.....九〇

官公署—同業組合—産業組合—水産組合—其他

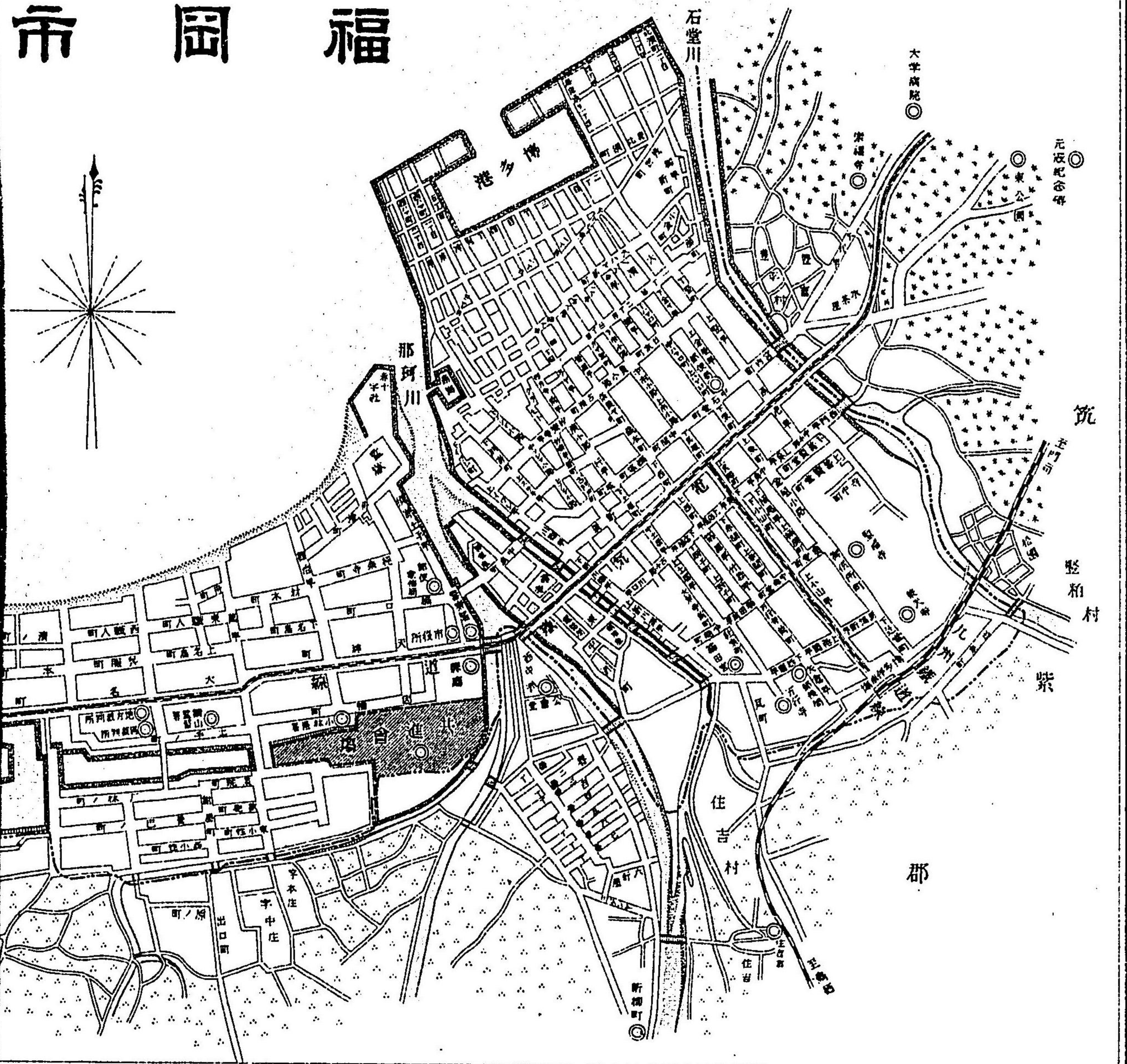
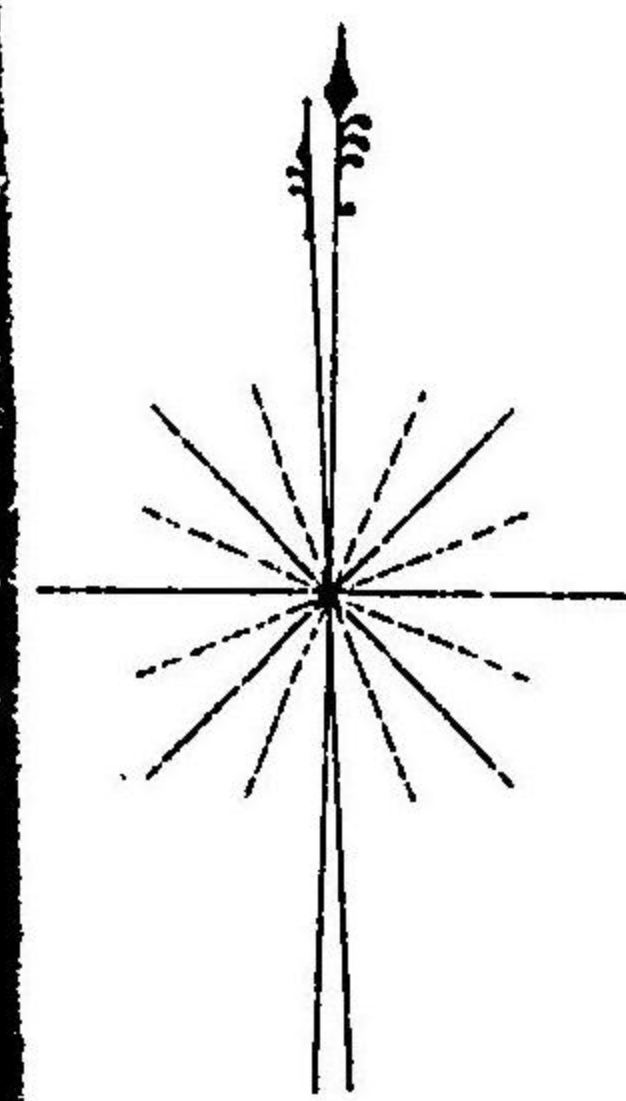
遊覽.....九五

順路—四時の樂—承天寺—聖福寺—東公園—釜掛松—箱崎八幡宮—湖
湯及水族館—崇福寺—瀧衣塚—東長寺—萬行寺—柳田神社—網敷天満宮
—水鏡天満宮—宗湛茶室—誓固神社—福岡城—西公園—鶴來島—光雲
神社—益軒翁の墓—鳥飼八幡宮—住吉神社—愛宕神社—御膳立—薬池寂
阿の墓—平尾山莊—太宰府神社—名島—香椎—西戸崎

娛樂.....一一三

博多仁和加—筑前琵琶—生花—茶道と盆栽—劇場と寄席—湖湯—料理店
—藝妓—遊廓

福岡市



事 變

天慶の亂——刀伊入寇——文永の役——弘安の役——南北朝——戰國時代——百姓一揆——十年の役

一一九

人 物

如水——長政——二十五騎——栗山大膳——島井宗室——神屋宗湛——大賀宗伯——伊藤小左衛門——宮崎安貞——貝原益軒——宮川忍齋——稻宮又百——龜井南冥——青柳種信——龜井昭陽——仙巖——月形深藏——平野次郎——中村圓太——加藤司書——建部武彦——月形洗藏——野村望東

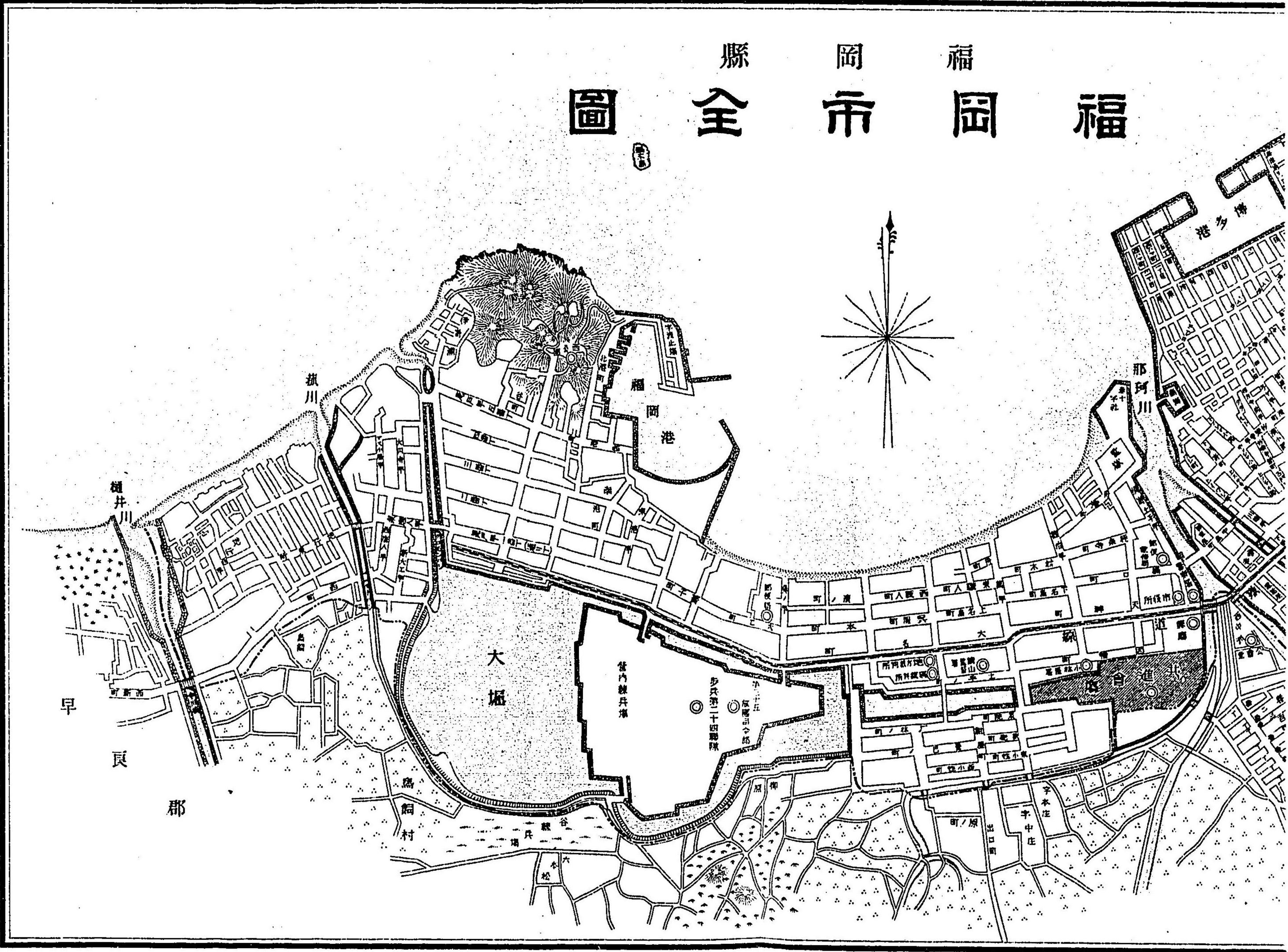
一二五

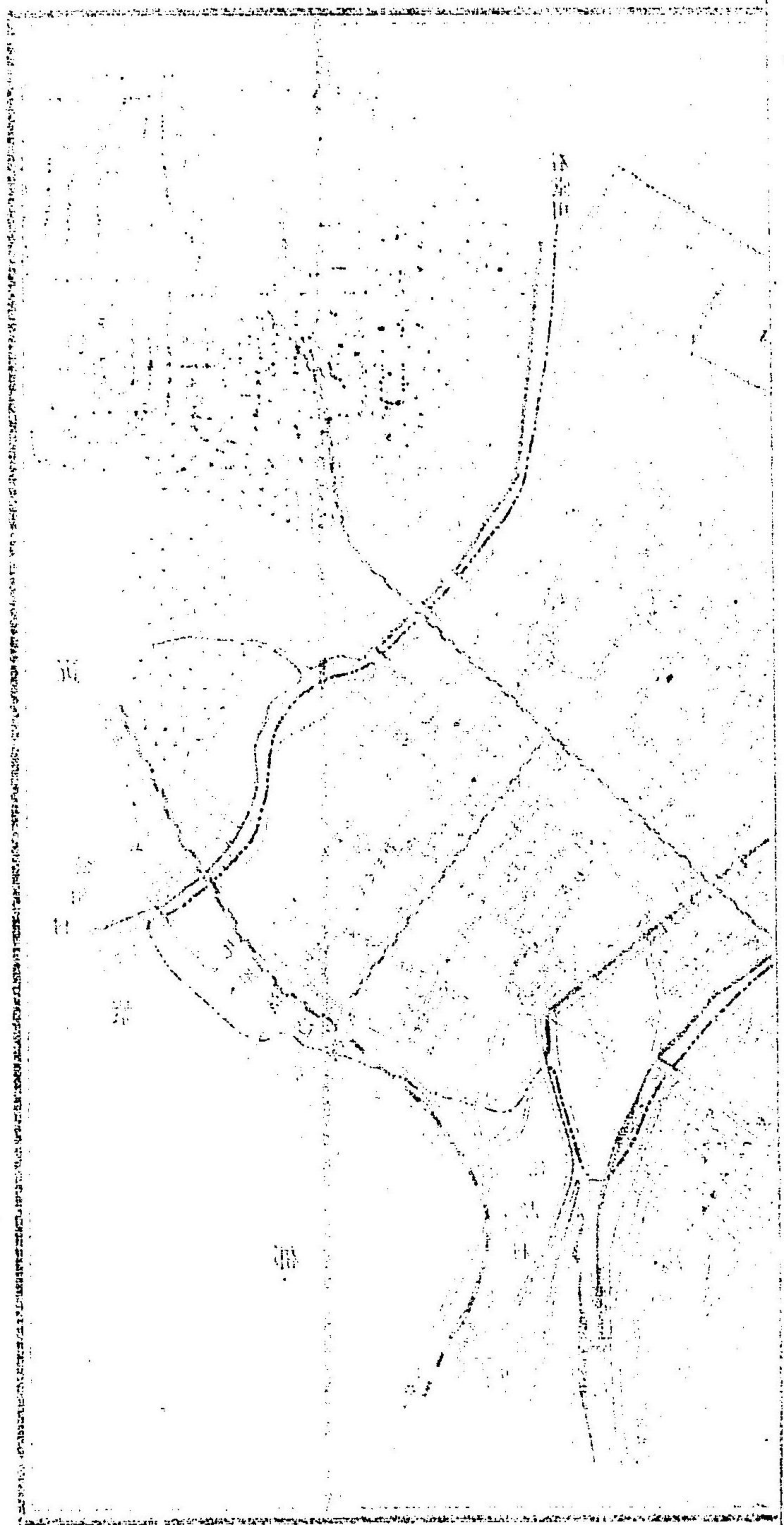
附 錄

第十三回九州沖繩八縣聯合共進會——第一回九州沖繩八縣馬匹共進會——福岡縣協賛會——福岡市賛助會——教育博覽會

一四七

福岡縣 福岡市 全圖





福岡市案内記

説

總位置圖

地勢 — 氣象 — 人口及地籍 — 市街 — 市行政機關

清澄水の如き那珂川の水の博多灣に朝する所、井然たる一市街あり是れ我福岡市とす。市は戸數一萬二千、人口八萬、福岡縣廳あり第三十五旅團司令部あり、其他各種の官衙學校等大抵此地に集り一縣政治の中心地たる而已ならず、其位置九州の中央にありて清韓兩國と對峙し、陸に九州鐵道あり海に博多港を控へ

地形交通の利便は商工業の殷盛を促じ、海陸の貨物常に輻輳して地方經濟上の中心地たる觀あり。加之市の周圍は青松白砂遠く連り、前は海に臨みて風光の明媚他に其比なく、然して又神功皇后の三韓征伐以來元寇の役を初め此地幾多の歴史に富み、到る處名勝舊蹟に乏しからず。即ち本市は福岡縣の首都、商工

業の中心地たる外、亦た實に外客の遊覽地たるなり。之を以て貨客の出入常に頻繁にして市況活氣を呈し、市街年を逐うて膨脹發展しつつあるを見る。

位置廣袤

本市は福岡縣の西北に位し北緯三十三度三十六分三十五秒、東經百三十度二十四分(市役所)の地にありて我國標準時は本市本來の時刻より進めること十八分三十七秒なり。然して東は筑紫郡堅粕、千代及豊平村と境し、南は同郡住吉、警固兩村並に早良郡烏飼村に接し、西は樋井川を距て早良郡西新町に隣り、北は博多灣を臨みて遙に海の中道の白砂青松を望む。南北十九町東西一里十六町、面積約零方里三分四厘なり。

地勢

概ね平坦にして東南は沃野遠く連り、荒津山の一小丘西海岸に峙ち餘勢海に入りて鶴來島の一小嶼を現出す。石室川(比嘉川又三笠川)は源を筑紫郡寶滿山に發し、

支川十六流を合せ市の東端に沿ひ海に入る長さ六里十六町。那珂川は筑紫郡背振山より出で十五の支川を合せ、福岡市界に來り博多川を分派し、中島町東中洲町を抱いて海に入る長さ八里二十五町、小耶馬溪の稱ある釣垂は本川の上流にあり。薦川は市の西部を貫通し、樋井川は早良郡柏原附近より出で市の西端に沿ひて海に入る。

氣象

市外は平野遠く連り前は海に臨みて遠く黒潮の影響を受け、従て氣候克く調和され寒暑共に酷烈ならず。既往十箇年を通じての酷寒暑熱と雖も、最高溫度攝氏三十五度三、最低溫度攝氏氷點下四度六を示したるに過ぎざるなり。而して一年中炎熱甚だしきは概ね八月中旬より九月上旬迄にして、寒氣強きは一月下旬より二月中旬迄とす。一年間の天氣は快晴五十日内外、曇天百四十日内外、雨雪百七十日内外にして雨量一千七八百瓦を算す。初霜は十一月終霜は四月、初

雪は十二月終雪は三月、初霰は十一月、初氷は十二月を普通とすれども時に遅速あるを免れず。風位は午前は東南の風多く午後は西北に變ずるを常とす。因に福岡縣一等測候所は明治二十三年一月の設置に係り今筑紫郡住吉村八溝にあり。

人口及地籍

明治二十二年四月市制實施の際には戸數九千四百四十戸、人口五萬八百四十七人なりしもの、三十年に戸數は九千七百六戸、人口六萬一千四十七人となり、更に四十一年には戸數一萬一千三百五十六戸、人口七萬九千九百六十五人に達せり。如上は凡ての方面に於て發展しつつある本市の戸口増加歩合としては割合に少なきが如くなるも、是れ唯統計上の數字たるに過ぎず、實は市の境域狹隘にして新たに家屋を建築する餘地なき爲め、年々増加膨脹する戸口は皆接續郡地向ひて溢出し、西は早良郡西新町より東は粕屋郡箱崎町に至る迄、接續町村の

發展著しきものあるを一見せば思ひ半ばに過ぐべきなり。尙ほ四十一年末現在地籍は官有地二百七十七町六反一畝一步、民有地免租地三十五町三反五畝七歩にして有租地は左の如し。

地目	反別	地價	地目	反別	地價
畑	町 ^町 二、六〇五	三〇〇六 ^町 四〇三	山林	町 ^町 一、六九一	一八八六 ^町 二
市街宅地	二五三、五九三	一八五、二七三 ^町 三六	原野	一一六	二四六
雜種地	一九三	三七九七	鹽田	四〇	二二九
池沼	九四六 ^町 二七	五、二〇六 ^町 五五	合計	二六六、七六一	一九三、四〇三 ^町 五七六

市街

那珂川の一水南北に市の中央を貫きて之を二分し、東を博多と云ひ西を福岡と稱す。博多は古の博多津にして現今の市街は天正年中豊臣秀吉の再興に係り、大宰府を起點として建設されたる都市なれば、壱町は南北に流れ横町は小路に

して東西に通ず、町數總て百七十八町、中島町、掛筋(橋口町、麴屋町、掛町、網場町、仲間町、中石堂町、宮内町)は繁華の中心にして西門筋(古小路、店屋町、魚町)西町筋(西町、藏本町)吳服町筋、横町筋並に川端筋は之に次ぎ商業頗る盛にして百萬の費始んと是れ店舗なり。福岡は元黒田氏五十二萬石の城下として建設され舊城湮濛尙は存す、六町筋(箕子町、大工町、本町、吳服町、上下名島町)及橋口町、大厦櫛比し商工業般盛なるも博多の繁榮に比すれば稍遜色あり。他は概ね閑靜なる所謂沈竹壁の巷にして士族屋敷の係を存し、官術學校多く茲に在り。町數五十四(内浦村各一)。而も斯の如きは單に行政上の區劃のみ、東は、千代、箱崎、豊平及堅粕各町村、南は住吉、警固、鳥飼の各村、西は西新町等市附近の各町村は皆本市に連續して一市街をなし、風俗習慣より生活の程度に至る迄同一状態の下にあれば、事實上の本市は頗る廣大なる地域を領有し強大なる富を有するなり。尙ほ市内各町名左の如し。

福岡 天神町、因幡町、橋口町、下名島町、須崎土手町、極樂寺町、須崎裏町、船津町、鍛冶

町、材木町、藥院町、紺屋町、西小姓町、林毛、院藥四川端、小島馬場、藥研町、藥院町、堀端、鐵砲町、東小姓町、藥院東川端、養巴町、雁林町、大名町、土手町、上名島町、萬町、東職人町、船町、吳服町、西職人町、本町、濱町、箕子町、大工町、魚町、東唐人町、西唐人町、浪人町、榊木屋町、大圓寺町、東唐人町堀端、新大工町、西町、地行東町、地行西町、荒戸町、東港町、北港町、南港町、西港町、伊崎浦、谷町、荒戸村、

博多

中島町、東中洲町、川端町、下新川端町、上新川端町、川口町、片土居町、中土居町、下土居町、上西町、下西町、古小路、上店屋町、下店屋町、上吳服町、下吳服町、上魚町、中魚町、下魚町、上東町、下東町、中小路、西門町、蓮池町、北船町、上普賢堂町、下普賢堂町、寺中町、金屋小路、上桶屋町、下桶屋町、馬場新町、上辻堂町、下辻堂町、御供所町、上奥堂町、下奥堂町、中奥堂町、上小山町、下小山町、出來町、上赤間町、下赤間町、竹若町、箱屋町、上厨子町、下厨子町、柳田前町、大乗寺前町、上土居町、社家町、上祇園町、下祇園町、萬行寺前町、瓦町、今熊町、掛町、麴屋町、橋口町、上鱒町、下鱒町、上洲崎町、下洲崎町、上對馬小路、中對馬小路、下對馬小路、妙栄寺、妙栄寺新町、古門戸町、網場町、行町、濱小路、四方寺前町、藏本町、奈其屋町、釜屋町、芥屋町、古溪町、奥小路、登堂町、倉所町、上市小路、中間町、中市小路、中石堂町、下市小路、官内町、上濱口町、中濱口町、下濱口町、上金屋町、下金屋町、横町、廿家町、鏡町、上堅町、中堅町、下堅町、柳町、大濱町自一丁目至四丁目、小金町、千年町自一丁目至三丁目、石

城町自一丁目至三丁目、海岸通自一丁目至五丁目、幾世町、惠比須町、冷泉町、西濱町一丁目二丁目北濱町自一丁目至四丁目

市行政機關

福岡市役所は天神町にあり、市長助役各一名、市參事會員六名、收入役一名、書記四十九名、技手二名、掃除監督長一名、巡視八名を以て各般の事務を處理せり。又市會議員は三十六名にして福岡部より十七名、博多部より十九名を選出す。明治二十二年四月市制實施以來既に二十星霜を閲し自治の成績見るべきものなとせす。四十一年の本市費(決算)は三十八萬七千八百二十三圓五十九錢三厘にして市制實施當時の市費一萬三千九百七十一圓二十八錢に比すれば實に約三十倍の増加を示し殆んど隔世の感なき能はざるなり。

沿革

福岡——博多

本市は福岡博多兩市街より成り兩地各々異なる歴史を有するを以て項を分ちて沿革の概要を叙すべし。

福岡

往古那珂郡警固村の海濱に福崎と稱する地あり、漁家點々たる一寒村にして只蘆荻の戦ぐあるのみ。後陽成天皇の慶長五年黒田長政筑前に封せられ其年十一月入國して名島城(小早川隆景の城郭今の粕屋郡名島)に居るや、地は山河の險に據るも都邑を開くに適せざるを以て、父孝高と議し、福崎の地を相して新たに城郭を築く。慶長六年より起して工役七閏年にして成る、今の福岡城之なり。當時城の西方には深き入海あり、古の草香江にして之を利用して漕と爲す、是れ大濠なり。

草香江の入江にあさるあし田鶴の

あなたつゝこ友なしにして

萬葉集

又城の北方は潮入の沂地にして荒津山下には大船巨船の碇泊するものありしが、

之を埋立てる平地となし、城の外郭は東を那珂川に限り、河中の砂洲に中島を築きて商家の町(中島町)とし、東南には長湊を堀り、西は早良川を以て外郭とし、唐人町東の湊を以て内郭とせり。斯くて城下の地を劃して士民の住宅に充て福岡と命名せり。蓋し長政の曾祖父高政が備前の福岡より起りたるを念へるなり。明治新政に入りても尙ほ福岡の東端東中島橋詰に櫛形門と稱する郭門存在し、其左右那珂川に沿ひ堤防ありて、全く博多と區域を異にせしが、明治八年福岡縣廳新築の際櫛形門以南の石壘を毀ちて建築の用材とし(今の福岡警察署廳敷地は堤防跡なり)明治二十一年那珂川埠頭延長の際、石材を櫛形門以北の石壘に取り、堤防跡は川沿の新道と爲し、茲に全く外郭の俤を撤す。福岡の名ありてより明治四十三年に至る三百十年、市街は諸士及び商家の家宅等町割の區域嚴正なりしも今は士庶各町に雜居するに至れり。

博多

博多は古の饒縣の域内なり。神功皇后征韓の時饒河口(那珂川)と樞日浦(香椎浦)との間に海路を取り給ひし事日本紀にあれば、當時既に津港の開けたりしならむ。應神天皇の御宇皇威大に張り三韓朝貢するあり、即ち官家(後に太宰府)を此地に置き内外の政治に當らせ給へり。宣化天皇の御宇に至り官家の規模を擴張し給ひたるが、當時那津と稱へ、後ち饒津若くは饒大津と稱し或は筑紫の大津と呼び又單に荒津とも言ひ、敏達天皇の二年西海一の開港場と定め給ひ、淳仁天皇の天平寶字年中に至り初めて博多大津の稱起れり。博多の起源斯の如く遠く、彼の魏志の倭人傳に饒國二萬餘戸と記せるを見るも、饒津と稱せし時代既に般賑の海港たりしや疑なし。後ち太宰府を御笠里(今の太宰府)に移さるゝに及びても博多は攝津國難波津と共に日東國の二大港として内外の船舶輻湊し、同時に太宰府の外府を設けて文武の諸政を張れり。當時唐との交通盛んにして彼我の國使等の往來するもの多く、鴻臚館の北館を此地に置きて其接待應酬に備へ、又警

固所の設ありて兵仗を蓄へ艦船を泛べ、防人を置きて邊海の防備に充つ。而して筑前沿海は外寇の虞あるを以て、古より海岸に長壘を築きて其來襲に備へ、天智文武兩帝益々邊警に努め給ひ文永の役蒙韓連合軍の上陸に鑑み、北條幕府は博多津番役の制を定め、諸豪族に命じて交代に兵を出して駐屯せしめ、後宇多天皇の建治元年より翌二年に亘り、九州の諸族に命じ博多沿海の石壘を修補増築せしめ、蜿々たる長蛇の如き石壘は多々良、宮崎より西は今津に至る數里に達す。博多を石城と呼ぶは蓋し之に起因す。(伊崎浦に石壘の一部を存す)

當時博多の地たる西は那珂川に限り、比惠川其東に注ぎ其下流は博多住吉の間を流れて那珂川(今の瓦町の西)に合し、且つ中央を東西に通ずる入海あり船舶入津の埠頭たり。是れ袖湊にして後遂に博多の異名となれり。(袖湊以北を沖の濱と稱す)

千鳥啼く袖の湊をこひ來かこ

唐土舟の夜の寢覺に

續古今集

泪そふ袖のみなどをたよりにて

月もうさねの影やどしけり

續千載集

弘安五年奉行府を開き、永仁元年九州探題府を設け、北條氏亡びて足利幕府起るに及び、延元元年尙探題府を再興し、津名隆々として繁榮日に加はり、海東諸國記に博多居民萬餘戸(足利幕府の中葉)と記せるも過言にあらざるべし。而も袖湊は漸次泥土の堆となりて埋没し(現時壽橋以東の壽小路は間餘の湮渠に蓋して作れる街にして該湮渠こそ袖湊の殘蹟なれ)大船多く沖に繋り、加之肥前平戸其他諸港の新興し來るあり、後奈良天皇の天文二十一年以後復た外船來らず、我博多港は漸く衰微に赴きたり。應仁文明の頃博多の地大友氏の勢力範圍に入るや、臼杵安房守今の出來町附近に居を構へ、瓦町より辻堂町に至る間城湊を掘り又新川を掘りて比惠川の水を注ぐ是れ今の石堂川なり。爾來屢々交戦の衢となりて民家潰え、天正十五年豊臣秀吉西下して島津氏を征する時、商賈四散し人煙殆んど絶え、應神以來千七百餘年の名邑將に禾黍

漸々の境に化せんとせり。秀吉深く之を惜み、六月凱旋して宮崎に駐まるや、同月十日博多に蒞み、自から地形を按じ市街の地を方十町と定め、石田三成、小西行長、長束正家、瀧川三郎兵衛及山崎志摩守を以て奉行とし工事を督せしむ。此地元と太宰府に通せしにより南北を縦として大路とし、東西を横とし經營全く成り、數年を出でずして再び繁榮の名區となれり、天正十五年より明治四十三年に至る實に三百二十七年。

小早川秀秋筑前に主たる時、再興後の博多は公領なりしを以て怡土郡半地を以て之に代へ、黒田長政亦先例に據り博多を私領とし、爾來二百七十餘年其の治下にありたりき。

教育と宗教

小學校——中等教育諸學校——私立學校——商業學校——醫科大學——

工科大學——幼稚園——孤兒院——盲啞學校——感化院——教育支會——

圖書館——市民の信仰心——神社と神道——佛教——基督教

筑紫の太宰府は西海に於ける學問の府として孝謙天皇の朝には學業院の設けあり、後には菅公此に薨じて文學の祖神となりて永く餘韻を垂れ、降つて黒田氏の治世に至り、天明寛政の間育英事業大に見るべきものあり。天明三年東西兩學館を福岡に創設し、東にあるを學問所と稱し西を甘棠館と稱へ東西拮抗一時其盛を稱す。龜井南冥西館にあり館内名士濟々筑前の士風爲めに不變するものあらんとす、可惜俗儒の陷濟する所となりて甘棠館廢せられ、久しからずして皇朝の學又顧られず學問所亦衰ふ。學問所は後修猷館と稱し縣立中學修猷館は其の後身なり。而して藩政時代に於ける文學の徒を教ふるに、貝原益軒を最とし其の一門には元端、義質、好古、常春あり、益軒の門には竹田定直、稻富又百あり、定直の子孫定良、定矩宗學をうけて學問所の教授たり。龜井家には南冥

昭陽父子あり、其門には原古處、江上源藏の如き秀才あり、宗暉は詩人として西海に鳴り、采蘋少琴は女詩人の双璧として重きを爲し、國學には加藤一純、青柳種信を出し、歌人には大隈言道、野村望東、平野次郎あり其他月形洗藏、井上周磐等篤學の士多く、勤王の志士等が文事を解したるもの其の餘風ならずんばあらず。明治維新後に至りても私塾は猶盛んにして、西には正木、宗、辛島等の諸塾あり、東は住吉人參畑に老媪高場蘭ありて各々子弟を教養す。方今時めく福岡人士は正木塾の出身にあらざれば。即ち老媪の鞭達を享けたる人なり。小學校令施行さるゝに及び、教育事業は長足の進歩を示し、就學歩合今や百人中九十八人九四に上り、全國各市中最良の成績を收め居れり。

小學校

向學心の發達に伴ひ就學兒童激増し、日露戰役に際して止むなく第一第二學年に二部教授を行ひ、近く御供所校並に大名女子校を新築したるも、尙ほ教室不

足を感じ、今復學校増設の計畫あり。此外兩師範學校附屬小學校ありて市西部の兒童千餘を收容せり。

學校名	兒童數	學級數	所在地
大名男子尋常小學校	一、一〇三	一八	大名町
大名女子尋常小學校	九五六	一七	土手町
當仁尋常小學校	七四八	一二	東唐人町掘端
上吳服男子尋常小學校	八四八	一三	上吳服町
上吳服女子尋常小學校	六七四	一二	上吳服町
御供所尋常小學校	一、〇九四	一八	御供所町
中市小路尋常小學校	八八九	一四	中市小路
奈良屋尋常小學校	八九四	一五	奈良屋町
福岡高等小學校	九六六	二〇	天神町

中等教育諸學校

本市は福岡縣の首都なるを以て縣立諸學校の多くは、市内及び附近に設置されたり、左の如し。

學校名	生徒數	所在地	電話番號
市立福岡商業學校	四四四	堅船村	九五五
縣立福岡農業學校	二二〇	那珂村	九二五
縣立福岡工業學校	四一二	東港町	三〇二
縣立中學修猷館	七三〇	四新町	四七四
福岡縣師範學校	四四〇	荒戸町	五〇二
縣立福岡高等女學校	三七九	天神町	
福岡縣女子師範學校	四〇三	鳥飼村	六六

私立學校

左の如し。

學校名	教	科	所在地
-----	---	---	-----

筑紫高等女學校	修身、國語外十科目		警固村
九州高等女學校	同上		荒戸町
福岡英和女學校	國語、英語外十三科目		天神町
福岡實習女學校	修身、國語外六科目		荒戸町
女子職業學校	裁縫、手藝		西小姓町
豫修館	修身、國語外七科目		荒戸町
福岡研成校	修身、國語外八科目		荒戸町
福岡豫備學校	同上		荒戸町
博多實業補習學校	修身、簿記外三科目		上吳服町
東亞語學校	清語、韓語		馬場新町
四海憲精學校	簿記		天神町
鎮西高等簿記學校	修身、簿記		中島町
翠絲學校	讀書外四科目		柳島町
福岡神學校	神學、宗教、哲學外廿二科目		大名町
女子美術學校	裁縫、造花外七科目		大名町
柳田女學校	修身、裁縫、刺繡、禮法		社宗町

市立福岡商業學校

壁粕村にあり甲種程度にして豫科一箇年本科四箇年。卒業生累計百七十九人にして或は上級學校に進み、銀行會社に就職し、又は獨立自營する等各方面に亘り、何れも成績良好なり。

福岡醫科大學

京都帝國大學福岡醫科大學は千代村にあり、白妙青松の地に宏壯なる講堂教室を建築し、明治三十七年の開校にして今や四百の學生を收容せり。此地市街の紅塵を避けて水清く氣澄み、學校所在地として天下無比の地なり。附屬病院は元の縣立病院にして大學設置當時之を寄附したるものなり。

工科大學

醫科大學の東方二十餘町箱崎町地蔵松原に地を相し工科大學は建築されつゝあり。

り。明治四十四年授業開始の豫定にて工事著しく進捗し、愈々開校の運に至らば醫科大學と合して福岡大學設立さるべしといふ。而して輿論は福岡縣に高等學校設置を希望し居り其新設の曉には位置を本市附近に撰擇すべし、斯くして我福岡市が西海に於ける學問の府となるも遠きにあらざるべし。

幼稚園

本市に於ける幼稚園は明治二十二年上呉服尋常小學校に附設したるを嚆矢とし後之を廢したるが、今左の二園あり共に私立なり。

名	稱	保育兒童數	保育年限	創立年月	所在地
福岡幼稚園		一〇二	三箇年	明治三十六年	大名町
博多幼稚園		七四	三箇年	明治三十八年	上市小路

孤兒院

龍華孤兒院は祇園町萬行寺内に在り、明治三十二年萬行寺前住職七里恒順の創立に係り篤志家の喜捨によりて之を維持し居れり。當初よりの收容孤兒二百廿九名に達し既に獨立自活の途を得たるもの少なからず、明治四十二年内務省より金三百圓を下賜されたり。

私立福岡盲啞學校

因幡町にあり、福岡縣教育會の事業として財團法人組織の下に經營さる。明治四十三年一月開校し、初年度とて收容生徒は盲啞兩生合して十四名なり。

感化院

同院は縣立代用にして福岡學園と稱し瓦町にあり。明治四十二年の開園に係る。現今市外鳥飼村に三棟の園舎建築中にして、竣成の上は不良少年三十名を收容し訓育する豫定なり。

教育支會

福岡縣教育會福岡支會は市内各學校教職員及有識者を以て組織され、事務所を福岡高等小學校内に置き學生の風紀問題其他教育上各般の問題につき研究を重ね改善實行に努めつゝあり。

圖書館

私立福岡圖書館は荒戸町にあり。明治三十五年八月の創立に係り、藏書は和漢洋に亘り五萬九千餘冊に及び一年間の開館日數三百三十九日、閱覽人員二千百餘名なり。

市民の信仰心

本市の般賑なる、寸田尺地も之が利用の途を講じつゝあるに拘はらず神社佛閣教會等の壯麗宏大なる造營物各所に散在し、庭園墓地の廣大なる地域を領有するもの、是れ市民が神佛に對する敬虔の念厚さを示すものにして、信仰心の深さを見るべし。

神社と神道

市内に於ける神社は縣社二、郷社一、村社四、無格社五十六、計六十三社にして此外境内神社七十一社あり。神道教は微々として振はず、教務所は大成就三、神理教二、大社教一、金光教二、天理教二あり。

佛 教

市内には扶桑最初の禪窟なる聖福寺あり、眞言東漸の第一歩たる東長寺あり、我國の宗教史と深き關係を有する事として、佛教の隆盛なる亦怪しむに足らず、今天台宗六、眞言宗六、淨土宗十九、臨濟宗十三、曹洞宗六、眞宗二十三、日蓮宗十、時宗一、計八十四寺院あり、此外院外の佛堂三十五あり。

基督教

基督教亦た盛にして市内に於ける教會は浸禮教會一、美以教會二、ハリストス正教一、日本組合教會一、日本聖公會二、舊教一、計八箇所あり、各教會皆多數の信者を有せり。

衛生と警備

大學醫院——市立荒津病院——醫師——市民の健康——上水道——消防組——水難救護組——巡查派出所

生命財産の安危は一に繋りて衛生警備の施設如何にあり。由來本市は氣候克く調和され寒暑酷烈ならず、加ふるに前は博多灣の絶景を望み後は白砂青松相連りて、氣候の温暖、風光の明媚は衛生設備の完成と相俟ちて健康地たるを失はざるなり、海陸に於ける警備も今や完全せざるはなし。

大學附屬醫院

福岡縣立病院は明治十年の設立にして爾來幾多の變遷を重ね市外松原に大建築を起すや、位地の良好と設備の完全に於て全國病院の模範と稱せられ、醫員亦

有数の國手にして病院の聲價大に揚り遠く來院するものあるに至り、醫科大學設置の素因を作れり。明治三十七年大學設置と共に本病院を寄附し爾後大學附屬醫院として著るじき發達を遂げ地方醫界の中樞として貢獻する所多大なり。

市立荒津病院

明治十二年虎疫流行の際市外松原に假病室を設置したるに始まり、爾後増築又は補修を行ひ大に規模を擴張し各種傳染病患者を收容し來りしが、四十一年榊木屋町に移轉し荒津病院と稱す。而して衛生思想の普及せる結果傳染病の蔓延流行すること稀にして一年間の入院患者は八十名内外に過ぎず。

醫師

近年各科専門醫の續々開業するあり私立病院亦設置さるゝありて大學醫院に收容し得られざる患者の來診入院を求むるもの多し。現今醫師六十九名、齒科醫五名あり、又産婆三十八名あり。

市民の健康

本市一年間の出生兒千九百四十四人に對し死亡は千二百五十四人を算す、即ち出生は全人口の二分五厘弱、死亡は一分六厘強に當れり。而して死亡者の病症別によれば呼吸器病三百三十人を最とし發育營養的病百七十四人、消化器病百九十一人、神経系及五管病百八十人、傳染性病百五十二人等之に次ぐ。

上水道

本市の大部分が往昔海濱の斥地なりし事とて井水鹽分を含有し鹽料に適せざるを以て、市民の多くは各個に良水を購買し其供給によりて僅に之を使用する有様にて上水道敷設の急を唱へ、市に於ては先年來之が調査を遂げ假に設計を終へて國庫補助の申請中なるが、水源は室見川の上流早良郡内野村字曲淵の溪谷とし人口十二萬に給水し得べき設計にて、該費用には約三百萬圓を要する見込なり。

消防組

近年各地に於て頻々大火の報を耳にするに際し、我市民は寧ろ怪訝の念を以て之を迎へざるはなし、蓋し柳町、壽小路、片土居町、藏本町等の火災は市民の視て以て大火と爲すと雖も類焼家屋三十戸を出でず、是れ家屋の構造給水の便利等其因を爲すものあれども亦警備設備の完整と當事者の機敏なる動作とに依らずんばならず。現時消防人員三百八十人にして之を四組に分ちて變に備ふ。又市附近には豊平、千代、堅粕、席田、住吉、鳥飼、西新等の各町村に消防組の設置あり、警鐘一打皆動く。

水難救護組

水難に對する救護設備としては伊崎浦に私設難破船救護組の設ありて市の補助を受け救護船を有し、市附近の漁村亦此設備ありて緩急相救ひ些の遺漏あることなし。

巡查派出所

福岡警察署は天神町にあり市内に於ける巡查派出所は左の十二個所にして配置
巡查数は人口約八百人に對し一人の割合なり。

橋口町(福岡)、藥院町、本町、荒戸町、西町、橋口町(博多)、下祇園町、下
吳服町、官内町、大濱町、柳町、博多停車場、下對馬小路(水上を管す)

尙武

旅團司令部——福岡聯隊——尙武會——在郷軍人團——武徳殿——町道
場——學校の武術——野球——庭球——端艇——競走

本市の地位たる古來内外四戰の港となり、譽ある古武士の流血は深く地殼に滲入し、脈々として忠愛の念尙武の氣を後人に傳ふるものあり。雄々しき男子は言はずもかな、婦女子に至るまで軍事思想に富み、近く日露戰役に際しては遺

憾なく其特性を發揮して各々報國の途を謬らず、出でくは國家の干城となり入りては志を養ひ、強壯なる身體は健全なる精神を宿し以て九州男子の本場たる所以を空しうせざるなり。

旅團司令部

歩兵第三十五旅團司令部は福岡城内にあり、日露戦役後の設置にして歩兵第二十四聯隊及び歩兵第十四聯隊を管す。

福岡聯隊

歩兵第二十四聯隊は福岡城内に屯營す。日清戦争には旅順港二龍山の險を一舉にして奪取し、日露戦役には第一軍に屬して鴨綠江の第一戦に参加し蛤嶼塘の苦戦以後奉天戦役に至るまで幾十戦、武名大に著はる。

尙武會

市内有志者及び在郷軍人を以て組織し、軍人家族の救助、入退營軍人の送迎其他軍人慰安の方法を講じ、尙武の氣風の振興に力めつゝあり、曩に日露戦役紀念として西公園下新道路より杉土手にかけて數百株の櫻樹を植付け市に一光彩を添へたり。

在郷軍人團

市内在郷軍人中の有志を以て組織し、事務所を魚町に設け軍人慰安の方法を講じつゝあり。

武徳殿

大日本武徳會福岡支部武徳殿は大名町にあり、本市武術の中樞にして各々日割を設けて練磨研鑽し毎に曳々の聲を絶たざるなり。

町道場

十年前迄は市内に柔術道場九、劍術道場四を數へ、武術の重んぜらるゝ事他に其例を見ず、剛健なる九州男子の眞面目を發揮したりしが、時代思想は文弱の

弊を導き加ふるに各學校に道場を設けて之を奨励するに至りしを以て町道場は漸次衰微に赴き、且つ野球庭球の流行により斯道に志すもの漸く少く、今や明道館、天真館、吉田の三柔術道場と淺野、幾岡二劍術道場を剩すのみ、昔日の隆盛復た見る可からず。

學校の武術

身體を鍛ひ心膽を練るは武術に如くものあらず、然れば町道場の全盛時代なる明治三十年頃、修猷館師範學校に於ては校内に道場を設けて之を奨励し、學生争うて之に趨き爾來町道場の繁榮は全く之に奪はれたるの觀あり。

野 球

本市に於て秩序ある野球競技は明治二十八年の秋福岡聯隊鎮魂祭餘興として中學修猷館選手に由て行はれたるを嚆矢とす。當時何等世人の注意を牽くことなかりしが、三十年頃熊本山口兩高等學校の對校競技の本市に於て行はれたるよ

り頓に野球熱を喚起し、先づ師範學校に野球團起り次で十七銀行員有志は中學校有志を加へて一團を組織し、斯くの如くして三野球團鼎立して野球趣味を鼓吹し、各學校亦之に倣ひて技を練り、先年醫科大學内に初めて完全なるグラウンドの設置を見、續て縣下各中學校選手の競技會あり、斯界は長足の進歩發達を示し來れるも猶多望なる未來を有するなり。

庭 球

庭球の本市に傳はりたるは明治三十三年前後の事にして當時は師範學校及修猷館に於てのみ之を見たりしが、今は各學校にコート設備あらざるなく寧ろ野球以上の勢力を有し、福岡醫科大學主催の下に明治二十九年以降縣下各中學校選手競技會を催し之を奨励し居れり。

端 艇

醫科大學を始め各學校には各々端艇部の設けあるも、本市の北面に展けたる一

灣の水は時に風強く波荒くしてオールを握るに便ならず、斯界の發達に多大の障害を來し殊に競漕場として適當の水路を有せざるを以て競漕の趣味索然として世人の注意を喚起するに至らず、従つて漕界振はず各校選手の技倆も亦優れたりと言ふべからず、只師範學校選手のあるありて琵琶湖上の競漕に驍名を現はし本市端艇界の爲めに萬丈の氣を吐く。

競 走

福岡醫科大學運動會に於ては、毎年縣下各中學の選手及び各小學の選手をして各々優勝旗を争はしむ。是より競走熱俄然として起り、競走は運動會の花として世人の注目を牽くに至れり。

新聞及雜誌

本邦新聞事業の消長を見るに、東に東京諸新聞紙あり、畿内には大阪諸新聞紙

あり、前者は關東東北の地に雄飛し、後者は關西に濶歩し、地方新聞は之に壓迫され發展の餘地乏しく群小空しく社運の微々たるを嘆するに反し、九州は遠隔の地にして京阪新聞の勢力及ばず新聞紙界別天地の觀あり、而して我福岡市は九州の首都として、九州文明の先覺者として百般の事物皆茲に策源し、新聞事業の如き異常の發達を示せり。めざまし新聞は最初の新聞紙にして實に明治十一年十二月の發行に係り、翌年筑紫新聞と改稱し、二十四年更に福岡日々新聞と改稱して日刊とし以て今日に至り、縣下政友會の機關新聞として社運隆々たり、九州日報は明治二十年八月の創刊にして初め福陵新聞と稱し、憲政本黨の機關紙として地盤鞏固なり。該兩新聞は何れも八頁年中無休刊にして共に輪轉機を使用し、發行部數前者は四萬後者は二萬、紙面の體裁内容共に京阪の新聞紙に遜らず、實に地方新聞中第一位に居り、勢力範圍も獨り縣下に止まらず、佐賀、熊本、長崎、大分、山口各縣及び韓國に及ぶ。近來交通の便大に開け京

阪諸新聞の侵入し來るあるも之を併讀するに過ぎずして、兩新聞の勢力に何等の影響を與へざるなり。其他新聞雜誌の發刊少なからざるも起倒毎ならず、現今左の諸新聞あり。

名	刊度數	所在地	名	稱	發刊度數	所在地
福岡日々新聞	日刊	須崎土手町	九州	藥報		下土居町
九州日報	日刊	中島町	九州	商報		萱堂町
實業新聞	毎月六回	妙樂寺新町				

工業

重もなる工場——重もなる工産品——博多織——博多絞——博多人形——
 素焼物——文具——博多車——博多翠先——博多鉄——高取焼——物
 産陳列所

本市には彼の博多織を初め著名の工産品に乏しからざるは普く人の知るところなるが、近來時運の進歩と製造技術の改善とは益々各種工業を通じて、産額の増加業務の發展を見るに至り、今や従業戸數四千餘戸に達し、生産總額三百萬圓に上るの盛況を見つゝあり、蓋し本市は九州の中央にありて清韓兩國と對峙し、地形上有利の位置を占め、且港灣鐵道其他交通機關の便備はる等、工業發達の要件を具備せるにより、夙に工業地として世人の注目を惹けるところなるが、現今の状態は未だ以て大工業の勃興を見るに至らず、市内及接續地に於ける工場數(職工十人以上) 四十二箇所の内原動力を有するもの二十三箇所、其機關數十六、馬力數七百七十七馬力に過ぎず、從て煙筒林立煤煙空を蔽ふの壯觀を見る能はずと雖、中小工業に至りては著しく發達し、凡そ工藝品として本市に産出せざるものなく、復た其品質價格の點に於ても敢て他地方の製品に下らざるが如し、今日世に知られたる重もなる工産品を擧ぐるも博多織、博多人形、博

多絞、素焼物、博多翠先、博多筆、博多鉄、車力等枚舉に遑あらずして多種多様の生産あるは、本市工業の特色と云ふべし。然して本市が斯くの如く特有の物産に富む所以は、應仁以來の名邑として我國に於ける最も古き商工業地なる而已ならず、博多港は外國貿易最初の港津にして、古來支那國と交通の要衝にありたれば、同國の進歩せる工業技術は最も早く輸入され、製造業の發達を見たりに職由するもの如く、彼の博多織を初め本市特有物産の沿革を考查するに多くは起源を其當時に發し、爾來時勢の變遷に伴ひ漸次改良工夫を重ねて今日の盛況あるに至りしなり。然して今や各種の工業を通じ同業組合の設置其他の方法を以て製品の意匠に、製法に、將た企業組織の上に、鋭意改良を加へつゝあれば、向後一層の發達を見るべし。又地形の利交通の便は漸次大工業の勃興を見んとし、現にライジングサン石油會社の精油所は對岸西戸崎に設置せられ、南洋の原油を輸入して本邦石油界に雄飛せんとするあり、本市が工業地として

面目を一新する必らずしも遠き將來にあらざるべきか。

重なる工場

現時の重なる工場左の如し。

名	稱	製品	所在地	名	稱	製品	所在地
福岡日々新聞社	新聞紙	須崎土手町	石橋酒類製造場	清酒	濱小路		
九州日報社	新聞紙	中島町	烏井鐵工場	機械汽罐類	南港町		
共文社	刷版印刷	中島町	河内洋服部	洋服	下新川端町		
大隈活版所	活版印刷	下名島町	中尾酒造所	清酒	橋口町		
松居織工場	博多織	東中洲町	石田酒造場	清酒	東中洲町		
河原織工場	博多織	東中洲町	綿平酒店	清酒	本町		
博多電燈株式會社	電燈	東中洲町	深見鑄造場	農具鍋釜	上土居町		
博多瓦斯株式會社	瓦斯	千代村	磯野鑄造場	農具鍋釜	上土居町		
太田屋工場	蠟燭	堅粕村	瀬崎鐵工場	機械汽罐類	御供所町		
山家屋	清酒	瓦町	徳永分工場	機械汽罐類	大隈四丁目		

齊藤製作所	機械類	極樂寺町	二九娘製造場	清酒	中對馬小路
井村鐵工場	機械類	大濱一丁目	紙興醬油店	醬油	社家町
吉田燃糸工場	燃糸	住吉村	加野酒類製造場	清酒	大濱町
鐵淵紡績會社支店	綿糸	住吉村	太田屋醬油店	醬油	三丁町
石藏酒類製造場	清酒	大濱四丁目	柴田鐵工場	セメント	藏本町
許斐酒造場	清酒	船町		上金屋町	

重なる工産品

本市に於ける製産品は品種類多に上れるが、去四十年度に於ける二萬圓以上の物産を列擧すれば左の如し。

品名	金額	品名	金額	品名	金額
博多織	一五、六〇、三六四 _円	靴	一一八、〇〇〇 _円	高取燒	四二、五〇〇 _円
諸機械	三〇〇、〇〇〇	綿織物	一〇四、九九〇	蒔	三六、〇〇〇
履物	二二四、八一〇	菓子	五三、〇〇〇	博多人形	三四、〇〇〇

酒	四〇三、九六八	生蠟	三三、四五〇	燭	三五、〇〇〇
醬油	二一七、九一〇	菜種油	三五六、九〇〇	筍	三〇、六〇〇
菜種油粕	一三三、四〇〇	洋服	二二六、〇〇〇	細工人形	三〇、〇〇〇
度量衡器	一一四、四五八	文具	一一三、四〇〇	人力車	二二、〇〇〇
勳先	一〇二、八八四	鍋釜	一〇五、六五五	馬車	三〇、〇〇〇
車力	七〇、〇〇〇	バケツ	八七、五〇〇	色染物	三〇、〇〇〇
椅子卓子類	四二、七五〇	博多絞	五五、〇〇〇	琵琶	二六、一一〇
素焼物	四二、〇〇〇	帽子	四二、六〇〇	提燈	二五、〇〇〇
金屬器	三五、〇〇〇	足袋	三八、〇〇〇	罐詰	二三、〇一八

博多織

本市著名の物産なり、近時八王寺、米澤、西陣、桐生、足利、其他絹織物の産出せらるゝ地方に於て、博多織の模造品を出さざるなき有様なるが、此間に立ちて能く本場博多織の聲價を保ち、毫も需要の衰退を見ざるは其製品が他の模

倣し難き特色あるを以てなり。現今製造戸數三百十二戸、産額十五萬八千五百六十四點、價格百五十六萬三百六十四圓に達す。博多織の創始は嘉禎の頃、満田彌三右衛門なる者なり、辨圓和尚に隨ひて入宋し織物、朱燒、箔燒、素麵、麝香丸の製法を習得し、仁治二年歸朝するや其工業を郷人に傳授し、獨り織物は家傳として製織せしに始まる。彌三右衛門の歿後子孫相踵で當業に従事し、家運隆々たるものありしも、其極遂に衰微に傾き彦三郎出づるに及び、支那に學びて研究を重ね、之を再興して家名を擧げしが、後奈良天皇の天文年中竹若伊右衛門、彦三郎に就きて斯業を學び更に新機軸を出す、時人之を覇家臺織(博多織)と稱せり。伊右衛門の養嗣子惣右衛門なる者、豊公島津征伐に際し馬を博多に驛ひるや『天下泰平國家安穩日月浪情』の十二文字を現したる下緒を獻じ、又た黒田長政の入國に當り博多織を獻じて扶持を賜はる、後黒田家の軍旗を調製し或は幕府への定格献上品用達を命ぜられ、斯業は漸く盛大に赴けり、献上の名は蓋し之れより起りたるものにして、當時は専ら帶地を織出したるなり。然れども藩政時代は製造業者の數を限りたるを以て當業者之に狎れて研究を怠り、單に舊習を墨守したりしが、維新の革新と共に此制破れ從業者漸次其數を増し、各々意匠を練り斯業は駭々として發達し、明治十九年組合を設置するに及びて、益々進歩の成績を示せり。

博多絞

博多織と並び稱せらるる本市の物産にして、製造戸數六戸、産額二萬五千反價額五萬五千圓なり。該業の創始は史蹟の徵すべきものなきも、史を案するに天智天皇の時に耽羅佐平椽磨等へ、纈十九匹を賜ひしことあり、纈纈とは糸を以て織布を括り、染液に浸して製し、即ち今日の絞染の幼稚なるものなれば、此時代絞染の法は既に我が國に行はれ、絞染模様 of 衣裳が官人官女等に愛玩されたる事明かにて、且つ天智天皇は筑前の行宮に在らせ給ひしを以て、大宮人が身

に纏へる衣服の模様は當時の博多人士の眼に映じ、之に倣うて製出したるや疑ひなく、蓋し博多絞の起源は遠く此時にあらんか、然れども其製法幼稚にして微々振はず、博多再興の後に至りて始めて産業の發達に従ひ、絞染法も漸次改善進歩し來り、遂に地名を冠して博多絞と稱するに至りしなるべし。

博多人形

玩具又は室内裝飾品として好評を博し、近來到る處博多人形の名を知らざるものなきに至れり。製造戸數四十戸、産額三十八萬二千三百個、價額三萬四千八百九十圓なり。慶長十三年黒田長政福岡城を築きし時、瓦製造用達正木宗七頗る彫刻の術に巧なるより、城瓦に用ゆる土を以て人形を造り之を長政に献じ、其後屢々人形の製造を命せられ、又香椎宮に奉幣使の來るや、柿本人丸の肖像を造りて之を献せり、是れ本業の濫觴なり。始めは玩具雜兜の類を製造するに止まりしが、明治二十年組合を組織し、彩色意匠の改良を圖り、且つ室内裝飾

品等の製造を研究し販途大に擴張せり。

素焼物

製造品に極めて多種類に亘り居れるも其重なるものは七輪、火鉢、火消壺、改良竈等にして原料土質適良なるにより、耐火力強く使用久しきに耐へ、經濟向きなるを以て夙に好評を博せり。製造戸數十八戸、産額四十萬二千個、金額四萬二千圓なり。毎年冬期に至れば各地の注文頗る加はり、晝夜製造に従事するも尙需要に應ずる能はざる程なり。該業の沿革は茫として知るに由なきも、今を距ること五六百年以前、浪士八尋某なるもの當地に來りて、炮烙を製造せしに始りしものゝ如し。

文具

博多毛筆は其原料たる獸毛が縣内附近の地方に産じ、且つ其質良好なるにより、製品隨て優良なり。製造戸數十五戸、産額二百四十二萬五千、價格十二萬二千

四百圓に達す。博多港は往昔唐土往來の要衝に當り彼我の交通頻繁なりしを以て、各種文具の輸入に接する便宜ありたれば、製筆の技大に發達したること、彼の延暦年中既に筑紫の筆墨が筑紫の斐紙と共に有名なりしに徴して明かなり、降て文祿年間豊公肥前名護屋駐軍の際、河原田平次なる者、筑紫筆各種を獻じて賞詞を得たるより一層名聲を博し、爾來本市の一物産となり、今日の盛況あるに至りしなり。

博多車

製造の多きは荷車にして馬車牛車之に亞ぐ、充分乾燥したる櫟材を以て車體を製作するにより、堅牢にして實用に適す、是れ博多車の名ある所以とす。製造戸數四十四戸、産額七千二百輛、價額十萬八千圓なり。明治十年西南戦争の際軍用荷車を本市に於いて供給し、好評を博したるにより漸く斯業の勃興を見るに至り、次で日清、日露戦役となり軍用車の需要一時に増加するや非常の盛況を呈したり、平和克復後と雖戦役中に得たる好評は別段需要の減少を見るに至らずして、内地は勿論滿韓各地に販途を有す。

博多犁先

白銑玉鋼等の高等鐵配合を以て原料とし、鑄術亦た多年の經驗に出づるにより、製品頗る堅牢にして容易に磨滅せず、且つ泥粘濕潤の耕土と雖軽く耕起し、土表の反轉耕墾自由なるは博多犁先の特色にして、現今製造戸數二戸、産額八十二萬五千三百三十個、價額十萬二千八百八十四圓なり。斯業の創始は今を距る三百年前即ち寛文年間であり、當時内國各藩制を異にし、他管管下製出商品の輸入を禁じたるにも拘らず、博多犁先の精銳堅牢にして使用輕快なる、毫も之が爲めに販途の減退を見ざりしこと云ふ。而して今日の如く全国各地到る處販途を有し、斯業の盛大を見るに至りしは明治二十二年以後の事にして、即ち農業の發達と共に牛馬耕耘は益々各府縣下に普及し、犁先及犁の需要年を逐うて増

加するあり、偶々林遠里の設置に係る勸農社員の米作改良教師として各地方に招聘せらるるもの、皆筑前犁を用ひ其効用の多大なるを知らしめたるより、該犁先の販途頓に増加し、内地は勿論韓國各地に輸出するに至れり。

博多鉄

本市の一物産にして正刃金入りを特色とし永く使用に耐へ、磨方並に刃金加減形状等改良せられたる點多し。製造戸數十八戸、産額十二萬個、價額一萬圓内外なり。近時需用漸増の有様なるも、該品を製造するには多年の熟達を要するを以て之に従事する職工少なく、爲めに充分需要に應じ難き現況なり。本業の創始は 後奈良天皇の御代天文十二年頃外國より傳來したるものなりと云ふ。

高取焼

著名の物産にして製陶工場は市外西新町にあり、製造戸數三戸、産額十六萬三千九百八十一、價額二萬五千八十九圓に達せり。本業の沿革は文祿征韓の役黒田長政の歸國に隨ひて、韓人歸化し名を八藏と呼び、舅新九郎と共に製陶の良工なりしが鞍手郡高取に居り製造に従事す、是れ高取焼の濫觴なり。長政歿し忠之國主たるに及び、八藏の子八郎右衛門を伏見に遣し、茶道家小堀遠州に就き茶器の製作法を學ばしむ、又た唐津の浪人五十嵐次右衛門を高取に置き共に製陶の業に従事せしめたり。明治維新以後斯業は殆んど廢滅に歸せんとせしが、明治二十三年に至り森長三郎之を再興し、研究を重ね改良を加へ今日の盛況を見るに至れり。

物産陳列所

福岡縣物産陳列所は洲崎町にあり、縣下に於ける各種の物産を陳列して世人に紹介すると同時に、一面には各地方の製産品を蒐集し、斯業者研究の資料に供する目的を以て、去る明治三十九年福岡土木監督署の廢止せらるるや其建物を借入して假りに陳列所を設置せり。然れども位置の不適當なると、建物の狹隘な

るとは設備完全せず、充分の効果を見る能はざるも、尙ほ當業者を益するところ少からず、陳列する物品は農産、林産、礦産、水産及び織物、陶器、花菱、製紙、清酒、醬油、木蠟、製茶、製粉其他の諸工産品並に縣外參考品等にして、出品の總數八千五百餘點に及べり。

商 業

集散貨物——開港場——外國貿易——國內商業——會社——銀行——金融——取引所——市場——倉庫——商業會議所——商品陳列館

博多は應仁以來の名邑にして此地に官家設置され、爾來西海の政治中心たりしが、之と共に商工業發達し、敏達天皇の二年更に此地を蕃舶の要津と定め給ひしを以て、博多は西海商業の中心地を兼ねるに至れり。降りて醍醐天皇の延喜九年税關検査の事務を太宰の府官に一任せらるゝあり、朱雀天皇の承平五年

唐物使を此地に遣はして貨物を検査せしめらる是れ唐商廣集して雜貨の眞價相錯るを以て之を正さん爲めなりこと、當時商港としての博多の繁榮想ふ可し。天文寛永の交に至りては宗室、宗湛、宗伯等の諸豪時を同ふして輩出し、貿易頗る殷賑を極めしこと人の能く知るところにして、斯くの如く本市が早く商業の發達を見たるは、畢竟するに内外交通上主要の地位を占むるに基くこと勿論なり。然るに徳川幕府の治世に當り、海外交市を禁じてより三百年、海港の發達遅々たるを免れざりしも、今や經濟事情の進轉、交通機關の完備は地形の利に加ふるに、更に交通の便を以てし、地方的市場として百貨輻輳の盛況を見んとす、現に商業戸數六千七百四十二戸、一箇年の集散貨物別項の如くなるに徴して本市商業の一斑を察知すべきなり。

集散貨物

地方的市場として海陸の貨物輻輳し集散極めて活潑なり、陸運貨物に就て見る

に、最近の博多停車場發送貨物は三萬六千八百餘噸、到着貨物三萬七千九十餘噸にして、九州線中門司驛を除けば殆んど其右に出づるものなし、又た海運貨物は博多港三箇年の統計左の如し。

年 別	輸 出		輸 入		合 計	
	數 量	價 額	數 量	價 額	數 量	價 額
明治三十九年	三〇一、三〇九	二四七三、六四六	四九五、一六三	五六三九、五三九	七九六、四七二	八二三、一七五
同 四十年	二九八、八七三	二、五〇七、一〇三	五二八、五〇〇	六、一八六、四五六	八二七、三七三	八、六九三、五五九
同 四十一年	三三三、六〇五	二、七九四、一四四	五四七、二七四	六、八四二、七二〇	八八〇、八七九	九、六三三、一三四

以上は汽船に據る貨物にして更に帆船に據るものを示せば、四十一年中に於て輸入三百一十一萬三百三十圓、輸出十二萬三千四百七十二圓なりとす、即ち博多港に集散する貨物は合計約一千三百萬圓に達すべきなり、尙ほ左に四十一年中の重なる貨物品名を示さん。

輸出之部

種 目	數 量	價 額	種 目	數 量	價 額
内地米	一〇四、六六〇	六、二四、二三三	酒類	一一、二三六	一、六八、五四〇
外國米	一八、四二二	一一九、七四三	砂糖	六、六二一	九二、六九四
炭	五、二五六	二、六二、八〇〇	呉服反物	一、七二六	二〇七、一一〇

輸入之部

種 目	數 量	價 額	種 目	數 量	價 額
外國米	六五、四二〇	四、二六、二三〇	砂糖	三四、二一一	四、七八、九五四
大豆	七〇、三二〇	三、五一、六〇〇	錫	二七、三〇五	六、八二、六二五
呉服太物	四、八一三	五、七七、五六〇	綿布	三、九三九	一〇八、三二三
糸類	二、九七三	一一八、九二〇	和洋被服	四、九〇一	二、四五、〇五〇
小間物	七、〇一五	三、五〇、七五〇	金物類	五六、一二六	四、四九、〇一八
魚類	一	一、六三、五三〇	材木	一	六、八三、五三〇

往昔盛況を極めし博多港の海外貿易は交市禁令と共に一頓挫を來し、加ふるに海港年々に土砂を堆積して、水深淺く、大船巨舶を泊するに便ならざるも、之を小にしては西海の要津として後に豊富なる筑肥の生産地を控へ、前は清韓諸國に對して優越なる地歩を占め、之を大にしては世界交通の現況に顧み、國際的貿易港として重要な地位にあり。之を以て夙に識者の着目する所となり、既に第二十四議會に於ては國家の經營に依り、一大築港を建設するの請願を可決せり。而して政府の同港に對する既往の施設を見るに、明治十七年朝鮮國に限り其貿易を許し、二十二年特別輸入港と定め、二十九年に至り特別輸出入港に進め、三十二年に至り更に開港場に指定せり。博多築港會社の經營に係る築港工事は、去る四十一年を以て完成し、海運業に多大の便益を與へつゝあり。

(交通の部参照)

外國貿易

博多港の外國貿易は韓國を最とし、關東州南清諸港との交市は漸次發達を遂げつゝあり、其貿易額に於ては遙に門司、長崎諸港に及ばずと雖、近時長足の進歩をなし、殊に韓國貿易の如き去る明治三十八年來市に於て補助金を支出し、博多釜山間定期航海を開始して貿易の利便を圖りたるより、面目漸く新まらんとし、且つ税關特許私設上屋等設置せられて自然的地形の利便は人爲的設備の定成と相俟つて貿易の増加を促したり。去る三十年の博多港外國貿易額は僅に輸出二千七十四圓、輸入二萬八千圓合計三萬七十四圓に過ぎざりしもの、四十二年には輸出九萬九千四百五十四圓、輸入五十六萬二千六百七十五圓合計六十六萬二千二百二十九圓となり、約二十倍の増加を示せり、更に近來博多灣の周圍に於て大工業勃興の機運を示しライオン・グサン石油會社の精油所等設置せらるゝに及び、其原料及製品の輸出入額に増加し昨年如き、優に二百萬圓以上の貿易

額に達すべく豫想せられたり、尙ほ以上は博多税關支署の統計を示したるものにして、本市實際の貿易額は遙かにそれ以上にあることを一言し置くを要す。即ち博多港輸出入の貨物にして、汽船の都合に依り嚴原又は佐須奈に於て通關の手續を爲すものは、博多港の統計より除かれ居り、而して是等の貨物決して抄からず、故に本市に於ける實際の貿易貨物は未だ直に統計のみを以て其多寡を論ずべからざる者あり。序に参考の爲め最近十一箇年の貿易統計を左に示さん。

年 別	輸出入合計	年 別	輸出入合計
明治三十年	三〇、〇七四 _円	明治三十六年	八八、〇〇四 _円
同三十一年	一〇九、二九三	同三十七年	四〇、三三八
同三十二年	一〇、四七九	同三十八年	一九四、七六八
同三十三年	一九〇、九一五	同三十九年	三二四、六五六
同三十四年	八七、四七八	同四十年	五六三、七四九
同三十五年	五二、六一九	同四十一年	六六二、一二九

而して博多港の後方地域たる筑前の一部及筑後、肥後の全部に於ける韓國貨物は、交通の部に記するが如く、彼の門司港に回送するよりも、最近港灣たる博多港を経由して本市の補助汽船に依れば、其運賃諸掛の點に於て優に一割乃至二割方低廉なり。然るに多數貨主は未だ是等の利便を知らざるものゝ如くなりしが、近來漸く一般に其便益を知悉するに至りしと共に、貨物漸次増加しつつあるを以て、常港の韓國貿易は益々發達するに至るべし。

國內商業

本市に於ける物資は呉服雜貨を始めとし、商品は殆んど之を大阪に仰ぎ、本市の生産品の仕向地も阪地を主とす。從來本市は九州各地に對する商品の中繼地なる觀ありしが、交通運輸の便開けたるを以て、是等各地より直接阪地其他産地と取引を行ふに至り、一部の商取引は多少減少したるが如くなるも、地方に於て交通の便と共に取引の範圍擴張せられ、市場集散の貨物は年を逐うて増加

せんとす。而して阪地の外下關、門司、唐津、平戸、長崎其他九州各港、神戸横濱等全國の主要地に亘り取引の範圍廣大なるも、就中長崎縣下對馬、壹岐二島は取引最も密接にして、明治四十年中筑前白米の輸出總高八萬五千餘石中對馬一島の分は八萬餘石に達し、二島に於ける清酒、醬油、石油、雜貨等物資の供給は殆んど之を我福岡市に仰ぎ、旅客の來往大抵博多港を經由せざるなし。

會社

日清戰役後企業熱の勃興と共に、各種の會社は恰も雨後の筍の如く一時に興起し頗る盛況を呈したるが、三十三年より四十年に掛けて經濟界の動亂と共に大海汰を受け營業の方針堅實にして基礎鞏固なるもののみ殘存し、是等の會社は年を逐ふて漸次業務の發達を見つゝあり。殊に本市は九州の中央にありて交通の便備はり、營業上利便なるを以て、京阪地方の會社にして支店を九州に構へんとするもの皆其位置を本市に選ぶにより。其數著しく増加しつゝあるを見る、

現今會社の重なるもの即ち左の如し。

名	稱	目	的	所在地
博多電燈株式會社		電氣供給及電氣機械販賣		東中洲町
兄弟合名會社太田屋		油蠟類並清酒釀造販賣		藏本町
株式會社共文社		活版印刷帳簿製造		中島町
株式會社博多米穀取引所		米穀取引市場		東中洲町
株式會社博多魚市場		魚類販賣		西方寺前町
博多魚市株式會社		同		下對馬小路
銀四倉庫株式會社		倉庫業		馬場新町
株式會社晴心館		潮揚業		海岸通
株式會社壽座		劇場貸貸業		東中洲町
九州ラムネ株式會社		ラムネ製造販賣		西土居町
博多競商株式會社		物品委託販賣		下土居町
株式會社石藏商店		同上並地所家屋貸貸		上鬮町
博多汽船株式會社		汽船運送業		下對馬小路

冷泉瀛船株式會社
 合資會社林商會
 明治運輸株式會社
 博多製陶株式會社
 九州製油株式會社
 博多瓦斯株式會社
 鐘淵紡織株式會社支店
 合名會社松居織工場
 株式會社冷藏庫
 ライジングサン石油株式會社
 帝國生命保險會社福岡支店
 共濟生命保險會社福岡支店
 福岡日々新聞社
 內國通運株式會社
 田村合資會社
 東京火災保險株式會社九州支店

瀛船運送業
 運送船拔業
 運送取扱業
 陶器土管煉瓦製造販賣
 製油業
 石炭瓦斯製造販賣
 綿糸製造業
 博多織製造販賣
 魚類販賣
 石油精製販賣
 生命保險
 同
 新聞發行
 貨物運送
 煙草販賣
 火災保險

海 岸 通
 同 柏 村
 同 同
 同 同
 千 代 村
 住 吉 村
 東 中 洲 町
 冷 泉 町
 東 中 洲 町
 中 島 町
 土 居 町
 須 崎 土 手 町
 堅 粕 村 犬 飼
 下 西 町
 藏 本 町

明治火災保險株式會社福岡支店
 橫濱火災保險株式會社福岡支店
 共同火災保險株式會社福岡出張所
 日本火災保險株式會社九州支店
 日本生命保險株式會社九州支店
 明治生命保險株式會社福岡支店
 日ノ出生生命保險株式會社福岡支店
 國光生命保險株式會社福岡出張所
 日清生命保險株式會社福岡支店
 太陽生命保險株式會社九州出張所
 大同生命保險株式會社九州支店
 東洋生命保險株式會社福岡支部
 千代田生命保險株式會社福岡支部
 萬歲生命保險株式會社福岡支部
 仁壽生命保險株式會社福岡支店
 帝國生命保險株式會社福岡支店

同
 運送保險
 火災保險
 同
 生命保險
 同
 同
 同
 同
 同
 同
 同
 同
 同
 同
 同
 同
 同
 同
 同

中 島 町
 下 新 川 端 町
 下 西 町
 中 島 町
 橋 口 町
 中 島 町
 中 島 町
 下 名 島 町
 下 祇 園 町
 下 祇 園 町
 下 祇 園 町
 下 祇 園 町
 社 家 町
 下 名 島 町
 天 神 町
 西 港 町
 下 新 川 端 町
 中 島 町

横濱生命保險會社福岡支店
福壽生命保險會社出張所

生命保險
同

下新川端町
橋口町

銀行

本市には普通銀行四、農工銀行及貯蓄銀行各一ありて、遺憾なく金融機關たるの任務を盡しつつあれば、商工業者に取り些の不便あるを見ず。各銀行亦た着實可憐努めて確實を旨とし、且業務に精勵せるを以て孰れも健全なる發達を示せり。

行名	拂込資本金	積立金	所在地	創立年月
十七銀行	一〇〇〇,〇〇〇 <small>円</small>	一六七〇 <small>円</small>	橋口町	明治三十年九月
土居銀行	五〇〇,〇〇〇	一一,一〇〇	中土居町	同三十年四月
住友銀行支店			掛町	同三十五年八月
百三十銀行支店			下土居町	同三十一年八月

農工銀行	六〇〇,〇〇〇	一七六,二二〇	須崎土手町	同三十一年五月
福岡貯蓄銀行	七五,〇〇〇	七五,〇〇〇	中島町	同二十九年八月

金融

左に明治四十一年中の金融に關する諸表を掲ぐ、以て資金需給の狀況を知るに足るべし。尙ほ金利は時に高低を免れずと雖大低割引日歩最高二錢八厘、最低二錢二厘の間あり。

銀行名	一箇年間預金	同上年末現在	一箇年間諸貸出	同上年末現在
十七銀行	一五,五四一,六八四 <small>円</small>	三,三二五,一〇五 <small>円</small>	一六,六八七,六八五 <small>円</small>	五,〇三九,九〇七 <small>円</small>
土居銀行	一,二四七,五五八	二六三,一九七	三三三,九四二	一一三,一五九
百三十銀行	八,二七六,六二六	三,八二七,七三七	四,四八二,七七七	五,七九二,二〇〇
住友支店	二五,七〇一,六三三	二,一〇二,一四一	一七,五四八,三七一	一八,六四六,六四四
貯蓄銀行	二,九三六,五八九	五,四〇,五八九	二,六六八,二二三	三,三七〇,三三三
農工銀行	五,一三三,五五九	三,八九六,三三四	五,四〇,六五〇	一,九七六,六一〇
計	五四,二九六,三六八	六,九〇三,四〇三	四二,二四〇,五八七	九,八五四,五七二

取引所

東中洲町に博多米穀取引所あり、該取引所の創始は遠く徳川幕府時代に胚胎し、當時米商會所と唱へ、米穀定期賣買を爲し來りしが、維新前後に於て十數年間中絶したり。然るに地方米價の標準を立て賣買取引を容易ならしむべき市場なきを憂ひ、明治十七年本市及附近の商人十餘名、資本金三萬圓を醸出して米商會所を組織し續て株式組織に變更せり。三十六年取引所法改正と同時に資本金を十萬圓とし營業を繼續せしが四十一年に至り會社内部の財産状態に整理の必要起り、全部役員の交迭と共に資本金七萬圓を増募して總額十七萬圓の株式會社となし。昨四十二年六月より營業を開始し、米穀の取引就中定期取引主として行はれ居れり。爾來時運の進歩に伴ひ漸次取引高増加しつつあり。現今仲買人數十三名、昨年六月より十二月に至る賣買高九十四萬六千二百石に達せり。

市場

本市には三箇所の魚市場及二箇所の蔬菜市場あり。魚市場は孰れも株式組織にして博多魚市株式會社、株式會社博多魚市場及博多冷蔵庫專屬魚市場の三社とす。而して本市は玄海に接し韓海日本海を控へ、魚類集散地として最好の位置を占むるにより、三會社の取扱に係る魚類は一箇年實に三百萬圓の巨額に達せり。斯かる狀況なれば魚市場も亦た發達し、需給者の中間に在りて多大の利便を與へ居れり、四十一年末現在仲買人數二百四十六人なり。又蔬菜市場は從來完全なるものなく、西門橋畔に於て需給者集合し賣買しつつありしもの、漸次盛大となり蔬菜市場を成すに至れり。然るに本市の果菜集散高は四十一年の調査に依れば蔬菜三十七萬五千圓果物二十九萬七千圓合計六十七萬二千圓に達し、尙ほ此調査に洩れたる分を合すれば優に一百萬圓以上に上るべき狀況なるにより昨年更に有志相謀り、市外瓦町口に新蔬菜市場を創設したるが、目下株式組織となし、一層業務の擴張を圖る計畫中なり。

倉庫業としては鎮西倉庫株式會社あり。同社は明治三十三年の創立に係り、拂込資本金一萬二千五百圓、積立金三千二百七十圓にして當市五銀行は同社の倉庫證券に對し割引貸出をなすを以て商業家の利便多大なり。現今使用の會庫四十戸前、此坪數七百二十二坪六合二勺に達せり又た去る四十一年十二月末現在在庫品高は三萬三百二十二箇此價額二十五萬五千四百二十七圓にして重なる貨物は米穀、砂糖、蠟、油、粉類、生糸、繭等なり、又た博多築港内に坪數百六十二坪九合を有する税關特許私設上屋の設けあり、倉入中關稅の納付を猶豫せられ倉出の際現品に對する關稅を納付する利便ある而已ならず、該上屋は倉入當時より七十二時間は倉敷料を無料とし、期間後俵物(五斗入)壹箇月八厘、雜貨一錢、大豆粕三厘五毛の倉敷料を徴するに過ぎずして専ら營業者の利便を圖りつゝあり、四十一年中倉入箇數二十萬三千六百四箇に達せり。

商業會議所

博多商業會議所は東中洲町にあり、商工業の中心として各般の事務に執掌せり同會議所は明治十二年の設立に係り、當時福岡商法會議所と稱し、少數の實業家相謀り毎月一回談話會を開き、經濟上に關する諸般の事項を講究し、之を世上に公示して實業の發展に資せしが、爾來官廳の諮問に應答し、條約改正其他時事問題に關し力を致せり。十八年一月更に當時營業者荷主組の協同になれる協成社と合併し、會議所規程を實行するに至りて茲に漸く活動の域に入りしが、二十三年九月商業會議所條例公布さるゝに及び、初めて同會議所を設立するに至れり、現時議員の數三十名(外に特別議員六名)にして役員は會頭一名、副會頭二名、常議員五名なり。

商品陳列館

福岡市商品陳列館は掛町にあり。河原田平助の設立する所にして本縣著名の工

藝品は勿論、内外の工藝品を陳列し併せて即賣をなせり。其方法は同館に於て各種の出品物を引受け陳列をなし、看護人をして販賣せしむるものにして、階下及二階を之に充て三階は一時的陳列展覽會並に諸集會に使用せしめ居れり。

農業及漁業

漁業——製鹽——沖獨活——養蠶——肥料

本市が農業及漁業につき見るべきものは市街地として敢て怪しむに足らず。

漁業

日本三險海の一たる玄界洋の鯛は其風味に於て海内に鳴り、博多灣内亦魚族に乏しからず、市人が朝夕の食膳に上すは悉く潑刺たる鮮魚ならざるはなし、是れ市及び市附近並に壹州對州より供給する所にして、博多新舊兩魚市場冷蔵庫

毎日の取引高三千圓を下らず。市内に於ては伊崎浦を中心として其附近を併せ漁業者百九戸、一箇年の收穫二萬二千四百餘圓に及び、就中鯛は一萬六千餘圓を占む。又朝鮮海出漁は好成績を收めて年々増加發達を示し、市内漁業者の爲めに新天地を開拓しつつあり。而して加工品には饑助煮、水田煮、饑七煮、饑鱈あり、年額二萬圓に達す。

製鹽

支那鹽、臺灣鹽を輸入して之を精製するの業は今全く廢れ、製鹽業としては一の箱崎製鹽所あり、最新式の法により年額三百萬斤を製出し、其半額は之を韓國に輸出す。

沖獨活

『オキウド』は當地方の名物にして沖獨活草なる海藻より之を製す、寒天、心太に似たる食品にして其製法又同じ。

本市は蠶業地にあらず、只婦女子の副業として之に従事するのみにして一年間の産額二千餘圓なり。

肥料

肥料として最も多く産出するは菜種油粕にして其産額多きは一箇年十二萬四千圓餘に達せり(明治四十年)近時大豆粕並に人造肥料等の使途大に開拓せられたれども之が爲め毫も油粕の需用を減せず殊に本品は耕作煙草の肥料として殆んど他は比肩するものなく價格亦た常に一定の位置を保てり。尙ほ本市は地方に於ける肥料の集散地たること勿論にして販賣業者六十四名、一箇年の賣買高二十五萬餘圓に達す。

交通運輸

道路——博多停車場——鐵道——電鐵——軌道——港灣——博多港——
貨客及出入船舶——福岡港——國港築設の議——海路——博釜間航路——
燈臺——旅館——人力車

陸地にありては九州鐵道市の南端を走り、一瞬にして百里を馳するを得べく、海上は博多港を控へ船舶輻輳して貨物の回漕自在なり。陸海交通の利便なるは蓋し本市の如きは稀に見るところとす。唯未だ臨港鐵道の布設を見る能はずして海陸連絡輸送の設備全からざるは遺憾とすべく、夙に地方人士の間に其必要を唱導せらる、更に市街の交通に至りては道路狹隘を免れざるも概ね平坦且つ電氣鐵道ありて市の中央を貫通し、隨處數分時にして來往するを得べし。本市商工業の繁榮は主として此交通運輸の利便と、地形上優勝の位置を占むることとに因す。

道路

本市が千七百餘年前の小邑より漸次發達して一都市を現出するに至るまで、或は兵燹に遇ひ、市街は時に膨脹し、時に衰微し、其間幾多の變遷を重ね今日に至れるを以て、街路亦狹隘不整なるを免かれず。國道は縣廳前より中島町掛筋を經て松原箱崎に通じ、縣道は縣廳前より西して早良糸島兩郡を貫通し肥前に入る、是れ本市の貫通道路なるも而も幅三間に達せざる所あり、市街の繁榮に伴ひ交通上障碍尠からず。是に於て道路擴張の必要を感ずるに至り、其第一着手として明治四十一年工を起し、市は縣廳前より一直線に筑紫郡千代村に達する幅員十間の大道路を、縣は博多停車場前より該新設道路に至る十間幅の大道路を更正築造し、同時に電鐵を該道路に布設するに至れり。又市外に通ずる縣道は前記の外嘉穂郡飯塚に至るもの、筑紫郡山家村に國道と合するもの、肥筑山脈を越えて肥前に達するものあり。總べて國道延長十二町二十二間、縣道二里六町十三間、里道十四里二十四町二十六間に及べり。

地名	福岡元標 よりの距離	地名	福岡元標 よりの距離	地名	福岡元標 よりの距離
東京	三百五里十九町	久留米	十里十六町	長崎	四十六里
大阪	百六十一里十五町	柳河	十四里十九町	佐世保	二十一里
小倉	八里三十二町	熊本	三十二里十二町	宮崎	九十七里
直方	十一里二十町	大分	三十八里五町	鹿兒島	九十六里
若松	十七里五町	佐賀	十五里七町	沖繩	三百七十七里

博多停車場

馬場新町にあり。九州線幹線中の主要驛にして二十萬の資を以て建築され、規模宏大、貴賓室を始め各種の設備間然する所なく、眞に本市の立關たるに恥ぢず、明治四十年中の成績によれば乗客四十七萬五千餘人、降客四十九萬五千餘人にして旅客來往の頻繁なる九州線第一位にあり。又貨物發送三萬六千八百餘噸、着驛三萬七千九十餘噸に達し、同年間收入賃金三十一萬餘圓にして九州線

中只僅かに門司驛に遡るのみなり。

鐵道

明治二十二年十二月十一日博多久留米間の鐵道成り、開通式を舉行してより、地方の交通状態に一大變化を與へ、爾來鐵道の發達に伴ひて交通の便益と開け旅客の來往、貨物の輸送日に加はりて市の發展を促進せり、今各地に至る距離及び最大急行列車による所要時間を左に掲ぐ。

地名	距離	所要時間	地名	距離	所要時間
東京	七百五十五哩	三十二時	直方	三十八哩三	一時五十分
大阪	三百九十九哩	十七時	二日市	九哩三	二十分
門司	四十八哩九	二時十五分	久留米	二十二哩六	一時
小倉	四十一哩六	一時五十五分	大牟田	四十三哩一	一時三十五分
長州	八十四哩二	五時	熊本	七十四哩	三時
若松	三十六哩一	一時二十分	人吉	百二十八哩二	六時二十分

電鐵

佐賀	二十三哩七	一時十分	長崎	百六哩八	五時五分
唐津	六十四哩五	三時五十分	鹿兒島	百八十八哩八	十時四十分
佐世保	七十三哩二	三時十分			

市内の交通機關としては、市外千代村より本市黒門橋迄三哩十鎖及吳服町より分岐して博多停車場に至る四十三鎖の電氣鐵道あり。該鐵道は福博電氣軌道株式會社の經營に係るものにして、明治四十二年九月資本金六十萬圓の内、二十四萬圓の拂込をなすと同時に工を起し今回落成を告げたるなり。線路は總て複線とし、新造車輛二十五臺を備へ凡そ二分時毎に發車せしむるを以て、市の東端より西端及び停車場間は絶へず電車の忙しげに駛するを見る。博多停車場に下車し、電車の便を借れば十數分時を要せずして共進會場、東西兩公園等に達するを得べし、尙は會社は引續き黒門橋樋井川間及び千代村箱崎間五十六鎖の線路

布設工事に着手の筈なれば竣成の上は一層の利便を加ふべきなり。因みに發電所は市外比恵にあり英國製水管式汽機二臺、同國製二百馬力及米國製百二十「キ」ロワット「二」臺の發電機を裝置せり。

軌道

北筑軌道株式會社の經營せる輕便蒸氣鐵道は、市の西部黒門より起りて早良郡を貫通し、更に糸島郡に入り進んで佐賀縣唐津に達し、又黒門より荒戸町、港町を経て福岡部海岸に沿ひ洲崎裏町に到る計畫にて着々工事を進めつゝあり。從來糸島郡地方との交通運輸は不完全なる馬車により之を便せしが、該軌道竣成の上は多大の便益を見るべし。

港灣

本市は古來幾多の歴史を有する博多灣に沿うて市街をなせり。同灣は東及北は粕屋郡、南は本市及早良郡、西は糸島郡により圍繞せられ、唯西北の一隅のみ

玄海灘に開放せり。而して其開放せる灣口には玄海島、机島等ありて之を扼し波濤の侵入を防ぐのみならず、灣内に一大島殘島ありて再び之を扼し、殘島以東四面殆んど風波を防ぎ天然の碇泊所たるを失はず。港灣の周圍には東に粕屋郡の炭田あり、又筑豊炭田の一部たる嘉穂郡には二十餘哩にして達すべく、南は日本三大平地の一たる筑後川一帯の平地ありて農産物に富み、洵に天與の好地形たり。

博多港

博多灣の一角にあり。我國に於ける最古の外國貿易港なること世人の普く知るどころなり。港灣として最好の位置を占むるに係らず。海港年々土砂に埋りて船舶の出入漸く不便ならんとするより、去る三十二年資本金二十五萬圓を以て博多築港株式會社を起し、市の補助を得て那珂川口より石堂川口に至る、對馬小路大濱町一帯の海岸四萬八千五百六十八坪を埋立て、繫船場の面積二萬二千九百

五十坪を存し、且つ埋築地は官有荷揚場二千六百一坪、市街宅地三萬八千八百五十六坪、道路敷地九千五十九坪の設計にて四十一年漸く工事落成し總工費約五十萬圓を要せり。然るに該設計たる最初大船舶收容の目的にあらず、規模極めて狭少なりし爲めに巨船の碇繋に便ならざるは頗る遺憾とするところなるも、八百噸以下の小汽船は優に内港に碇繋し得るを以て、貨物の揚卸に多大の時間と經費とを節約し、荷役の利便尠からず、築港完成後博多港に集散する、貨物は大半該港内に於てせらるゝに至れり。

貨客及出入船舶

博多港の貨客及出入船舶は、前記の如く築港狭少にして設備未だ全からざるに係らず、輸送上利便の位置に在るを以て其數漸次増加しつつあり。左に最近三箇年の出入船舶數を示さん。(汽船貨物は商業の部参照)

出港

年別	汽船		西洋形帆船		五十石以上和船	
	隻數	噸數	隻數	噸數	隻數	噸數
明治三十九年	九四四	二四四、〇六〇	一五五二	一五四、四八〇	四二五〇	二二、九五七
同四十年	一八三二	三三四、九三三	一七一	一八、五六〇	六四四六	三三、七〇八
同四十一年	二二三六	四二六、二四〇	一九六	一九、八七〇	七〇一五	三六、二八〇

入港

年別	汽船		西洋形帆船		五十石以上和船	
	隻數	噸數	隻數	噸數	隻數	噸數
明治三十九年	九四四	二四四、〇六〇	一五五二	一五四、七六六	四二六二	二二、〇二九
同四十年	一八三二	三三四、九三五	一七四	一八、六一〇	六四四〇	三三、七一一
同四十一年	二二三六	四二六、二三七	二〇九	一九、九〇五	七〇一九	三六、九一〇

福岡港

同港は萬治二年以後享和二年に至る迄、藩主資を投じて經營せしむるに於て、波

奈の大部分は當時埋築せし地なり。明治三十三年資本金十二萬圓を以て福岡築港株式會社を創立し市の補助を得て魚町海岸より港町海岸に至る築港埋築工事に着手せしも失敗に終り、巨萬の投資空しく水泡に歸せんとせしを以て、之を市に引受け埋築區域を縮小し、殘工事を完成して和船の碇舶に便ならしめたり。

國港築設の議

博多港の位置たる、北は浦鹽斯德及元山より南は上海、香港に至る諸港に對して恰も扇の要たる地點にあり。而かも亞細亞大陸鐵道系の最尖端たる釜山とは實に呼應の間にあり。且つ西北に向ては仁川、鎮南浦、安東縣、大連、營口、天津、芝罘、西に向ては鎮江、上海、港口、香港等と自由に交通するを得べく地理上對亞細亞大陸貿易港として優勝の地位にある而已ならず、世界交通の進歩は彼のパナマ運河の開鑿將に十年を出でずして功成らんとし、之が竣工の後は大西太平洋兩洋の連絡と共に世界環航の通路初めて成り、太平洋航過の船舶は

益々頻繁を極むるに至るべく、且西伯利亞鐵道の開通は世界の交通線路に於ける運賃里程の短縮をなし、其荷客を浦鹽斯德より吞吐するに依りて日本海航行の船舶愈々多きを加へ、南北亞米利加の諸港と浦鹽、清國、南洋との交通貿易は益々増進すべければ、我國は歐洲と米國、米國と亞細亞及南洋を連ぬる鍵鎖關門たる位置に立つを以て、是等の船舶に對し完全なる一の載炭給水港を設け坐ながら世界の商船を招致する策に出づるは極めて必要の事たるべく、然して其載炭給水港は博多灣を措いて他に求む可からずとし、國港建設の議漸く國家問題として爲政家の間に攻究されつゝあり。

海路

博多港の航路は對州嚴原、佐須奈を経て韓國釜山に至るもの、壹州勝本を経て對馬に至るもの及壹州郷浦を経て平戸長崎に至るものを最とし、四隻の汽船該航路を航海し毎日便船あり。其他唐津、君津、關門、阪神、橫濱間等の沿海航路あり。

り、又た博多灣内航路としては博多、西戸崎、志賀島、糸島郡、間に毎日小蒸汽船往來し交通の便大に開けたり。

地名	博多港よりの距離	地名	博多港よりの距離	地名	博多港よりの距離
勝本	四十一哩	伊萬里	七十二哩	釜山	百四十哩
嚴原	七十二哩	佐世保	八十二哩	大阪	三百十哩
唐津	三十哩	長崎	百三哩	横濱	六百四十七哩
呼子	三十哩	下關	六十哩		

博釜間航路

本市に於ては對韓貿易振張の目的を以て去る明治三十八年より博多釜山間命令航路を開始し、運賃荷役賃等に大改正を加へて荷主の利便を圖ると共に、對馬運輸株式會社汽船天祐丸を指定して一航海金八十圓宛の補助金を交付し、毎月六回一六兩日の定期航海を爲さしめつゝあり。天祐丸は登簿噸數四百七十二噸に

して船體大なりとせざるも、船内の設備は稍々整頓し乗客定員一等八名、二等三十五名、三等九十六名なり。然して博多港より釜山迄の乗客賃金は一等四圓五十錢、二等三圓五十錢、三等二圓五十錢なれば、關釜連絡船に比し殆んど半額の賃金に相當す。又た貨物運賃及諸掛は關門經由の運賃に比すれば一割乃至二割方低廉なる而已ならず、釜山より韓國鐵道沿線に輸送するものは、昨年特に該鐵道と交渉の末、補助汽船積載貨物に限り高率の運賃割引を爲し其他貨物の速達、取扱の丁寧等本市監督の下に遺憾なく爲さなれつゝあれ貨主の利便多大なり。

燈臺

博多燈臺は下對馬小路にあり、不動白色にして光達距離十海里。明治十六年二月個人の建設經營になりしが、後博多財産區會の管理に屬せり。

旅館

商工業の繁榮發達と共に來往の旅客頻繁を加ふることゝて、本市旅館は割合に

發達せるが、尙ほ進で業務の改良發展を期する爲め、四十一年十一月知事の認可を経て旅宿業組合を組織し、協力一致營業の改善に勉めつゝあり、殊に共進會開催に際しては多數の外客を迎ふる次第なれば、一層旅客の取扱に留意し設備に改善を加へて江湖の満足を買ふ事に苦心せるを以て、多少面目を一新するを得べく、又た協賛會にては共進會中旅館の不足を補ふ爲め、素人旅宿を設け來客の利便を圖る計畫あれば旅客に對しては甚しき不都合なきを得べきか。尙ほ現今市内の旅館數は百一軒にして宿料を一部、二部、三部旅館に分ち居れるが、

一部は特等三圓晝食一圓五十錢、一等二圓同二圓、二等一圓五十錢同七十五錢、三等一圓二十錢同六十錢、二部は一等二圓晝食一圓、二等一圓五十錢同七十五錢、三等一圓二十錢同六十錢、四部一圓同五十錢、五等八十錢同三十五錢、三部は一等一圓二十錢晝食五十錢、二等一圓同四十錢、三等八十錢同三十錢、四等七十錢同二十五錢、五等五十錢同二十錢なり。市内及び市接壤地旅館名を掲ぐれば左の如し。

くれば左の如し。

- 一部旅館 晴露館(上對馬小路)博多屋、明治館、初音館、太田屋(以上下新川端町)旅順館、榮屋、海容館(以上橋口町)朝倉屋、吾妻屋(以上天神町)吉己屋(下名島町)紀之國屋(上新川端町)福壽館、梅屋、丸明館、綠屋(馬場新町)帽子屋(下洲崎町)松島屋(中島町)水野旅館(東中洲町)紅卯(甘家町)宮島館(川端町)不老館、音羽館、第二肥前屋(千代村)
- 二部旅館 梅本(天神町)丸井旅館(下土居町)比佐屋(上小山町)米正(箔屋町)吉田屋(荒戸町)梅蔭、飯塚屋(下對馬小路)梅屋、福見屋、川丈、明治屋、養老館(東中洲町)千歲屋(上土居町)吉原、加納屋(養子町)鶴田屋、第二高島屋、第三高島屋(上祇園町)武田屋(本町)萬歲館(橋口町)菖蒲館(上新川端町)海老屋(古溪町)肥後長(古門戸町)吉屋(上四町)綿勘(下吳服町)板屋、藤屋(大濱町四丁目)萬利(行町)樹屋(下西町)木村旅館、丸清館(以上萬行寺前町)瀬戸伍(下洲崎町)米屋(下名島町)櫻田館(上濱口町)出泉屋、筑紫屋支店(堅粕村)松隈旅館、松榮館、煙草屋、岡松屋、鹿鳴屋、旭館、石城館、丸晴館、筑後館、吉田屋(以上千代村)勝利館(大名町)花田屋、玄海屋(以上中市小路)
- 三部旅館 池田屋、平田屋(以上大濱町)小松屋、旭館(以上上小山町)魚市(魚町)油屋、綿屋、扇屋(妙樂寺町)杉の屋(藥院町)七輪屋(下店屋町)車力屋、綱千屋(以上中興堂町)豐後屋、

藤本屋、大和屋（上東町）龜屋（下鱒町）川野屋、八百佐、角屋（以上馬場新町）釘甚、山路屋、城島屋（以上下對馬小路）吉田屋（海岸通三丁目）鱒屋（上濱口町）高瀬屋（西町）鱒屋（瓦町）田代屋（濱小路）米屋、丸屋（上新川端町）正木屋（上祇園町）榮屋（下祇園町）坂田屋（妙樂寺新町）森田屋（御供所町）藥舖屋、日田屋（金屋小路）三奈木屋（下吳服町）丸一屋（上辻堂町）鍛冶藤（奈良屋町）日吉屋（下四町）山家屋（荒月町）肥後屋、（古門戸）龜屋（鱒町）柳田屋（社家町）福岡屋（萬行寺前町）田代屋（濱小路）笠松屋（海岸通）錦屋（堅粕村）松屋、槌屋、田代屋（以上千代村）

人力車

市内の人力車数は一千二百十四輛にして、賃金は五町以内は五錢とし、以上二町を加ふる毎に一錢を増す規程なり。尙ほ二人挽は定額の二倍、一日雇は一圓以内半日雇は六十錢以内、客待は一時間に付六錢とし、夜間又は雨雪泥濘の時は二割増、強風雨及雨雪の夜間並に乗客の指示に依り特に急激を要したる時は三割増とせり。然して右人力車賃金取締上福岡警察署にては常に市内營業の車夫をして詳細なる賃金表を携帯せしむるにより土地不案内の乗客は就て規定の賃金を知るべし、又た博多停車場に於ては兼て人力車乗車券を發賣し不當賃金の請求を取締れり。

通信

郵便局所——郵便——電信——電話

人事の發達、商工業の進歩と共に郵便、電信、電話等の通信機關の利用頻繁を加ふるに至るは自然の理數なるべく、本市の通信事務は年一年に激増し、其郵便物集配數の如き縣下に於て第一位にあり、通信機關の繁閑はやがて地方の繁榮發達の度を測る尺度なりとすれば、此一事以て本市の發達を證すべきなり。

郵便局所

福岡郵便局は福岡橋口町にあり、現今二等郵便局なるも通信事務の繁劇なる點

に於ては將に一等局を凌駕せんとし、且つ其所在九州の中央にありて主要の位置を占むるにより早晚一等局たるに至るべしと云ふ。又市内に左の三等郵便局を設置せるを以て通信上の利便甚だ多し。

- | | | | |
|------|--------|------|--------|
| 新川端局 | 下新川端町 | 祇園町局 | 下祇園町 |
| 中石堂局 | 中石堂町 | 濱小路局 | 濱小路町 |
| 大濱局 | 大濱町二丁目 | 水茶屋局 | 筑紫郡堅粕村 |
| 東公園局 | 筑紫郡千代村 | 紺屋町局 | 紺屋町 |
| 唐人町局 | 東唐人町 | 港町局 | 南港町 |
| 大工町局 | 大工町 | 名島町局 | 上名島町 |
| 春吉局 | 筑紫郡住吉村 | | |

右の外郵便切手賣捌所百十五箇所、郵便函數百三十二あり。

郵便

四十一年中福岡局郵便物取扱數は通常郵便引受九百五十萬三千二百九十五、配達六百三十五萬八千七百七十四、小包郵便引受三萬四千五百三十九、配達十萬四千八百四十七に達し、之を五箇年前に比すれば殆んど二倍以上の増加なり。

電信

同上電報取扱數は發信十三萬五千七百五十五通、着信十八萬五千八百六十八通、中繼信七十四萬二千三百三十五通、合計百六萬三千九百五十八通にして郵便物の如く激増を見ざるも年々増加しつつあり。

電話

電話交換局は東中洲町にあり加入者數八百九名機數九百八十二にして通話頗る頻繁を極め數十の交換手は晝夜手を休むるに遑なすと云ふ、電話線は架空裸線延長二百五十九里十九町四十八間、架空ケーブル線延長三里三十町二十八間、同心線二百六十六里十町五十七間に達し居れるが、更に改良して地下線とせる

所あり。尙ほ博多停車場及吉塚停車場並に大濱町の三箇所に自動電話を設置し、
又た電話所は東中洲電話交換局、橋口町福岡郵便局、大工町郵便局、東公園郵
便局、唐人町郵便局内にあり。市内通話度数は不明なるも市外は一箇年二萬四
千六百二十通話に達し、年々増加の有様なり。

官公署及組合團體

官公署——同業組合——産業組合——水産組合——其他

官公署

本市は福岡縣の首都なるを以て諸官公署此地に設置さる重なる官公署其他左
の如し。

名稱	所在地	名稱	所在地
福岡市役所	天神町	福岡縣廳	天神町

福岡地方裁判所	大名町	福岡區裁判所	大名町
福岡警察署	天神町	福岡監獄	須崎裏町
福岡鐵山監督署	土手町	福岡稅務所	上小山町
歩兵第三十五旅團司令部	大名町	歩兵第二十四聯隊司令部	大名町
福岡聯隊區司令部	須崎裏町	福岡憲兵分隊本部	大名町
博多稅關支署	下對馬小路	專賣局出張所	上小山町
福岡煙草製造所	東中洲町	福岡測候所	住吉村
福岡縣農事試驗所	住吉村	福岡小林區署	因幡町
福岡郵便局	橋口町	福岡電話交換局	東中洲町
博多停車場	馬場新町	博多商業會議所	東中洲町
福岡縣物産陳列所	須崎裏町	赤十字社福岡支部	須崎裏町
武徳會福岡支部	大名町		

同業組合

本市の同業組合は重要物産同業組合九、準則組合二十一にして逐年隆盛に赴き
斯業の弊害を矯正し利益を増進する上に於て成績の見るべきもの少しとせず、

其組合名及事務所々在地左の如し。

重要物産同業組合

組合名	事務所々在地	組合名	事務所々在地
博多織物同業組合	大乗寺前町	福岡縣醬油醸造組合	大乗寺前町
筑前木蠟同業組合	堅粕村比恵	福岡縣肥料同業組合	東中洲町
福岡地方白米同業組合	萬町	福岡市吳服同業組合	東中洲町
筑前輸出米同業組合	石城町	福岡縣度量衡同業組合	楠田前町
福岡縣輸出米同業組合聯合會	石城町		
準則組合			
組合名	事務所々在地	組合名	事務所々在地
素燒物業組合	社家町	福岡市文具商工組合	麴屋町
博多人形組合	土居町	福岡市色染業組合	上新川端町
博多絞同業組合	中石堂町	福岡市菓子製造業組合	橋口町
福岡市洋服商工組合	橋口町	福岡市金物商同業組合	古小路町
福岡市服物商組合	下吳服町	車輪鍛冶業組合	箱屋町

福岡市旅宿業組合	上新川端町	福岡市荷車製造組合	西方寺前町
福岡縣藥劑業組合	下新川端町	福岡市鐵工業組合	行町
福岡市團扇製造業組合	川口町	福岡市酒類營業組合	東湊町
福岡市砂糖商同業組合	吳服町	福岡市印刷製業組合	下名島町
福岡市表具師組合	東中洲町	福岡市硝子業組合	古門戸町
福岡市洋物商組合	行町		

尙ほ注意組合に至りては頗る多數に上り居れるが其重なるものを示せば左の如し。

組合名	事務所々在地	組合名	事務所々在地
福岡市製靴業組合	上名島町	乾物商同業組合	中對馬小路
福岡材木商組合	瓦町	福岡市及接近市外製傘同業組合	簀子町
福岡市提灯商組合	廿家町	綿織物同業組合	下店屋町
福岡德盛會(賣藥組合)	下土居町	小間物卸商愛榮組	行町
福岡市足袋同業組合	官内町	福岡家具商組合	上四町
福岡市西洋家具業組合	下名島町	福岡市縫詰製造業組合	奈良屋町

福岡市竹細工業組合	橋口町	博多鉄製造組合	萬行寺前町
農具改良組合	北舟町	珪管製造業組合	停車場新道
福岡市漆器商工組合	東中洲町	特許業組合	橋口町
福岡市桶製造業組合	萬町	福岡市綿商組合	下新川端町
福岡市自轉車商組合	中島町	福岡市紙商組合	中島町
福岡市粉商組合	中魚町	福岡市生糸商組合	上四町
福岡市書籍商組合	中島町	福岡市米穀問屋業組合	下洲崎町
福岡市材木問屋業組合	海岸通四丁目	福岡市回漕業組合	下洲崎町
福岡市魚仲買商組合	古溪町	福岡市細工人形製造業組合	中濱口町
福岡博理髮業組合	船町	福岡市豆腐製造業組合	中對島小路

産業組合

産業組合としては福岡度量衡原料購買組合(櫛田前町) 福博購買組合(紺屋町) 福岡焼酎販賣組合(東唐人町)あり。

水産組合

筑豊水産組合(下對馬小路) 伊崎浦漁業組合(伊崎浦) 福岡漁業組合(須崎土手町)の三とす。

其他

福岡酒造組合(東中洲町) 福岡市蠶糸業組合(地行東町) 福岡市茶業組合(養子町)等あり。又た前項組合中製造業に屬するもの三十三組合は一昨年四月合同して福岡市工藝團隊聯合を組織し本市工藝の振起發達に勉めつゝあるが成績大に見るべきものあり。尙は販賣業に屬する二十五組合も四十二年五月一致聯合し、福岡市商業組合聯合會を組織して斯業の發展に勉めつゝあり。

遊 覽

- 順路——四時の樂——承天寺——聖福寺——東公園——釜掛松——宮崎
- 八幡宮——潮湯及水族館——崇福寺——濡衣塚——東長寺——萬行寺——
- 櫛田神社——網敷天満宮——水鏡天満宮——宗湛茶室——磐固神社——

福岡城——西公園——鶴來島——光雲神社——益軒翁の墓——鳥飼八幡宮——住吉神社——愛宕神社——御膳立——菊池寂阿の墓——平尾山莊——太宰府神社——名島——香椎——西戸崎

福陵の地何ぞ遊子の心を牽くこと多き、博多は開津千七百餘年の歴史を蔵し、福岡は三百年の幕政を語り、東は日本三松原の一なる千代の松原の白砂青松相連ること十里、長汀曲浦の眺めは言はずもがな、南は近く太宰府を控へて豊富なる史跡を存し、西は生松原遠く走り丘陵起伏して海に入る所、狂瀾怒濤雨に風に咆哮して奇巖怪石を彫り、海濱の眺望山野の遊樂、一として得られざるなし。

福博名所で見せたいものは、福岡大學潮湯晴心館、敵國降伏宮崎八幡元寇記念碑日蓮銅像、荒津山から沖を眺むりや玄界、志賀や殘島、開けたねく、博多灣鐵道西戸の大築港、外にないぞへ千代の松原よんがいな（おらが國

サの替歌)

順路

本市及附近の神社佛閣に歴拜し名所舊蹟を探らんと欲せば左の順路に由るを便とす。

博多停車場——承天寺——聖福寺——東公園——醫科大學(釜掛松)——箱崎八幡宮——潮湯及水族館——崇福寺——濡衣塚——東長寺——萬行寺——楡田神社——博多港——市役所
市役所——水鏡天神——宗湛茶室——警固神社——福岡城——西公園——光雲神社——金龍寺(益軒の墓)——鳥飼八幡宮——愛宕神社——御膳立——住吉神社——博多停車場

四時の樂

春を魁くる梅が香より豊年のこるこの雪景色に至るまで、或は花を尋ね或は氣

を養ふ遊び多かる中に其重なるものを左に摘記す

梅(西公園)桃(西公園)櫻(西公園)躑躅(下警固中尾別邸)藤(荒戸町小田部、櫛田神社、東公園)牡丹(倉所町中西)菖蒲(中庄岡本)萩(聖福寺内虚白院)紅葉(下警固磯野別邸)菊(東公園内百花園、大名町松本別邸、濱町原別邸)松露(向濱)松茸(粕屋郡香椎、同須恵、筑紫郡大野村)汐干(箱崎、荒津潟、鶴來島)海水浴(伊崎浦、箱崎、西戸崎、津屋崎)

承天寺

辻堂町にあり、駿河の人辨圓(聖一國師)台教を學び禪乘に入り、入宋七年、仁治二年歸朝して崇福寺に入り、翌三年承天寺を建立す。後辨圓京都に請せられ後深草及龜山兩帝菩薩戒を受けさせ給ひ、鎌倉の執權北條時頼亦之に歸依して世の尊崇淺からず、當時承天寺は西海の巨刹として山門の隆盛並びなかりしといふ。今巨勢金岡、兆殿司、古法眼の佛畫、無準の達摩等を藏す。

聖福寺

金屋小路にあり、備前の人僧榮西入宋して天台に學び契悟する所あり、再航して歸るや、建久三年香椎宮の側に報恩寺を起し初めて菩薩大戒の布薩を行ひ、六年鎌倉幕府の允許を得て聖福寺を開けり。後鳥羽天皇即ち「扶桑最初禪窟」の親翰を賜ひ其額今に存す。此寺往昔は頗る宏壯なる寺院なりしも、中古數回兵燹に罹り傳來の什物多く焼失せり。寺内に仙屋の居りし虚白院あり、庭前の萩見るべし。

東公園

東公園は千代松原にあり明治十年之を開く。眺望の壯美なく、遊樂の機關整はざるあるも、白砂青松遠く連り風清く氣澄み眞に閑靜なる別天地にして散策の好適地なり。園内に元寇紀念碑、龜山天皇の御銅像、日蓮上人銅像、元寇紀念館あり、園内崇高の氣溢る。九鐵吉塚驛より二町

釜掛松

天正十五年豊臣秀吉島津征討の際博多に留まりし時、千利休が雲龍の小釜を松が枝に懸け、松葉を焚き茗葉を煮て秀吉を請せしといふ釜掛の松は醫科大學内にあり。

宮崎八幡宮

官幣中社宮崎宮は箱崎町にあり、天平勝寶三年の創健にして玉依姫、神功皇后、八幡大神を奉祀す、今の社殿は天文年中大内義隆の建立に係り、樓門は文祿年中小早川隆景の建立する所にして一本の釘を用ゐず。醍醐天皇延喜二十一年、敵國降伏の四字を親書して宮に納め給ふ、都て三十七枚、紺紙金字、紙幅各々方六寸餘、千古の下なほ光輝あり。此地千代松原中にあり、境内の風光海濱の眺望共に絶佳、今又神苑會の設けあり。

潮湯及水族館

宮崎海濱に潮湯抱洋閣あり眺望佳にして遊宴に適す之に相對して水族館あり歐米最新式のバナラマ式に則りて設備し、放養池には大小各種の魚族潑潑として美觀を極む。

崇福寺

仁治元年筑前の人湛慧崇福寺を太宰府の横岳に建て辨圓を請じて主とす、依て横岳山と稱す。寛元元年承天寺と共に官寺に列せられ、天正十四年七月岩屋落城と共に寺亦兵燹に罹り、傳來の名器灰燼に歸し寺觀久しく廢る。黒田氏入國と共に松原に移轉し藩侯の菩提所とせられ、塋域に孝高長政の塋及び藩主歴代の碑あり。人參畑の媪さんとして有名なる女丈夫高場蘭、刺客來島恒喜の墓亦寺内に在り。

濡衣塚

石堂橋の畔にあり。傳説に言ふ、聖武天皇の御代佐野近世筑前守にて下り後

妻を迎へしが此後妻は先妻の出なる女を憎み、亡き者にせんと海人を語らひ、京の姫君が衣を盗みたる旨訴へさせたるにぞ、近世之を聞いて大に怒り女の室に入りたるに、海人の言葉に違はず海人の衣を引き被りて臥せ居たり。是れ女の熟睡を見計ひ繼母の爲したる仕業なりしが斯かる企のありとも知らず我子乍ら淺間しの振舞やと即座に女を殺しぬ、翌年の忌日女は父の夢に見えて

ぬぎ着する其たばかりの濡衣は長きなき名のためなりけり

濡衣の袖より傳ふ涙こそなき名を流すためしなりけり

二首の歌を詠じさめくと泣きしにぞ、父は初めて冤罪なりし事を悟り、供養の爲め博多の地に七堂を建立し其身は出家し肥前松浦山に籠り松浦上人と呼ぶ。されば無き名を負ふことを濡衣着ると言ふとぞ。七堂とは普賢堂、辻堂、奥堂、萱堂、脇堂、玩堂及び石堂にて今脇堂、玩堂は跡もなし。

東長寺

上小山町にあり、大同元年弘法大師唐より歸朝の時博多津に帶錫し二寺を開き、密教東漸長く將來に傳はらんことを欲して東長寺と稱すといふ。國主忠之の墳塋寺内にあり、藩政時一代宗の觸頭として山門頗る榮えたりき。寺内の大師堂には弘法大師自作の大師木像を安置し、陰曆三月の例祭には博多獨樂の露店軒を並べ參詣人甚だ多し。

萬行寺

祇園町にあり西派本願寺に屬す。山城宇治の人七里集人本願寺蓮如上人に歸依し、剃髮して性空といふ、天文十年普賢堂町に寺を開き、二世理慶に至り馬場新町に移り、寛文中今の處に移れり。黒田氏入國の時領内一派の觸頭たらしむ。寺内に龍華孤兒院あり憐むべき幾多の孤兒を收容せり。

櫛田神社

櫛田神社は社家町にあり。大若子命、天照太神、素盞男命を合祀す、元弘三年

菊地寂阿探題北條英時を博多に攻むるや、社前に抵りて馬進まず、寂阿大に怒り神前の扇を二矢まで射たるに馬進みけりと。境内に大銀杏樹あり又唐船の纜を繋ぎしといふ船繋石あり。毎年舊曆六月祇園祭を執行し山笠の催あり近郷近在よりの參詣者多く雑踏を極む。本社は博多の産土神として市人の尊崇頗る深く、彼の胡瓜の切口の同神社紋章に酷似するを以て神明に對して畏多ことなし、舊六月に入れば敢て口にするなし。

網敷神社

下土居町にあり、菅公左遷の際袖の港に上陸せられし時敷物なかりし故、海人船網を輪の如く束ねて參らせたり。後ち其地に社祠を建て網敷天神又は網敷神社と崇め祭る。今町名を網場といふは網輪を詠りたるものなりといふ。

水鏡天満宮

天神町にあり、菅公左遷のとき袖の港に上陸し四十川に臨み、流水に姿を映して

心中の惱みに容姿の衰へたるを嘆せられたりと傳へ、後人其地に社祠を建立して菅公を祠り、依て水鏡天満宮又は姿見天神といふ。四十川の地詳かならず後世今の地に移し祀りたるものなりといふ。

宗湛茶室

豊太閣再度征韓の際天正二十年名護屋よりの歸途博多に驛まるや、時の豪商神屋宗湛豊太閣以下諸豪を奈良尾町の私宅に請じて盛宴を張り、宴終つて更に茶席を開きたりき。此由緒深き建物は今は天神町平岡氏別邸内に移され、閑日月ある英雄の面目を想起せしむ。

警固神社

小鳥馬場にあり、神直日神、大直日神、八十柱津日神を祀る。初め福崎にありしも福岡築城の際今の所に遷せしなり。神功皇后征韓の時軍衆を警固し勝利を祈り給ひしより警固神社と稱すといひ、或は古來警固所の在りし地に祭りしを

以て此名ありといふ福岡部の産土神にして二十五年毎に遷宮を行ひ、今の神殿は明治四十二年九月遷宮に際し改築したるものなり。

福岡城

慶長五年黒田長政筑前五十二萬石を領して入國し翌六年福崎の地を相して築城し、工役七年にして成る、舞鶴城と稱す。南は山を負ひ北は海に臨み四方繞らすに濠を以てし、周回一里餘要害の地を占む。而も時勢の變遷は古湓空しく白蓮の香りに名を留め花見、月見の兩櫓に春秋の眺なく、今僅に本丸を存す、廢藩置縣の後城内に縣廳を置き、今は歩兵第二十四聯隊及び歩兵第三十五旅團司令部ありて九州男子の精銳を養ひ以て國家の重きを爲す。

西公園

西公園は荒津山にあり、明治十四年に開園せり。古來荒津の名は博多より荒津山に至る一帶の總稱なりしが今は此一角に其名を存す。

神さぶる荒津の崎によする波まなくや妹に戀わたりなむ

萬葉集

男波女波山脚を洗ひて磯には貝を拾ふべし是れ荒津瀉なり。眸を放てば博多灣内外の風景一幅の畫帖を開きたる如く、後は福岡市街を瞰下して遠く肥筑の遠巒秀峰を望む、眺望の廣濶なるは言はずもがな、園内櫻樹を植うる百數十株、陽春四月紅雲凝りて山を埋むるの時市民の歡樂場たり。山上に光雲神社あり、結構壯麗を極む、又東宮御手植の松櫻、日清日露兩戰役紀念碑あり。

鵜來島

鵜來島は荒津の海上僅かに八町周回五町に満たざる一小島にして老松數幹潮風に撓む。島内魚介に富むを以て干潮に乗じて來り遊ぶもの多し。

光雲神社

光雲神社は荒津山西公園内にあり。舊藩祖孝高長政を祀り、其法謚龍光院興雲院の各一字を採り光雲神社と稱し又御兩公様と稱す。元と福岡城本丸内に祠を

建て祭祀し來れるを明治四年鐵砲町に遷し、四十二年四月荒津山上の新殿に遷す。社殿の造營結構壯麗を極め美觀言はん方なし。寶物には朝鮮陣の際長政の用ゐし水牛の兜其他兩公以下歷代國主の武具を藏す。

益軒翁の墓

碩儒貝原益軒翁の墓は西町金龍寺にあり、一片の碑文は其高弟竹田春庵の撰なり、同寺は元怡土郡高祖城主原田氏の菩提所として同地に在りしが、黒田氏入國の後荒津山に移し、後同地に東照宮建立されしため今の地に移れり。

烏飼八幡宮

西町にあり、八幡大神、玉依姫、聖母大神を祀る。神功皇后征韓凱陣の途中此處に宿らせ給ひ、胎兒の生先を祝し給ひしより後世祠を建て若八幡宮と號す。藩主の尊崇厚く明治維新前社殿壯麗を極めたるも今大に頽廢せり。

住吉神社

住吉村にあり、底筒男命、中筒男命、表筒男命の三神を祀り、相殿に天照大神、聖母大神を祭れり。我國住吉神社の本宮として昔は神殿壯觀を極め人目を驚かせしといふ。古松老杉蒼鬱として神威森嚴なり。

愛宕神社

早良郡姪濱村の海岸に峙つ愛宕山上にあり。寛永十年國主忠之山城の愛宕神社を勧誘せしもの、眺望絶佳、室見川山麓を流れ白魚築に名あり、毎年舊正月六月の大祭には參詣人織るが如く又農夫は馬匹を賣らん爲め馬具を飾りて參詣せしめ、歸途西新町に於て馬市を開くを例とせり。此地元と鷲尾山と稱し、伏見天皇の永仁元年三月始めて九州探題府の設置さるゝや、探題北條兼時之に築きて居り、以て鎮西の諸豪族を節度し、爾後探題府の本城として元弘に及べり。

御膳立

早良郡生松原の一角小門にあり、平板なる岩礁の面に配膳したるが如く無數の

膳椀形の痕跡を印す、故に此名あり。或は神功皇后征韓の遺跡なりと傳ふ。此邊白砂青松遠く連り前は近く殘島を控へ風光明媚なり。是より西すること二十町長垂の奇勝あり。

菊池寂阿の墓

早良町七隈村にあり。是れ元弘三年三月勤王の士菊池寂阿入道武時義兵を擧げ探題北條英時を其居城鳥飼城(早良郡鳥飼村)に攻めて克たず華々しく玉碎せし所なり。又六本松(馬場頭)に首塚あり。

平尾山莊

幕末の女丈夫野村望東が老後隱棲の地にして市外平尾にあり。時に勤王の士相往來して皇威の恢宏を圖り、望東亦空しく老を養ふ能はず、楓樹を繞らしたる此山莊は、筑前の志士は勿論薩州の西郷吉之助を迎へ、長州の高杉晋作を宿し以て明治維新の大業に多大の貢献をなしたりき。今向陵會の設けあり遺跡保存に力を致しつゝあり。

大宰府神社

官幣中社大宰府神社は二日市驛より東北二十五町、菅公を祀る。神苑廣濶にして梅を植うるに數千株、清泉流れて玉盤を洗ひ眞に仙境なり。附近に都府樓の跡、觀世音寺、苅萱關の跡、水城、榎寺、天拜山、武藏温泉等名所舊跡枚擧するに遑あらず。

名 島

粕屋郡多々羅村にあり。神功皇后征韓振旅の地にして帆柱石あり、皇后の海濱に捨て給ひし帆柱の化石したるものなりと傳ふ。木理あつて鐵輪を廻したる跡さへ著るしく、遠近より杖を曳くもの多し此邊風光の明媚言はん方なく近く妙見島の勝あり。又魚介に富み沙干の好適地なり

香椎宮

官幣大社香椎宮は香椎驛より南十町、神功皇后を奉祀し、又た古宮は仲哀天皇を祭る。境内に綾杉あり、神功皇后三韓凱旋の時兵器を此處に埋藏し、後世我邦の守護神たるべしとて杉の枝を挿し給ひしに其杉生長したるなりと、其葉綾を織るが如し由て此名あり。

千早振香椎の宮の綾杉は神のみそぎに立てるなりけり

新勅選集

西戸崎

粕屋郡奈多濱より志賀村に至る三里、白砂青松蜿々として亘り、波濤荒ぶる立界洋上に一大長橋を現出す、是れ海の中道にして天橋立の規模の一層大なるものなり。西戸崎は志賀島に近き長橋の一部にして眺望の雄大なる多く其比を見ず。此地松露を産すること多く又海水浴場として名あり。博多港とは毎日汽船の便あり僅かに四十分内外にて達するを得べし。

娯樂

博多仁和加——筑前琵琶——生花——茶道と盆栽——劇場と寄席——潮湯——料理店——藝妓——遊廓

本市が遊覽の勝に富める事は前述の如し。更に亦た娯樂の機關大に備はり、激務繁用の餘暇遊樂を恣にするを得べく、又以て旅客の情を慰むるに足る。

博多仁和加

博多仁和加の特色は滑稽と諷刺とにあり。演者は藝人にあらず總て堂々たる町家の主人にして只閑時の樂を恣まゝにするのみ、故に威武に屈せず權勢に阿らずてふ一見識を具へて以て誇とす。ボテ鬘を被り半面を着け純然たる博多方言を用ひ常に新題目を捉へ之を脚色す。諧謔百出の裏諷世嘲時の意を寓し政治の得失風俗の醇醜を知らしむるの妙に至つては未だ其類を見ず。而して近年の趣

向は突飛的架空的構想に走り往年滑稽の意氣は漸く轉化して今や新生面を開拓せんとしつつあり。

筑前琵琶

太宰權帥原經信及び其の子基綱琵琶を善くし常に之を擁して客情を慰めたりき。斯くて風流人士の之に志すあり、庵門神社神職の息某四王寺（四王寺山にあり）に入りて盲人を集め琵琶を教へたるが、當時は主に『般若心經』、『地鎮經』に合せて之を弾じたりき。爾來盲僧の數増加し時勢の推移と共に變遷を重ね、四季土用の土祭に荒神拂と稱して各檀家に抵りて『神おろし』『地鎮經』を唱へ、此の風習今尙ほ存す。後世に至り『端歌』と稱する歌詞を誦し遂に『クツレ』を語り、高尚なる歌曲は卑俗に陥り、殆んど祭文と異なる所なかりしが、會々明治二十六年の初春九州日報記者今村外園其作歌那須與市、谷村計介（古今雜歌集）等作曲せしめたるが、氣品高くして興趣の饒なるクツレ琵琶の及ぶべくもあらず。茲に於て外園等同好者は大に喜び百方研究を重ね、遂に之を大成して新機軸を出すに至れり是れ今の筑前琵琶とす。

生花

日清戰役前後は樂古齋派の生花大に貴ばれたるも今漸く衰へ、續て東山流之に代り、現今は池坊派最も勢力を有せり。

茶道と盆栽

茗を養るの樂みは今や頽れたれども、猶ほ千家裏表を宗として釜の鳴る音に心を養ふ人少なからず、彼の有名なる宗湛茶室を始めとして茶室を有する雅客多し。盆栽趣味は漸く市人間に解せられ、今や博多一品會、福岡盆友會組織され時々陳列會を催し同好者の縦覽に供し居れり。

劇場と寄席

市人の劇趣味の發達せる、所謂見巧者にして、地廻り俳優の如きに至つては客

足甚乏しきも、京阪第一流の俳優を呼び下すや、毎日満員札止の好況を呈す。従て舞臺の設備に力を致し、殊に當地出身なる新派劇の首領川上音次郎が其興行毎に舞臺の改良に意を注ぎ、今や壽座、明治座共に其設備に於ては敢て他に劣らざる迄に完備し、俳優社界は本市を九州第一の興行地とせり。寄席には川丈座、舞鶴座あり設備の整へる、恰も小劇場の觀あり。而して桃中軒雲右衛門が當地に居を下してより浪花節は諸興行を風靡し、市人の好尚歪變して今や浪花節全盛の時代なり。

潮 湯

晴心館は博多築港にあり。三層樓の潮湯にして浴室貸間其他設備整はざるなく加ふるに眺望絶佳にして浴客頗る多し。抱洋閣は箱崎の海岸にあり、石造の建築物にして汐、清水、蒸風呂其他各種の浴室を具へ、娛樂の設備等凡て洋風に倣へり、殊に千代の松原の海濱とて散策に好適の地なれば一日を此處に楽しむもの日に多きを加ふ。

料理店

我筑前には食倒れなる俚諺あり、蓋し筑前人士殊に福岡人士が飲食品の撰擇に意を用ひ、食膳の珍珠佳肴に十金を惜まず、遂に身を亡し家を倒すに至るものあるによる。然れば料理法の如き夙に發達し、加ふるに玄界洋の魚介は肉締りて其風味比類を見ず、地は肥沃にして蔬菜の生育良好なるを以て、料理の聲價愈々揚れるなり。而して關西九州地方製鹽の産出夥しく、之に伴ふ通弊として鹹味強き料理を好む風ありしも、近年關東地方の嗜好に同化され味淋、砂糖を加味するに至れり。市内料理店は大に發達し、客室の按排設備に留意し、庖厨の法を練り、待遇に氣の利きたることは以て遊樂を恣まうにするに足る。又西洋料理も紳士紳商間に賞玩され漸次進歩發達しつつあり。重なる旗亭左の如し。

會席料理 一方亭(東公園)常盤館(水茶屋)掬水(倉所町)生洲、福村、菊廼家、

玉川(東中洲)愛勝館 吉原(西公園)

仕出し料理 徳永(天神町)矢の伊(藥院町)川利(川端町)

鰻料理 末廣(東中洲)徳安(吉塚)

西洋料理 共進亭(東中洲)

藝妓

水茶屋、相生町、中洲、柳町及新柳町の五券番あり四百餘名に達す、水券は藝を以て鳴り、相券は美を以て勝り、中券は其間に居り風俗言語は上方風を宗とす、近年各券番競うて藝を勵み更に生花茶道を嗜むものあり、風尙大に揚る。

遊廓

古來博多港が西海の要津として船舶の出入繁かりしより、遊女の制も早く設けられ、今の洲崎町の邊娼家軒を並べ、小女郎明月等の名妓を出して其名海内に高く、慶長年中石堂川尻即ち今の柳町の地に移し『博多柳町柳はないが女郎の姿が柳腰』と謠はれ、明治二十四年更に海濱を埋立て區域を擴張して新築と稱し、不夜城は一時其盛を稱せしが、風紀上明治四十三年十二月迄を限り之を市外住吉に移す事となれり。住吉遊廓は新柳町と稱し明治四十二年六月開業し今や各樓新築を急ぎ各般の設備を努めつゝあり。

事變

天慶の亂——刀伊入寇——文永の役——弘安の役——南北朝——戰國時

代——百姓一揆——十年の役

本市が西海政治の中樞となり外交の府として千七百餘年の歴史を有し、此間兵馬倥傯の衢となりし事績擧て數ふ可からず。茲には重なる事變を叙す。

天慶の亂

朱雀天皇の天慶三年伊豫掾藤原純友兵を擧げて遙かに平將門に應じ、讃岐に破

れ轉じて筑紫に入り太宰府を焼き、官物を奪ひ私財を掠め勢復振ふ。十二月追捕使小野好古之を博多に攻め純友を伊豫に走らす。博多が兵火に罹りしは之を始とす。

刀伊入寇

後一條天皇の寛仁三年刀伊入寇し、對馬壹岐を焚掠し約島早良二郡を犯し四月博多に迫る。太宰權帥藤原隆家(菊池氏の祖)前少監大藏種材等部將を督して之を拒ぎ虜遂に志を得ずして退く。

文永の役

龜山天皇の文永十一年四月元の都元帥忽敦蒙韓高麗の連合軍四萬人戰艦九百餘隻を率ゐて來寇し、對馬壹岐兩國、肥前沿海を侵略し慘虐暴行至らざるなく、進んで太宰府に迫る。一府愕然、少貳經資急を京都に告げ檄して兵を九州に徵す。諸豪博多に會し經資諸軍を節度して敵を待つ。十九日敵艦隊今津(糸島郡)

に到り其兵多く上陸し、艦隊は翌日博多灣に闖入せり。是に於てか陸戰は今津より佐原(西新町廉原)百道(中學修猷館附近)鳥飼赤阪に互り、海戰は博多宮崎に連る。而して彼は大軍の運用に習ひ節制以て之を率ゐ加ふるに銳利なる兵器大砲を以てす。我軍難戰惡闘殊死して戦へども死傷頗ぶる多くして海陸共に利あらず、敵は火を所在の民家に放ち兵燹延ひて宮崎宮に及ぶ。攻防終日塵戰數合、彼我共に疲れ日暮我軍は退きて水城に據り敵軍は引きて艦に入る。是夜風雨大に起り波濤洶湧して敵艦多く覆没し溺死するもの一萬三千五百餘人、餘は皆夜に乗じて遁れ、天明片影を認めず、我軍輕舸を發して追撃したれども及ばず、敵の一艦を志賀島に獲て百餘人を水城に斬る。

弘安の役

後宇多天皇の弘安四年元主忽必烈大軍を發して來寇せしむ。東路江南兩軍合せて十餘萬人、戰艦四千四百隻、以て進戰必勝を期す。是より先北條幕府は鎮西

の諸族に課して博多沿海の石壘を修造増築せしめ、瀕海一帯數里の間嚴然たる石城は成れり。高さ一丈餘。外は登立して攀擧し難く、内は平坦にして騎登すべく以て瞰射に便にす、工役一年餘にして成る（名島福岡の土工に際し毀ちて建築用材とし僅に伊崎浦に其跡を存す）加之博多津番役の制を定め益々邊警に供ふ。元軍來襲の報に接し幕府即ち大に鎮西の軍を發す。會する者四十餘氏二十五萬許、分ちて肥筑の沿海、壹岐對島二島を扼守せしむ。忻都洪茶丘の東路軍先づ二島を屠り六月五日博多に迫り、志賀能古兩島を奪ひて之に據り、我軍は石壘に嬰りて堅守す。而も將士の防守に甘んせざるもの交々輕舸を出して敵艦を襲ひ志賀島に戦ひて幾んど敵將を獲んとし、其他草野經長、大矢野兄弟、河野通有父子等或は挺身艦を焼き、或は將を虜にし敵軍爲めに戒心す。既にこて范文虎の江南軍艦隊海を蔽うて到り氣勢大に振ひ戦を挑む。連戦累日我軍克く戦ひ、敵遂に石壘を越えて進むこと能はず、乃ち退き移りて鷹島に據る。閏

七月一日夜、北風大に起り怒濤天に狂ひ、艦船概ね覆没して溺死算なく范文虎等纔に身を以て免かる。而して殘寇の艦を失ひて尙ほ鷹島に據るもの數千人、少貳景資等之を殲す、敵軍死するもの約十一萬人。此役や五月二十一日壹岐に開戦してより閏七月七日に至る、誠に國家存亡の大役にして、龜山上皇痛く宸襟を惱まし給ひ身を以て國難に代らんと伊勢大廟に祈らせ給ひぬ、東公園内御銅像は實に大難に於ける大捷を千載に傳ふる紀念なり。

南北朝——戰國時代

博多市街は元寇の創痕を受けて未だ全く癒えざるに、後醍醐天皇の元弘三年菊池寇阿官軍に應じて兵を擧げ、探題北條英時を博多に攻めて譙門外に戦ひ延元元年三月菊池武敏多々羅濱に破れ、足利尊氏の軍を博多に迎撃して克たず、降て足利幕府の治下筑前には少貳大友秋月原田宗像等の諸豪族割據格執して爭奪を事とし干戈熄まず。應永三年少貳滿貞千葉胤鎮兵を合して探題澁川義俊を博

多に攻めて民家を焚き、應仁文明の交豊後の大友氏、周防の大内氏博多に分治するや戦亂相踵ぎ、弘治永祿の間中國に毛利氏興るや大友氏と雄を争ひ、永祿十一年五月毛利氏の將吉川元春、小早川隆景兵五萬を率ゐて立花城(粕屋郡)を攻むるや、大友宗麟、戸次道雪等七萬の衆を以て博多に防戦し市街の大半は兵燹に罹れり。爾後小康を得て市街稍々復舊せしも、薩摩の島津氏興るに及び筑前復た兵亂の地となり、天正十一年十一月島津氏の將川上左京大友氏の成兵と矢倉門に戦ひ火を放ちて多く民家を焼毀し、十四年八月島津義弘九州を席捲して立花城を圍みしが豊臣秀吉の征西軍の先鋒既に小倉に達したるを聞き、急に退きて博多に會し市街を焚毀して去る。是に於てか九州の大都全く亡ぶ。

百姓一揆

明治六年六月嘉摩穂波兩郡(嘉穂郡)の小民蜂起す。士族の家祿を復し地券の發行を止め新曆の頒布を發するを以て口實とし、革新の爲政に嫌らざるもの一唱

百和之に應じ其衆十萬に及べり。遂に福岡に聚り縣廳に入り、到る處家を焚き財を毀つ四千六百餘戸、縣官以上死傷するもの多し。即ち縣下の士族を以て隊を編成一揆を鎮壓せしめ、亂首三人を斬り其餘懲役管杖罰金に處せられしもの六萬四千餘人。

十年の役

明治十年二月西郷隆盛兵を擧ぐるや、三月福岡の士武部小四郎、越智彦四郎等兵を起して之に應じ、福岡城を襲ひて利あらず、去りて肥前に向ひ更に轉じて秋月に據る。官軍來り迫るに及びて四散し、各所に潜伏して再擧を圖りたるも成らず、遂に捕へられて斬らる。

人物

如水——長政——二十五騎——栗山大膳——島井宗室——神屋宗湛——

大賀宗伯——伊藤小左衛門——宮崎安貞——貝原益軒——宮川忍齋——
 稻富又百——龜井南冥——青柳種信——龜井昭陽——仙崖——月形深藏——
 ——平野次郎——中村圓太——加藤司書——建部武彦——月形洗藏——
 野村望東

黒田氏は天下の雄藩、治下二百七十餘年の間に幾多の良材を出し、或は武を以て勝り、或は志を以て見はれ、或は學を以て推され、或は富を以て鳴る、皆以て千載に傳ふべし。今重なる人物を列擧して其事績を回想す。

黒田孝高

孝高は天文十五年十一月姫路に生れ、父職隆と共に小寺政職の麾下に在り人となり機略あり事體に通ず。夙に織田信長の覇業を成すべきを察し政職を勸めて之に屬せしむ。信長羽柴秀吉をして中國を征せしむるに及び之に従ひて各地に轉戦し屢々奇功を建つ。荒木村重の攝津伊丹城に據りて叛するや孝高單身入城して降を勸め、村重の爲めに幽囚さるゝ事一年足爲めに腐る。本能寺の變に際し、秀吉を勸めて毛利氏と和し旋軍光秀を伐つて遂に覇業を定む。秀吉益々之を器重し其四國九州を征する毎に孝高を以て監軍とし帷幕に籌を回らさしむ。天正十五年七月豊前六郡十八萬石を賜ひ中津に居り、十七年封を長政に譲り難髮して如水と號す。然れども秀吉其の讓封を許して隱退を聽さず、征韓の役前後共に參謀として出陣し諸將を節度す。太閤薨去後退きて封國の中津に隱れりしが、關原の役起るの報に接し急に兵を發して九州の諸將を徇へ、將に薩摩に逼らんとし、關原の勝敗決したるの報を得て即ち熄む、蓋し大に爲す所あらんと欲せしも大勢既に定まるを以てなり、是より意を當世に斷てり。太閤嘗て評して曰く、剛毅にして敏捷、人を知りて善く任ず、宏度深遠天下匹なし、我歿後或は天下を掌握せんと、慶長九年三月卒す、年五十九、崇福寺に葬り法諡して龍光院といふ。

長政は孝高の長子にして永祿十一年十二月姫路に生る。十五歳初めて従軍し敵の首級を擧ぐ。是より毎に孝高に従ひ攻城野戰夙に驍名を得たり。孝高老するに及び封を襲ぎて甲斐守と稱す。文祿元年征韓の役起るや兵五千を率ゐて大陸に渡り、各地に轉戦し功あり、慶長二年再征の軍に従ひ、屢々明韓軍を破りて名聲益々著はる。五年石田三成事を擧ぐるに及び長政主として諸將の嚮背を定め、自から先鋒として關原に西軍を破る家康以て首功とす。此歳五十筑前五十二萬石に封せられ國を治むること二十四年、元和九年八月京都の客次に卒す、年五十六、崇福寺に歸葬して法諡し興雲院といふ。

二十五騎

孝高長政の部下多士濟々たり。宗族には兵庫助利高。修理亮利則、圖書助直之あり、後藤基次、栗山備後、久野四兵衛、井上周防、毛利俱馬、黒田美作、野村太郎兵衛、吉田壹岐、桐山丹後、小河傳右衛門、菅和泉、三宅若狹、野口佐助、益田與助、竹森石見、林掃部、原伊豫、堀平右衛門、衣笠因幡、毛屋武藏、村田出羽等皆一騎當千の武夫、長政を加へて世之を黒田の二十五騎と稱す。就中基次最も顯る、基次は又兵衛と稱し驍勇絶倫長政に従ひて各地に戦ひ毎に殊功あり、一萬六千石を食み大隈の城主たり、後家を提げて國を去り、大阪の役入城して武名益々高く、夏の役道明寺に戦死せり、年四十六。

栗山大膳

大膳名は利章、父備後の後を襲ぎて三萬石を食み宰臣の首たり。人となり豪邁果決、武事に暗練し經史に該通す。長政深く之を倚信し後事を托す、長政の嗣忠之放縱不羈、幕府の忌諱に觸るゝあり。此時に當りて幕府の霸業大に定まり、頻に大諸侯芟鋤の政略を用ゐ、太閤の勳舊多く免かれず、福島加藤國除かれ黒田家の禍遂に測る可からず大膳憂悶遂に脱藩して江戸に抵り、忠之を幕府に訴

へ後自から誣告の罪に服して黒田家の宗社を全ふせり、時人嘆賞せざるなし。罪を以て南部に配せられ、俸百五十口を賜ひ又近傍三里の縦遊を許し例外の恩典を與ふ、大膳謹慎遂に其地に歿す。彼の劇『宮崎文庫』は材を之に採り脚色したるものなり。

島井宗室

宗室名は勝茂、徳夫太と稱す、盛んに朝鮮、支那、暹羅、呂宋等に通商し富巨萬を累ね。本能寺の變、偶々宗室と共に信長に苦讎し、信長の薨去を見て寶物を抱いて遁る征韓の役に先つこと二年、太閤の命を受け名を貿易に托し韓國に入り探檢六箇月、普く險要扼塞を偵ひ之を復命せり。又名護屋建營、名島の築城、福岡城の土木等宗室と共に資を献じて工を助け、名諸侯の間に聞ゆ。元和元年八月歿す、年七十七。

神屋宗湛

宗湛は貴金精鍊術を支那より傳へたる壽貞の孫なり、名は貞清、善四郎と稱し、博多の巨商として宗室と名を等ふす。人と爲り豪懷洒落。茶儀を以て太閤の值遇を得、天正十五年博多の再興は宗湛哀願の力多きに居れりといふ。毎に心を經濟に留め、櫛の實を支那より輸入して肥筑の間に播種し製蠟の法を開き、又各地に鑛山を開き、或は博多大阪間に爲替の法を肇めて我國銀行の濫觴を爲し、其他博多素麵の製法を支那に取る等殖産興業に力を致せり。寛永十二年十月歿す年八十五。其秘藏せし茗器文琳は今黒田侯爵家に存し、太閤を招せし茶室は天神町平岡氏別邸内にあり。

大賀宗伯

宗伯は豪商宗九の嗣、機警にして識略あり大に産を興す。島原の亂に國主を扶けて功あり寛文五年五十六歳を以て歿す。宗室宗湛宗九等小早川、黒田兩家のため屢々資を献じて用を助く、兩家之を徳とし食邑を賜ふ、皆固辭して受けず曰

く一旦之を受けんか後世子孫必ず逸安の民と化せん是れ商家の事にあらずと、以て博多商人の如何に勤勉不撓にして獨立の氣象に富み識見の高邁なりしかを見るべし。

伊藤小左衛門

博多商人の現はれたるもの伊藤宗藤、末次宗得、同興善あり、興善は長崎開港と共に其地に移住し、盛んに海外通商に従事し遂に興善町を開けり。宗藤の子小左衛門は支店を長崎に置き最も富豪を以て聞ゆ、後海外交市の禁を犯し密かに貿易を行ひたること露現し、寛永七年十一月黨類三十餘名と共に刑せらる。

宮崎安貞

農業全書の著者宮崎安貞は廣島の人、慶安四年黒田家に仕へ二百石を食む。後致仕して海内を巡遊し大に種藝の法を究め、再び來りて志摩郡に隠れ、荒蕪を拓き樹木を培ひ以て村民を誘導し殖産興業を努めたり。『農業全書』は此餘暇に執

筆したるものにして實に四十餘年研究實驗の賜、天下皆餘澤を蒙らざるなし。元祿十年歿す年七十六。

貝原益軒

益軒名は篤信字は子誠、通稱は久兵衛、益軒は號なり又損軒と號す。福岡に生る。父は利貞藩の醫員なり。篤信幼にして穎悟、父に従ひて醫書を読み略薬方に通ず。明暦中京都に遊び松永尺五、山崎闇齋、木下順庵に師事すること三年學大に進む。初は陸王二子の説を奉せしも感悟する所あり程朱の學に歸せり。然も自から發明する所多く、晩年『大疑録』を著はす、以て其識見を見るべし。篤信人となり恭儉抑遜毫も人に傲らず、其江戸及京都に在るや、一時の名流皆心を傾けて之に下れり。平生好んで書を著はし、概ね平易なる國文を以て之を記したれば、讀む者其恵に浴す。總て百有餘種、就中『黒田家譜』は十七年間の心力を費して五十八歳の時之を撰し『筑前續風土記』は十五年間の研鑽を経て七十四

歳の時之を就したり。此他點訓、諸菜譜、大和本草、樂訓、養生訓、慎思錄、和漢名數、同増補、日本釋名、農業全書附録、大和廻等最も世に知らる。又好みて勝區を探り足跡殆んど海内に遍く、皆之を記す。其大和に遊ぶや畝傍山陵に詣で其類廢を悲しみ、備に舊趾を記し『大和廻』に收む、後百餘年蒲生君平山陵志を編するの時荒蕪甚だしく幾んど其跡を存せざるが故に記す所誤れり。明治維新朝廷畝傍山陵を修めらるゝに及び『大和廻』によりて之を定め給へり、皇祖の山陵をして萬古湮滅に歸せざりしもの實に益軒の功なり正徳四年八十五歳の高壽を以て歿す、西町金龍寺に葬る。夫人初女江崎氏東軒と號し、經史に通じ書畫に巧にして其著す所の『女大學』最も行はる。又一門文學に富み各々著書少なからず。近年益軒會の組織あり紀念圖書館の設置計畫されつゝあり。

宮川忍齋

忍齋名は尙古、若狹の人なり。江戸に出で兵法を學び其蘊奥を極む。嘗て眼疾

を患ひ良醫を求めて筑前に來り、遂に明を失ひ留まりて黒田家に仕ふ。博覽強記『黒田家譜』の編纂に關與し又『關原軍記大全』を著す、戰史として後世兵家の貴重する所なり其他兵學に關する著書少なからず、享保元年十一月歿す年六十

二。
稻富又百

又百名は希賢字は子善、福岡の人なり。天資強記、幼にして經書を讀み文選を暗す。長じて益軒の門に入り學業大に進む。一日父大休軒が雨森芳洲の一夜百韻の詩を讀み稱讚措かざるを側聞し、即夜五絶百韻を賦す、是より人呼んで又百と稱す。時に昇平日久しく士人逸安に狃る。又百之を潔しとせず、直言罵詈譁らず、爲めに士籍を削り儒員を罷めらる、仍て享保中去りて京都に隱る。後加賀侯の聘に應じ三百石を食みて江戸藩邸に在り、講書三十年、八十三歳を以て歿す。

龜井南冥

南冥名は魯字は道載、姪濱に生る。大阪の永富鳳に従ひ醫道を修め又山縣周南に師事して徂徠の説を奉じ、業成り儒と醫を以て立つ。學問博洽醫術研精兼ねて詩文に名あり、名聲籍甚教を請ふもの門に充つ。國主即ち甘棠館を興し南冥を以て教頭と爲すや、一藩翕然として之に歸す、朱學の徒之を羨望し百方陷擠し、遂に斥けられ館も亦廢せらる。南冥憤慨詩章を以て自から慰む。文化十一年三月會と火災あり自焚して死す年七十二。著す所南擠問答、辨惑錄、半夜物語、左傳講義、論語々由、南冥集其他數十種あり。一門文學に富み南冥の弟三子皆名あり、女詩人采蘋は實に門人原古處の女なり。

青柳種信

種信は通稱勝次、號して柳園と稱す。地行の一賤家に生れ、幼にして井上周徳の家僕となり給事の餘暇勉學懈らず、夙に皇朝の學に志し屢江戸に抵役するの途次、本居宣長に就て疑義を質し、最も典故に精しく考證に長ず。其江戸にあるや

加藤千蔭、村田春海等を屢訪して教を受け、其名早く大家の間に聞ゆ。而も終生不遇、天保六年十二月歿す年七十。筑前續風土記拾遺、淳和獎學院濫觴、烈女萬佐傳、防人日記、官家考、香推廟宮記、宗像宮略記、後漢金印考其他著書十餘種あり。

龜井昭陽

昭陽は南冥の長子にして名は昱字は元鳳、又空石、月窟とも號す。家學をうけて經史を涉獵し博識透達古文辭を善くす。廣瀬淡窓、旭莊以下來り學ぶもの門に充つ天保七年六十四歳を以て歿す。著す所、尙書考、古序翼、讀孟子、國語獨了、蒙史、峰山日記、月窓漫筆及捨草等あり。女少琴才藝あり、詩書に工にして采蘋と並び稱せらる。

仙 崖

仙崖は美濃の人、鎌倉圓覺寺に學び禪理に精しく和漢の學に通ず。寛政年中聖福寺の住職となり天保八年入寂す年八十八。超風脫俗、敝衣垢袴毎に寺内の虛

白院に居り書畫を作つて以て樂む。逸話甚だ多し。七代目團十郎長崎よりの歸途面會を請ひ其一瞥を得て江戸土産とす。其如何に高名なりしかを知るに足る。

お江戸では市川二かは知らねどもピンと跳ねたる海老の目の玉。

右の仙崖筆の軸物今尙ほ市川家に藏さるゝとぞ、其書畫詩文概ね是に類し奇想縦横變化極りなし。老人六歌仙あり。

皺がよるほ黒は出来る腰まがる頭が禿げる髪白くなる。

手は慄ふ足はよろめく齒はぬける耳は聞えず目は遠くなり。

身に添ふは頭巾、襟巻、杖、眼鏡、湯婆、温石、手便、孫の手。

くどくなる氣短になる愚痴になる出しやばりたがる世話やきたがる

聞きたがる死にともながる淋しがる心はひがむ慾深くなる。

又しても同じ咄に子を譽むる達者自慢に人はいやがる。

月形深藏

深藏名は弘字は伯重、漪嵐と號す、家世々本藩に仕へて百石を領す。弱冠父に従ひて江戸に抵り、古賀精里の門に學び一家を爲す、性硬直氣節を尙び、居常王霸の別を辯じて子弟を率ゐ、爲めに世に容れられず、子洗藏父の志を襲ぎて尊攘の大義を主張し一藩志士の中堅たり。藩深く父子を罪し其祿を收む、深藏幽閉二年疾を發し文久二年四月歿す年六十五、筑前の志士多く其門より出づ。

平野次郎

次郎名は國臣、福岡地行足輕の家に生る。初め小金丸氏を冒し後復性す。人となり倜儻にして大志あり、好みて書を読み武を講じ、古典に通じ國風に妙なり。眇たる微賤の身を以て夙に王政復古の大業を念ふ。安政五年都甲楯彦と變名し藩を脱して京都に上り、頼三樹三郎、梅田雲濱等と結び爲す所あらんと欲して志を得ず。僧月照と薩摩に走り、西郷隆盛に頼り日向に奔らんとす。月照歿し隆盛幽せらるゝに及び、宮崎司と稱し再び京都に上り。爾來九州中國の間に往

來して國事に勵む。文久元年冬薩摩に赴き『回天管見策』『尊攘英斷録』を島津久光に上り、天下に先んじて討幕を論じ、久光の意頗る動くを見て星馳上京し二年四月八日密かに闕下に伏して三大策を献す、其要は久光の上京を機とし大藩連合して幕府を仆し王政を復すべしといふにあり。即ち歌うて曰く

天津風吹けや錦の旗の手になびかぬ草はあらごとぞおもふ。

依て久光を姫路に要したるも依違して決せず、更に藩主黒田長博の江戸參勤を播磨大藏谷に要し勤王の大義を説く、長博病と稱し次郎を收めて急に國に歸り之を幽す。居る事一年皇威振ふに當り朝廷の特命により赦され、上京して學習院出仕を命せられ朝議に參與す、此時に當り次郎の名聲隆々たり。會々中山忠光大和に義兵を擧ぐ、次郎朝命を奉じ、抵れば既に罾を開き復た鎮撫の法なく、空しく京都に歸れば時局一變して義徒四散し、幕府大に次郎を索む。是に於てか酒行長門に至り、脱藩の同志藤四郎、戸原卯橋等と澤宣嘉を奉じ、文久三年

十月兵を但馬の生野に擧ぐ、衆千餘人、遙かに大和の義舉に應ず、蓋し勝敗を度外し只志氣を鼓舞して時勢轉換の機を作らんとするに在り。既にして大和の敗報至り出石、豊岡、姫路の兵來り攻む、次郎逸へ戦ひて破れ豊岡藩の爲めに捕へられ京獄に移さる。元治元年七月長軍幕軍と京都に戦ふや、其奮出を虞れ急に之を刺す年三十七。次郎居常國事を以て自から任じ、流離顛沛の裡にありて志毫も沮まず、京獄にあるや猶ほ同窓の爲めに神皇正統記を講じて志氣を鼓舞し又自國論を著はしたりき。曩に福岡の獄にあるに際し讀書筆硯の自由全く奪はれたるを以て、巧なる意匠と驚く可き根氣とを以て紙捻の字を案出し盡志録一卷、體勢辯一卷、制蠻策一卷、征寇說一卷、固圉集三卷、神武必勝論一卷を著す。神武必勝論は上中下三編に分ちて凡八千言、今畏くも九重の奥に藏せらる。又音樂を嗜み常に笛を弄び、福岡在獄中の如き疊の糸を抜き取りて壁に張り、或は毛髪を行厨の底に張りて一絃琴とし、彈奏自から慰めたり、其風流坦懷想

ふ可し。

中村圓太

圓太名は無二初は富次郎と稱す。才智絶倫文武の諸藝に通ず。安政三年脱藩し王事に勤勞する所あり、後藩に歸り意見封事を上り文久三年五月小呂島に流さる。三年六月赦に遇ひ、再び脱藩して長門に入り、遂に京都に上り四方の同志と交り、日夜國事を議す、無二の名遠近に聞ゆ。後捕へられ福岡の獄に繋れたるも同志の助により脱するを得、長門に走り土方久元と共に三條實美の執事となり。幕府征長の師を起すに及び、月形洗藏等と内外相應じ、五卿遷移諸藩解兵の議を策成せり。玆に於て潜行福岡に歸り大に爲すあらんとせしも、會々諸士と合はず、憤慨の極博多報光寺に詣り屠腹して死す年三十一、時に慶應元年正月なり。弟無可恒次郎と稱し、兄に従ひて長門に走り、元治元年七月長軍に従ひて京都に入り鷹司邸に戦死す年僅に二十四。

加藤司書

司書名は徳成二千八百石を領し、人となり雄偉にして才略あり、文武に通じ膂力衆に過ぐ。夙に尊攘の大義を唱へ一藩志士の首領たり。幕府征長の師を起すに及び、内は薩筑長三藩同盟の密約を爲し、外は尾張總督の廣島の營に使して征長罷兵五卿入筑の議を決し一襲の陣羽織三口の寶刀を賜はりたり、司書即ち今様を賦して想を叙す、綽々たる餘裕見るべし。

皇御國のものゝふは、如何なる事をか勉むべき、たゞ身に持てる真心を、君と親とに盡すまで

後參政に任じ軍事を掌る。既にして藩論一變し慶應の大疑獄に座し博多天福寺に於て自盡を命せらる年三十六。

當時處刑せられたるは黒田播磨、矢野相模を幽閉し、加藤司書、建部武彦、衣斐茂記、齋藤五六郎、森安平、尾崎惣右衛門、萬代十兵衛に自刃を命じ、月形

洗藏、海津幸一、鷹取養巴、伊藤清兵衛、森勤作、伊丹真一郎、江上榮之進、今中祐十郎、同作兵衛、安田喜八郎、中村哲藏、佐野建三郎、瀬口三兵衛、大神壹岐を斬に處し、野村望東、其孫助作、川合茂山、三坂小兵衛、筑紫衛等十六人を流刑に處し、其他幽囚さるゝもの無數。皆是れ錚々たる一時の選、是に於てか福岡復た人物なく、鎮西の雄藩空しく唯伏するの止むを得ざりしなり。

建部武彦

武彦名は自強七百石を食む、寛厚にして沈毅好みて兵學を講ず。加藤司書と並びて志士の領袖たり。藩の外交に當り京都にあるや國事に努力する所多く、最も幕府征長の不可を唱へ五卿入筑の議に與り、一藩の正義を振作す。慶應元年の大獄に坐し福岡安國寺に於て屠肚して死す年四十。

月形洗藏

洗藏名は詳字は伯安、父深藏の衣鉢を襲ぎて名聲大に見はる。幼より俊偉其藩

變修猷館にあるや嶄然頭角を顯はせり、一日藩主館に臨み生徒の輪講を聽くに際し、藩の批政を指摘直言して憚らず、遂に復た巒に上らず、其父に學び經學兵書を講ず。幕政衰へ海内騷然たるに及び、上書して時弊を痛論し又藩主に謁して尊王の大義、民庶の困憊執政の偷安、海防の急務を進説し、退いては學問氣節を以て一藩を鼓舞し、志士仰いで以て尊攘黨の泰斗と爲す。後俗吏の忌害する所となり幽囚二年餘、始めて赦さる。元治元年藩論征長解兵を主張するや、洗藏内に在て幹旋太だ勗め、西郷隆盛、高杉晋作の間に往來し、薩長の格執を解き三藩同盟の策を定め五卿を筑前に迎ふ。是に於てか一藩將に雄飛せんとする。可惜大獄に會し同志十三人と共に斬らる年三十八。

野村望東

望東は浦野勝幸の女名は元子、天資聰明にして氣慨あり、諸藝に精通し最も國風に妙なり。年二十四藩士野村貞貫に嫁す、貞貫亦風流の士にして勤王の志あ

り、夫妻得て善し。五十四歳にして夫を喪ひ、髪を剃りて望東と稱す、蓋し國音元は望東に通ずればなり。寡居の後京都に遊び、諸名家と唱和し名大に見はる。深く皇室の衰微を慨き志士の間盡力す。高杉晋作の筑前に奔るや之を平尾の山莊に養ひ、西郷隆盛の福岡に来るや亦迎へて時事を談す。既にして大獄に坐し姫島に流さる。望東深く同志の死を哀み、船若心經を血寫して之を弔へり。翌年の秋晋作等之を牢獄より奪ひ赤間關に匿し、後三田尻に移し厚く之を見る。慶應三年病を獲て同地に歿す年六十二、姫島日記の著あり。

福岡市案内記終

附 錄

九州沖繩八縣聯合共進會

第十三回九州沖繩八縣聯合共進會は、明治四十三年三月十一日より五月九日まで六十日間、我福岡市に於て開設さるゝなり。願れば去る明治十五年長崎市に於て第一回を開設してより年を閲する事二十八、回を重ねること十三、此間文物は長大足の進歩發達を示したるは贅言を要せず、之を去る明治二十年本市に於て開設されたる第五回に比するも、會場規模の宏大、出品種類の複雑、陳列方法の改善等寧ろ隔世の觀なくんばあらず。

會 場

縣廳裏手より佐賀堀を埋築し、更に因幡町の一部を合して三萬坪の地を得、左の模造洋館を建築せり。規模の宏大と建築の壯麗なるは土工並に建築費金三十

五萬八千六百圓を要したるに由りても知るべし。

本館	一、七二六坪	第二號館	七二六坪
特許館	四二六坪	參考館	四〇六坪
畜産館	六四八坪	温室	四三坪
冷藏室	一四坪		

右の外構内には苗圃、花園を設け審査室、事務室、音楽堂其他の附屬館を設置する。

出品種目

出品物は之を十七區に區分して陳列せるが、種類百四種、點數五萬點の多きに及び居れば箇數は莫大の數に達せるならん。されば陳列棚の延長も六千四百八十間即ち三里に達し、之を兩側に排列したるを以て一巡せんにも一里半の行程を要する譯なり。

- 第一區 農産品 玄米(粳米) 麥(小麥、裸麥、裸麥) 大豆、小豆、落花生、麻(苧麻、大麻) 輸出倭米、菜種、蘭草、檀實、葉藍、果樹苗、桑苗、種子。
- 第二區 農蠶用器械器具 農業用器械器具、蠶業用器械器具。
- 第三區 果物 柑橘、梨子、干柿。
- 第四區 蠶業生産品 蠶種、繭、生糸、真綿。
- 第五區 飲食品 紅茶、綠茶、砂糖(生糖、赤糖、白下糖、精製糖) 酒類(清酒、燒酎) 清涼飲料、醬油、製粉(麥粉、澱粉) 素麵及干銀鮓、罐詰、瓶詰、菓子、燻肉。
- 第六區 工産品 木蠟(生蠟、晒蠟) 種油、製藍、紙(和紙、洋紙) 莞蔴(花蔴、蔴蔴、疊表類) 麥秆眞田、漆器、金屬器、機械、硝子及其製品、木竹製品、介珊瑚の加工品、度量衡、家具、文具、玩具、洋服、裝身具及携帶品(帽子、靴、足袋、履物、傘、洋傘、洋杖) 提灯、團扇、石鹼、セメント、窯製品。
- 第七區 染織物 粗織物、綿織物、雜織物、色染物(絞類、友仙形付類) 刺繡、編物、粗物、糸類
- 第八區 陶磁器 陶器、磁器、土器(素燒物、土管、瓦、煉瓦)
- 第九區 水産物 鮑(烏賊、柔魚) 鱧、鰻、鰻節及鱈節、海參、干鮑、煮干鮑、干鱧、干鰻、乾製鹽藏の魚介類、海藻類、眞珠、珊瑚、介殼。
- 第十區 漁撈具 漁船模型、漁具、漁網地及網糸。

第十一區 林產物 木竹材、椎茸、木炭、苗木、種子、樹皮、竹皮、染料。

第十二區 鑛產物 鑛物及土石類。

第十三區 畜產 牛、豚、鷄。

第十四區 肥料 干鰹、骨粉、油粕類。

第十五區 方法成績 第一區乃至第十四區各出品物其他產業に關する方法成績。

第十六區 特許品 特許品、意匠登錄品、實用新案登錄品。

第十七區 參考品

審査及褒賞

出品物は第十七區參考品を除く外之を審査し、成績優等のものは其出品人に對し、一等より四等に至る等級により、農商務大臣より褒賞を授與し。四月三十日授與式を舉行す。又參考品出品者に對しては事務長（主催縣知事）より謝狀を贈呈す。

觀覽

開會中は毎日午前八時より午後四時まで公衆の觀覽を許す（時宜により時間を伸縮し又觀覽を差止める事あり）觀覽料は一人三錢にして、夜間開場の場合は入場料五錢を要す。

各縣事務所

共進會開設中に於ける各縣事務所は左の如し。

縣名	所在地	電話番号
熊本	藥院町	九九四
佐賀	須崎裏町	九九五
鹿兒島	春吉一番町	九九六
沖繩	須崎裏町	九九七
長崎	春吉一番町	九九八
大分	藥院町	九九九

宮崎

藥院町

八九〇

各縣賣店

各縣賣店は共進會正門に向ひて右方に設置し、聯合縣内の物産を販賣せるが、福岡市工藝團體聯合會は特に之と相並びて二百二十坪の建物を建築し福岡市賣店に充てたり。

馬匹共進會

第一回九州沖繩八縣聯合馬匹共進會は明治四十三年四月二十三日より五月六日迄二週間、共進會場内に於て開設す。

福岡縣協賛會

第十三回九州沖繩八縣聯合共進會福岡縣協賛會は共進會の事業を協賛し來觀者に便宜を與ふる目的を以て組織せらる。經費は會員の寄附金を以て支辨し總額十萬圓に達す。

接待所

接待所は會場内に設置し、又た東西兩公園に休憩所を設けて來觀者の接待に充つ。

演舞館

會場内に設置し總建坪二百坪にして千五百人を收容し得べく該經費約八千圓を要したり。共進會開期中博多三券藝妓の手踊を始めとし、博多仁和賀、筑前琵琶、新派演劇、歌舞伎劇、浪花節等を開演する筈なり。

電燈裝飾

共進會夜間開場と共に各館に電燈裝飾を施し一大光彩を添ふる事としたるが總箇數八千燈、費用二萬四千圓、美觀想ふべし。尙夜間開場日數は二十日間の豫

定なり。

餘興

共進會に景氣を添ふる爲め其開期中に於て松囃し、山笠等の行事舉行せらるべく、又協賛會補助の下に、古書畫展覽會、神代古器物展覽會、煙花大會其他各種の展覽會等開設さるべく、尙構内の地を劃して餘興地とし、動物園、活動寫眞等三十餘の興行物あり、福岡日々新聞社、九州日報社の接待所、名物鶉餅の賣店を始め、繪葉書店、飲食店等設置さる。

諸集會

共進會開設を機とし農工銀行大會、水産集談會、教育大會其他各種の集會は當地に於て催さるべく、旅館の設備、會場の撰定につき協賛會に於て斡旋の勞を執れり。

案内記

縣協賛會に於て福岡縣案内記を市賛助會に於て福岡市案内記を編纂發行して、本縣本市を紹介するに努め尙紀念繪葉書を發行し紀念帖を作製せり。

福岡市賛助會

福岡縣協賛會は元と縣市聯合を以て組織せらるると雖、尙ほ市は主權地として萬般の設備に遺憾なきを期する爲め、特に市參事會員、市會議員、商業會議所議員を以て市賛助會を組織し、縣協賛會の事業を賛助し併せて本市施設の完成に勉む。同會役員は會長、副會長各一名委員二十五名にして、會長は市長、副會長は市助役とし、委員は夫々分擔を定めて各般の事に従へり、同會の經費は一萬圓なり。

教育品展覽會

福岡縣教育會の主催にて明治四十三年三月二十九日より四月七日迄十日間、當市に於て九州沖繩八縣教育品展覽會を開設す。會場は福岡高等小學校因幡町分校、順天館、並に隣接地に三百餘坪のバラックを建築して之に充つる事とせり尙四月四日教育大會開設の筈。

附 錄 終

明治四十三年三月十五日印刷
明治四十三年四月十八日發行

定價金參拾錢

著作人兼
發行人

福岡市土手町二十番地
溝 部 信 孝

印刷人

東京市日本橋區兜町二番地
神 谷 岩 次 郎

印刷所

東京市日本橋區兜町二番地
東京印刷株式會社

發行所

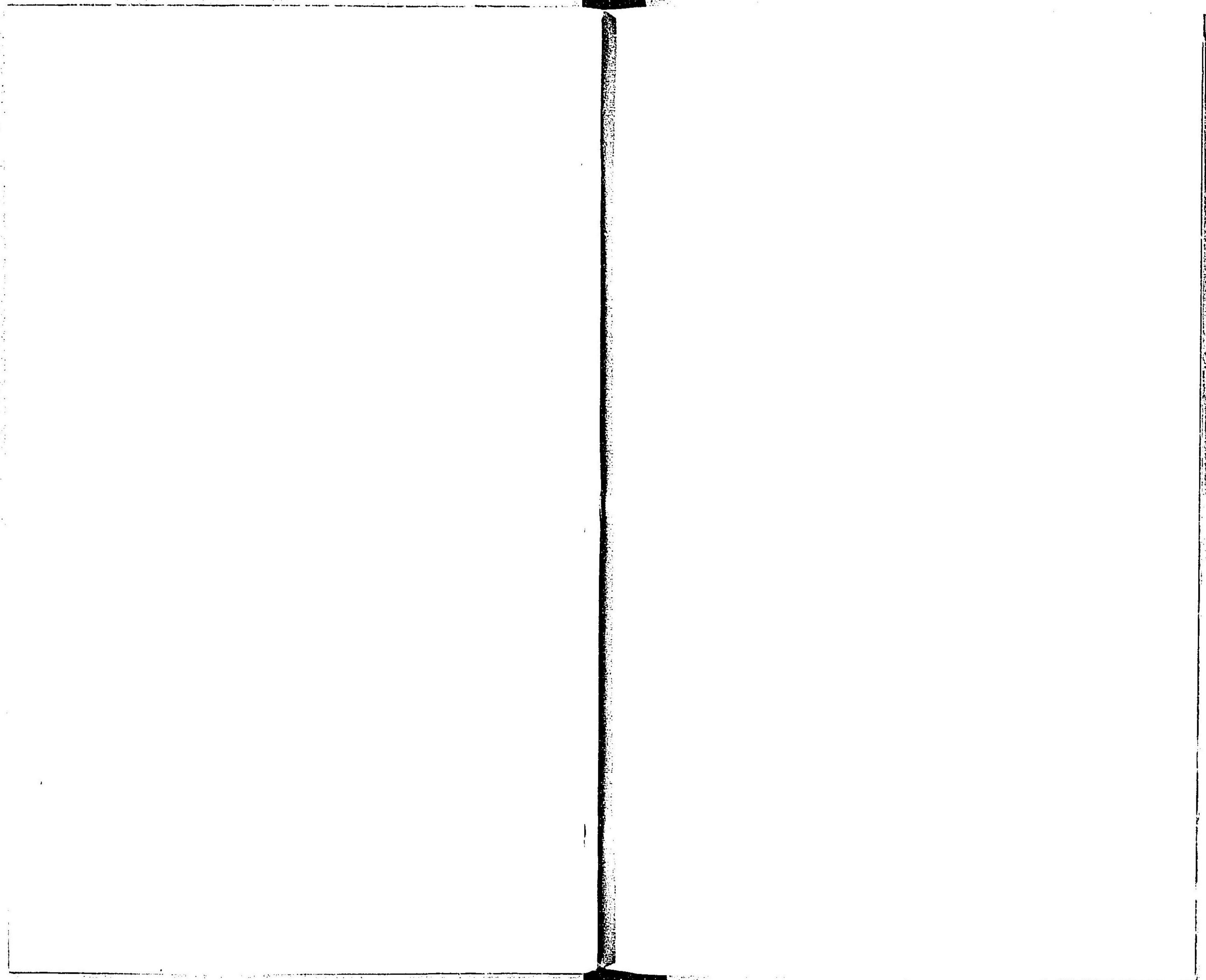
福岡市中島町
積善館支店

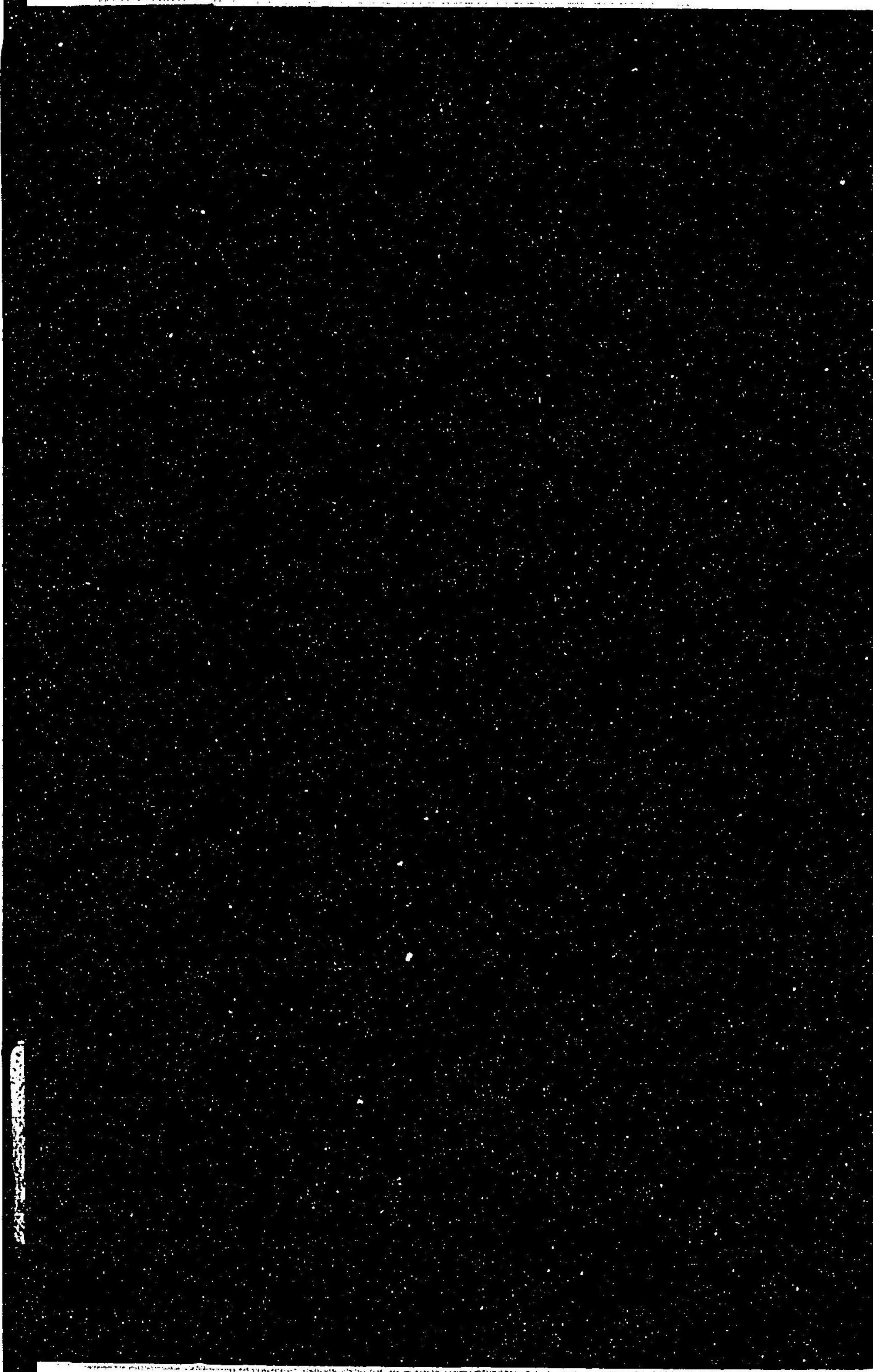
264
29

21-7M 8



紫雲山





特20
212

026307-000-5

特20-212

福岡市案内記

溝部 信孝/著

M43

ADC-4093

